

郷

昭和64年
1月号

友

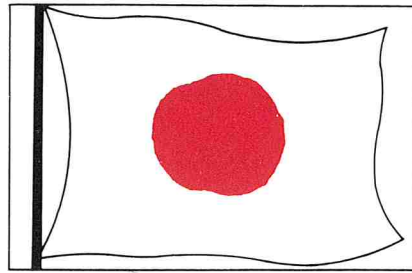
1989
January

昭和三十一年八月十一日創刊
昭和六十四年一月一日（毎月一回）日発行
第三十五卷第一号（通巻四〇七号）



—自然美散策(爪木崎野水仙群落)—(解説表2下段)

本部組織の 揺るぎなき 確立を期す



表紙写真の解説

写真家 宝蔵寺 忠

幕末、日本開国の重要拠点となり、今に語り伝えられる歴史物語には欠く事の出来ないのが、伊豆半島の最南端にある下田港で、この下田湾を抱くようにして、東側の相模灘に突き出ている半島が須崎半島である。この東南端の丘陵地が爪木崎で、先端には無人の爪木崎灯台が、灯塔以外はなにもなく素っ気なく立っている。

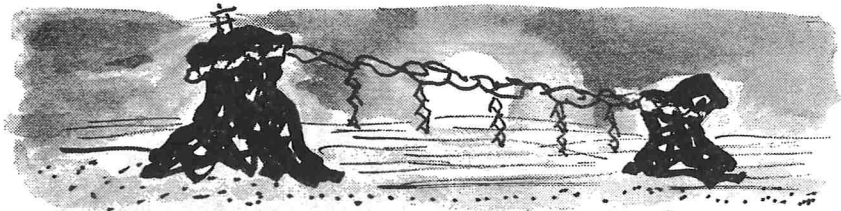
爪木崎は岬といえども、こんもりした丘陵が海に向ってこじんまりと欠び、小さな入江をかかえているだけのもので、無人灯台はこの岬の風景にはまことによく似合っている。灯台の左手の箱庭のような傾斜地が『池の段』と呼ぶ草原で、冷たい冬の日、あたり一面に十二月から一月末にかけて百万株といわれる野水仙の群落が風にゆれて咲き乱れ、丘陵一帯に甘い香りを漂わせる。越前岬と並び称される野生水仙の一大群生地として有名である。毎年十二月二十日から二月十日までが『水仙まつり』で、野生や水仙酒のサービスなどで多くの観客が訪れる。水仙の香りにむせ、磯の香とともに食べるさざえの壺焼は、まるで自然を一まとめにして食べるような感じである。ここが一番美しい景観は日の出時で、海を割って出る金色の太陽に照り映える野水仙の風情は見事というほかはない。

(静岡県下田市爪木崎所在)

郷友目次(1月号)



巻頭言.....	(2)
年頭の辞.....	田中 耕二(3)
神風は矢張り吹いた.....	小島 末喜(26)
大東亜戦争は日本が仕掛けた侵略戦争か.....	三上 照夫(28)
国防に関するシンポジウム(三).....	(46)
真の日本人(一).....	大塚 道廣(52)
ブッシュ新政権のアメリカ合衆国.....	齋藤 忠(56)
軍事常識―日米共同訓練.....	久松 公郎(60)
「サイレント・ミッション」(六).....	訳者・柏木 明(63)
現代に見る間接侵略・革命(九).....	狩野 信行(68)
終戦秘話・北方領土不法侵入ソ連軍撃砕(最終回).....	奥田鑽一郎(72)
郷土の城(十八).....	佐々木信四郎(74)
自衛隊だより.....	(78)
新隊員の日(112)(え・柏木康武).....	牧野 良祥(80)
戦史物語―「中隊長の回顧」から.....	森松 俊夫(81)
地方だより(島根・富山・熊本).....	(84)
郷友基金醸金者ご芳名(通算46回目).....	(87)
俳壇・歌壇・柳壇.....	(88)
編集後記.....	(96)



「常歩無限」

新しい年を迎えた。いわゆる二十一世紀に一步近づいたわけである。

世は挙げて二十一世紀到来の近きをいい、いろいろの夢を描いてめまぐるしく動いている。うっかりすると取り残されそうな気がする。

そんな中で、旧年十月二十三日のテレビ番組竹村健一氏の「世相を截る」で、二十一世紀は日本の時代になるのではないかといひ、日本文化の底にある「和」がいまアメリカで見直されているといっていたのが関心を惹いた。

数年前の雑誌「知識」の新年号の「甦る聖徳太子の時代」という対談記事の中で、梅原猛京都市立芸術大学々長と評論家草柳大蔵氏が、太子の「和」について語り、一般には十ヶ条憲法第一条冒頭の「以和為貴」が取り上げられているが、その後に「人皆党あり、また達れる者少し、是を以て、君父に順わず、また隣里に違う。然れども上和らぎ下睦びて、事を論うに諧うときは、事理自ら通ず、何事か成らざらん」と続くのであって、太子は、「和があると十分に議論できる。議論できれば、必ず理が出てくる、理があれば、事は必ず成る」と説いておられるのだと述べている。

これらは、新しい技術と逞ましい経済が二十一世紀を形作るように思われるが、同時にその底には、日本人が古来大事にして守り育てて来た「真なるもの」が生かされなくてはならないということを示唆しているのではなからうか。

「常歩無限」は、昨秋文化勲章を受けた樞原考古学研究所の初代所長末永雅雄教授の座右の銘という、また、「去年今年つらぬく棒のようなもの」は子規の句だ。二十一世紀は、そのような覚悟と精進の上にこそ築かれていくものと年の始めに更めて思う。

年頭の辞

会長代行

田中 耕二

天皇陛下御平癒の一日も早らんことを全国会員と共に只管御祈り申し上げます。

終戦より四十四年、国民斉しく敗残の身、誰れが今日の「繁栄」を予想したでしょうか。「平和と繁栄」を喜ぶ前に英霊と戦火の犠牲となられた幾百万の方々に対し改めて深甚の追悼の誠を捧げずには居られな
い。

戦後わが国の意外に早い復興と経済的繁栄は固よりわが国民の勤勉努力によるものなるも、別の角度からこれを見れば、皮肉にも米ソ対立の所産とも云えるのではなからうか。

わが国の繁栄、所謂経済大国なるものは何んとなく「肥満児」に似て真の健康体ではなく、独立国家としては何か一本抜けているように見えるのは老兵のヒガ目の故であろうか。それは何かと云えば「祖国愛・祖国の防衛」ということが稀薄乃至は等閑視されていることに由ると思う。祖国愛・祖国の防衛を欠いた上での経済的繁栄は所詮砂上の楼閣に過ぎまい。

他国が自らの膏血を以って国際的責務を果しているのに、日本は憲法上の制約を理由に金銭で代替しようとする。正に金銭を以って徴兵を逃れようとする成金根性であって、何れ国際与論の痛撃を喰らい、高いつ

ケを突きつけられること必定なりと懼れるものである。

われらは真の平和は拱手傍観していて手に入るものでないことを知り「治に居て乱を忘れず」の心構えで、徒らなる悲憤慷慨や大言壮語する前に、先づ近隣より、先づ郷党より志を同じうするものを求めて相共に連盟の使命を地道に実践することが連盟会員の責務なりと思う。

連盟は一昨年、昨年と富山・水戸で著名講師を招聘して講演会を催うし、広い意味での防衛思想の普及に努め、又今後も続けてゆく考えであるが、これとは別に昨年から連盟本部に新に「防衛講座」を特設し、一般青年社会人や大学生を対象に毎月一回勉強会を開いている。彼らも興味をもって熱心に勉強をつづけてくれている。現在はまだ小規模なるも将来は連盟の目玉的事业として育成拡大したいものと関係者は意欲に燃えている。各支部に於ても連盟の使命達成と組織の活性化のため実情に即して創意工夫、たとえ小規模のことでも着手されんことを切望して已まない。

広瀬会長の殉職とも云うべき逝去以来空席となつてゐる連盟会長も本年三月の定期総会に於て新に選任せらるべく、又これに伴い本部役員も大幅に更新が予想される。新会長の下、新進気鋭の陣容により連盟も面目を一新し、活発なる活動を展開することを祈つて已まない。



迎

春

会株式

大林組

大林道路
会株式

三菱建設
会株式

鹿島建設
会株式

新日本製鉄
会株式

会株式
竹中工務店

ホテル札幌会館

会株式
資生堂

株式会社
東芝

東邦生命保険
会相互

三菱電機
会株式

東京電力
会株式

京浜急行電鉄
会株式

会株式
富士銀行

東芝イーエムアイ
会株式

(順不同)

頌

春

株式
会社
横
浜
銀
行

日
本
電
氣
株式
会社

日
本
燃
料
株式
会社

大
成
建
設
株式
会社

伊
藤
忠
商
事
株式
会社

朝
日
生
命
保
險
相
互
會
社

富
士
重
工
業
株式
会社

株式
會
社
三
井
銀
行

三
菱
地
所
株式
會
社

三
井
生
命
保
險
相
互
會
社

富
士
ボ
ト
リ
ン
グ
株式
會
社

社
團
法
人
日
本
經
濟
団
体
連
合
會

三
菱
重
工
業
株式
會
社

大
火
災
正
海
上
保
險
株式
會
社

株式
會
社
松
坂
屋

迎

春

<p>関西電力 株式会社</p>	<p>ダイキン工業 株式会社</p>	<p>トヨタ自動車 株式会社</p>	<p>石川島播磨重工業 株式会社</p>	<p>株式会社 住友銀行</p>
<p>ダイセル化学工業 株式会社</p>	<p>三菱自動車工業 株式会社</p>	<p>近畿日本鉄道 株式会社</p>	<p>旭化成工業 株式会社</p>	<p>財団法人 防衛弘済会</p>
<p>協栄生命保険 株式会社</p>	<p>久保田鉄工 株式会社</p>	<p>朝日麦酒 株式会社</p>	<p>日本鋼管 株式会社</p>	<p>住友金属工業 株式会社</p>

頌

春

住友生命保險

相互
會社

清水建設

株式
會社

株式會社
熊谷組

大阪瓦斯

株式
會社

フジタ工業

株式
會社

共同印刷

株式
會社

三井不動産

株式
會社

川崎重工業

株式
會社

三菱プレシジョン

株式
會社

株式會社
第一勸業銀行

洗心懇談會

軍恩連盟全國連合會

偕行會社

日本遺族會

中央乃木會

千鳥ヶ淵戰没者

墓苑奉仕會

日本傷痍軍人會

隊友會

東郷會

水交會

靖國神社

三笠保存會

日本郷友連盟

武蔵建設

株式
會社

日本產業警備保障

株式
會社

春

迎

参議院議員

熊谷太三郎

池上巖

(日本郷友連盟相談役)

〒273-01

千葉県鎌ヶ谷市南初富二丁目一五
電話 〇四七四(四五)六八二二

参議院議員

永野茂門

有末精三

(郷友連盟名誉顧問)

〒156

東京都世田谷区松原一丁目三三
電話(三三二)一六二三

日本郷友連盟相談役

寺崎隆治

〒182 東京都調布市若葉町一丁目
電話 〇三(三〇七)六一一一

共産圏動向研究所 所長
KDK麴町研究所 関西支局長
北方協会理事 関西支局長

共産圏問題
評論家 扇貞雄

〒657

神戸市灘区水道筋三丁目一〇
☎(〇天)八〇二一三三三三
FAX(〇天)八〇二一三九八二
自宅 神戸市灘区畑原通五丁目一〇
☎(〇天)八〇二一三三三三

半井顕雄

(郷友連盟相談役)

〒167 東京都杉並区今川二丁目三
電話(三九九)七〇〇〇

春

頌

連盟本部顧問

三木正一

〒232 横浜市南区南吉田町二三
電話 〇四五(二六一)七三七八七

草地貞吾

(日本郷友連盟相談役)

〒182 東京都調布市佐須町
電話 〇四四(八八)四六八四
五一―四一七

井本熊男

〒155 世田谷区代沢一―六―六
電話 〇三四(四一四)二一四〇

全国近歩一会総務幹事

甲谷悦雄

財団 法人平和・安全保障研究所
研究委員
事務局長
塚本勝一

佐薙毅

〒186 国立市東一―二二―二

大西一

〒236 横浜市金沢区平潟町三二番
電話 〇四五(七〇二)六四三二
二一七〇二

片木良平

〒243-04 神奈川県海老名市
国分三八八七の一
電話 〇四六(一三一)二四八

藤田正路

〒142 品川区小山七一五―四
電話 〇三(七八二)三六二〇

伴德智加

〒243 厚木市愛甲一―三―三七
(郷友連盟参与)

弁護士 輿石睦

〒141 品川区北品川六一―二二
(郷友連盟参与)

原守

〒152 東京都目黒区八雲三四―六
(郷友連盟参与)

森武次

〒214 川崎市多摩区
西生田三一―三三―三

岸本重一

〒177 練馬区関町北―丁目三―二
電話(九二〇)二二三一

上田泰弘

〒228 座間市緑ヶ丘三―四―九

今岡豊

〒227 横浜市緑区つつじが丘
二四―一三

竹澤力夫

〒331 大宮市日進町一―一〇〇八
電話 〇四八六―六三二六八四九

三国直福

〒272 市川市大町七六
(郷友連盟参与) 五五才

迎

春

<p>橋本秀信 (郷友連盟参与)</p> <p>〒155 東京都世田谷区代沢 四丁目一四一八 電話 〇三(四二二)二三六二</p>	<p>松村弘 (郷友連盟参与)</p> <p>〒280 千葉市東本町七一二</p>	<p>中島親孝</p> <p>〒153 目黒区目黒 三一五一五</p>	<p>舞敏方</p> <p>〒168 東京都杉並区永福 二一四八一七</p>	<p>碓井準三</p> <p>〒259-01 神奈川県中郡大磯町 石神台二丁目 電話(四三)(七二)〇一七一</p>	<p>磯矢伍郎</p> <p>〒251 藤沢市片瀬海岸三三三</p>
<p>井川静男 (郷友連盟理事)</p> <p>〒135 東京都江東区東陽 二一三一六一四〇五 電話(六四七)七七〇二</p>	<p>中川勇 (連盟理事)</p> <p>〒28 相模原市上頼四一四三六 電話(四三)四二一六八八九番</p>	<p>高品武彦 社団法人日本郷友連盟 理事</p> <p>〒167 東京都杉並区天沼 二二二八一三</p>	<p>小田原健児 (郷友連盟理事)</p> <p>〒270-11 我孫子市若松一五〇一五 電話(四七)(八三)〇七〇七</p>	<p>桑原行男 (郷友連盟理事) (神奈川県支部理事)</p> <p>〒232 横浜市南区中里一七一二 電話(四五)七二二〇三八三</p>	<p>伊藤喜代子</p> <p>〒960-14 福島県伊達郡川俣町 大字鶴沢字油田三番地 電話 〇二四五(六五)三〇七七</p>
<p>力石禎一 (連盟理事)</p> <p>〒565 吹田市菁山台四丁目四九 電話 〇六(八七二)五一八六</p>	<p>藤根伊三郎 代表取締役</p> <p>〒500 岐阜市竜田町九一―五 電話(五三)七四)五九〇〇番</p>	<p>株式会社中部ビケン</p> <p>〒152 東京都目黒区南ノノ六ノ六 電話 〇三(七一七)一四〇〇</p>	<p>牧野茂 (郷友連盟参与)</p> <p>技術士(船舶)</p>	<p>狩野信行</p> <p>〒231 横浜市中区鷺山三三二</p>	<p>日本郷友連盟理事</p>
<p>生亀元</p> <p>〒250 小田原市小台九四一四 電話 〇四六五(三七)一八八四</p>	<p>日本郷友連盟理事 同神奈川県支部相談役</p>	<p>岡田喜美子</p> <p>〒921 金沢市三馬三一―一〇六 電話 〇七六(二四五)一〇二〇</p>	<p>石川県郷友会副会長</p>	<p>國光俊男</p> <p>岩国市議員 岩国市車町二一―一四一―一五 〇八二七(二二)一〇〇四</p>	<p>日本郷友連盟理事 山口県郷友会青年部長</p>

春

頌

愛知県郷友連盟
日本郷友連盟愛知県支部

会長 近藤伝六

〒491 一宮市浅野山王四番地
電話〇五八六一七七―三三六一

日本伝統俳句協会

会員 野島一良

〒186 東京都国立市東二二二六
電話〇四二五(七六)三三六〇

郷友連参与・隊友会相談役
協和協会国防部会副会長
水産エンジニアリング社長
エメラルド・パラオ航空會長

浦 茂

住所 東京都港区南青山ノ九ノ五
電話四〇一一五八六一

日本工機株式会社
専務取締役

近藤 靖

〒177 東京都練馬区大泉学園町
七―十二―二十九

郷友連盟理事

石隈辰彦

〒248 鎌倉市佐助二―一〇―四

(他)日本郷友連盟理事

越智誠一

社団法人
日本郷友連盟理事

吉田英一

自宅
大阪市天王寺区味原町四ノ十
電話(七六三)三三五一番

白菊遺族会

會長

木村可縫

外役員一同

日本郷友連盟理事
茨城県支部副會長
隊友会茨城県連會長
勝田市自衛隊協力会顧問

小林 利

誠心堂藥局
自衛隊施設学校売店

〒312 勝田市東大島一―四―二
電話(三五三)七二(四)七四四

和歌山偕行会

會長 根来卓美

〒641-64 和歌山県那賀郡
打田町東三谷六一六

迎

春

昭和六十四年元旦

日本市民防衛協会

〒103 中央区日本橋3-5-12 吉野ビル7F
電話 03-271-0262~3

会 長 三原 朝雄(前衆議院議員)

理事長 谷藤 正三(元北海道開発庁事務次官)

常務理事 植村 厚一(植村技研工業(株)会長)

理事 事 富樫 凱一(元本四連絡橋公団総裁)

” 佐藤 和男(青山学院大学教授)

” 都倉 栄二(世界の動き社理事長)

” 丸山 昂(元防衛庁事務次官)

” 能村龍太郎(太陽工業(株)会長)

” 西脇 安ウイーン(大学名誉教授)

事務局長 理事 福富 繁(元陸将)

監 事 長崎 正造(放射線影響協会会長)

日本燃料株式会社
代表取締役社長

木 山 正 義

会社 〒160 新宿区新宿一ノ一〇ノ三

電話〇三―三五四―〇七〇―(代)

自宅 〒157 世田谷区成城二ノ三六ノ二

(社)全日本銃剣道連盟

会長 久保田 茂

理事一同
職員一同

三和記章工芸社

〒山 東京都台東区元浅草
電話(八五四) 五四五〇番(代)

春

日本郷友連盟本部理事
日本民主同志会会長

松本明重

雲濤居

京都市山科区日の岡堤谷町七五一―一
電話 〇七五(五九二)〇四〇四

防衛政策研究会

名誉会長 三原朝雄
会長 堀江正夫
副会長 田中兼五郎
理事 長 木村元岳
事務局 長 細川修

日本郷友連盟 (北海道支部副会長 兼 帯広支部会長)
日本銃剣道連盟 ()
日本馬術連盟 ()
宮坂建設工業株式会社

取締役社長

宮坂文一

取締役副社長

宮坂寿文

本社 帯広市西四條南八丁目十二
電話(〇一五五)二三一九一五
支社 札幌市中央区南六条西十七丁目
電話(〇一一)五六一一二〇三五
出張所 旭川市・釧路市・苫小牧市・東京都

社団法人 全国自衛隊父兄会

名誉会長 坂田道太
会長 山下元利
副会長 堀江正夫
同 小田村四郎
同 矢崎新二
同 上妻正康
事務局 長 兼

頌

春

財団法人・日本国防協会

會長 保科善四郎 常務理事 佐藤 永充
 副會長 田中 龍夫 同 飯山 茂
 同 有馬 元治 常務理事 永峯 達男
 同 佐藤 毅 理事 平野 晃
 同 天野 良英 同 保利 重三
 同 渡辺 隆一 同 佐藤 久美
 同 板谷 伊助 同 高岡 正克
 常務理事 鈴木 正 同 花輪 清隆
 同 伊吹弥寿夫 監事 氏家 卓也
 同 成瀬 恭 同 榎原 秀夫
 同 金垣 茂

〒一〇〇
 東京都千代田区永田町二一〇一（TBR四〇七号）
 電話〇三（五九三）〇四八〇・（五八一）四〇〇一
 京橋分室「防衛展示ルーム」〇三（二七八）九七二七
 〒一〇四東京都中央区京橋二一・四第二荒川ビル

迎

株式会社 海援舎

永井 昇 須藤 吉樹
 木山 正義 石博 信敏
 安藤 信雄 松代 格三

〒一〇〇
 千代田区有楽町一―八―一 日比谷パークビル九二二
 電話 〇三（二一四）二二八九五

軍恩連盟

全国連合会

會長 岡田 広
 副會長 柳沢 千秋
 同 稻葉 重雄
 同 藤江 弘一
 理事長 矢崎 忠

東京都目黒区駒場三十三元
 TEL (四六九) 五〇四七

記念艦 三笠

財団法人

三笠保存会

會長 金森 政雄
 副會長 板谷 隆一
 同 原 徹
 同 岡本 良平
 理事長 常広 栄一
 事務局長 坂本 陸

横須賀市稲岡町無番地
 電話〇四六八（二）五四〇八
 五二二五

財団法人 水交會

會長 石隈 辰彦
 副會長 鮫島 博一
 副會長 岡光 吉彦
 副會長 時清 俊彦
 理事長 清水 昌
 事務局長 井上 頼昌

頌

春

野中俊雄

栗原光孝

白笹稻荷神社社務所

〒257 神奈川県秦野市今泉一〇八九
電話 (〇四六三) 八一—〇二五六

日本郷友連盟参与
神社本庁参与

兼事務局長	同	同	同	同	同	同	理事	副會長	會長	中央乃木会	宮司	名譽宮司	乃木神社
桑原嶽	西尾欣是	齋藤五郎	田中象三	大元重夫	桂鎮雄	中川勇	横田洋	甲谷悦雄	水野一夫	水野一夫	高山亨	高山貴	

事務局長	理事	副會長	會長	東郷会	相談役	同	同	同	責任役員	宮司	名譽宮司	東郷神社
田中健一	岡光吉彦	石橋幹一郎	石橋幹一郎	久保田芳雄	松永善作	美澤傳次郎	石田捨雄	長束嚴	筑土龍男	大貫良夫		

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	相談役	陸軍經理学校同窓会
吉川宏	森尾正	小林精	小島貢	明知芳隆	中谷寛鎮	安岡義明	前川昌三	山内俊夫	平山俊一	飛田知宣	熊谷卓次	伊藤光信

事務局長	理事長	同	同	副會長	會長	財団法人	偕行社
最上貞雄 (54期)	原多喜三 (50期)	田中兼五郎 (45期)	瀨島龍三 (44期)	白井正辰 (43期)	竹田恒徳 (42期)		

春

迎

社団法人

隊友会

會長 江崎 真澄
副會長 中村 龍平

同 三好 秀男
同 竹田 五郎
同 大賀 良平
同 吉野 實
同 鈴木 敏通
事務局長 成重 光國

社団法人 日本郷友連盟 北海道支部

札幌市自衛隊協力会
西区協議会
會長 鎌田兵一郎

メテカル・サーピス社取締役

出光興産(株)販売店

国光商事株式会社
ヒカリ石油株式会社
ミツワ石油株式会社

代表取締役會長

神田 八雄

〒104中野区東中野一―七―一
電話〇三(三七一)六一六一

岩手県支部

會長 高橋正藏
副會長 宮田勇吉
同 高橋悦郎
理事長 細田嘉一
事務局長 橋本広治

全国自衛隊父兄会

東京都支部連合会

會長 上妻正康
副會長 岩崎弥之助
同 小黒哲夫
同 吉田光男
同 石瀬佑次
同 比留間 暁
同 神藤文雄
同 富樫行雄
同 峯岸安治
同 奈良二信
同 菊田治良
同 菅原章
同 本橋茂夫
同 小池文二
同 杉山文基
同 星野基
監事

山形県支部

會長 板垣清一郎
外 會員一同

〒990山形市薬師町二の八の七五

財団法人

千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会

會長 瀨島 龍三
副會長 伊藤 達二

同 原文兵衛
同 八木 哲夫

理事長 和田 盛哉
常務理事 宮崎 正直
同 野口美喜雄

社団法人日本郷友連盟 福島県支部

會長 矢内喜一
外 會員一同

〒960福島市春日町十三番八号
電話(〇四五)三三一八三三〇

頌

春

社団法人日本郷友連盟
名誉会長

杉田 一次
田中 耕二

味岡 義一
(郷友連盟理事)

柏木 明
(郷友連盟理事)

〒158 東京都世田谷区東玉川一丁目三番
電話〇三(七二九)九四六二

〒107 東京都港区南青山一丁目三番
電話(四〇七)八七五八

郷友連盟会長代行

〒194
町田市玉川学園二丁目一五番一六
電話〇四二七(二五)八六二八

梅野 文則
(郷友連盟理事)

佐藤 文夫
(郷友連盟理事)

〒352 新座市堀ノ内二丁目一〇番
電話〇四八四(七九)二八八六

小平市学園東町二丁目三五番三
電話〇四二三(四二)〇八一五

日本郷友連盟
副会長

星野 清三郎

赤羽 根 澈
(郷友連盟副会長)

河津 幸二郎
(郷友連盟理事)

香取 穎男
(郷友連盟理事)

〒215
川崎市麻生区百合丘三丁目三番
電話(四四)九六六一〇三二七

〒228 座間市緑ヶ丘三丁目四九番三
電話〇四六二(五二)二五六二

〒134 江戸川区西葛西六丁目六番四
電話〇三(六八八)七四〇三

〒227 横浜市緑区もみの木台七丁目
電話〇四五(九〇)九〇四六

上妻 正康
(郷友連盟副会長)

倉岡 愛和
(郷友連盟理事)

岡田 玲子
(連盟婦人部担当理事・婦人部長)

矢部 廣武
(日本郷友連盟理事)

〒164 東京都中野区南台四丁目十四番
電話(三八一)五六九五

〒279 浦安市美浜一丁目六番七
電話〇四七三(五五)七三〇八

〒174 板橋区常盤台三丁目七番二三
電話〇三(九六〇)〇〇五二

〒108 港区芝浦四丁目三十四番
電話〇三(四五七)一四二〇

春

迎

佃 藤 吾
(郷友連盟理事)

177 東京都練馬区石神井台三三三
電話〇三九九六七六三二

福岡 靖也
(郷友連盟理事)

350 川越市山城一六一一〇
電話〇五三〇六八八八六

後藤 修一
(郷友連盟理事)

232 横浜市南区庚台六一一四〇
電話〇四五三三〇四七一四

財団法人

神奈川県遺族会

会長 高橋常明

外役員一同

〒233 横浜市港南区大久保

一丁目八の十
電話 〇五八四二四二四三

青森県支部

支部長 葛西彦逸

副支部長 下山繁十郎

副支部長 長谷川勝雄

同 斉藤幸男

同 中野鉄男

同 今武美

(社)日本郷友連盟
福井県支部

日本郷友連盟 千葉県支部

会長 長野崎弘夫

副会長 渡辺源一

副会長 森川玄六

同 大木勝

同 高橋章

同 菅谷禧一

同 岡田正秋

同 岡田正秋

同 岡田正秋

同 岡田正秋

同 岡田正秋

同 岡田正秋

同 岡田正秋

東京都支部

会長 原文兵衛

副会長 加藤義秀

同 安達泰矩

同 安達泰矩

同 中島一明

同 中島一明

同 中島一明

同 中島一明

同 中島一明

同 中島一明

同 中島一明

同 中島一明

同 中島一明

松江市連合郷友会

会長 高尾幸吉

副会長 佐野伊左実

同 長岡利勝

同 福井繁一

同 原野繁雄

外役員一同

頌

春

東京都郷友会

水越吉次
伊沢英二
大和田博
堀口雅男
内田安雄
豊田春平
杉本栄三
広沢市郎
上田賢寿
平沢澄子
小林知高
小井森二

荒川区郷友会

最高顧問 天野公義
会長 安島徳
副会長 野尻博
同 柏倉定治郎
同 高橋勸三郎
同 高野英夫
同 高橋勸三郎
同 外役員一同

神奈川県支部

会長 天野良英
副会長 鈴木忠一
同 平沢末吉
同 二榎木久二
同 種田百一
同 中島国太郎
同 桑原行男
副理事長 三品幸三郎
同 泉政雄
同 手塚定吉
同 婦人部長 佐生ヨシイ
同 他役員一同

横須賀郷友連合会

会長 平沢末吉
副会長 菅野惣治
同 佐久間博
同 石渡吉男
同 理事 泉政雄
副理事長 出牛芳作
同 計亀田章典
同 監事 齋藤盛元
同 高瀬信策
同 他役員一同

横須賀市船越郷友会

会長 佐久間博
副会長 鈴木正之
同 長谷川キミ
同 婦人部長

神奈川県支部
横浜中村郷友会

会長 鈴木木忠一
副会長 鈴木清
同 星木勇助
同 理事 石川貞雄
同 外会員一同

板橋区郷友会

会長 八重畑達男
同 他会員一同

春

迎

横須賀郷友連合会 佐野郷友会

會長 龜田章典
副會長 安藤卓三
同 杉本武治
同 計 渡辺喜久夫
同 庶務 鈴木秀寿
同 監査 榎本正雄
同 理事 平野辰夫
同 同 堀川由博
同 同 近藤新司

日本郷友連盟 山梨県支部

支部長 原將貢
副支部長 生原男
同 幹事長 五味佳年
同 副幹事長 中西金言郎
婦人部長 中田知恵能
監事 塩田正三
同 瑞仙

静岡県郷友連盟

名譽會長 野中俊雄
會長 村松文一
副會長 石川軍治
同 久保田実
同 渡辺文一
同 杉山角蔵
同 理事長 塩崎潮児
副理事長 武田一

岡山県郷友軍恩連盟

會長 江見祐道
外會員一同
700岡山市石関町二一
岡山県総合福祉会館内

日本郷友連盟新潟県支部 新潟県郷友連盟

會長 中山左武郎

新潟市青山新町二七―四
電話 266―七〇五九

事務局
新潟市関屋金衛町二―二四九
小林和七方
電話 〇二五―266―二〇一五

愛知県支部

名譽會長 桑原幹根
會長 近藤伝六
副會長 穂積藤雄
同 渡辺治郎
同 岸田宗喜
同 小島重信
同 理事長 飯野清光
副理事長 千崎三郎
兼事務局長 丹羽徳蔵
副理事長 小島文子
婦人部長 代行

石川県支部

名譽會長 徳田与吉郎
會長 杉野勝次
理事長 佐々木外幸
青少年部長 今村勉
婦人部長 河村千枝子
外會員一同

春

京都府支部

會長 植木光教
 副會長 木俣秋水
 同 国枝克一郎
 同 小山常芳
 同 松本明重
 副會長兼理事 理事 長

事務局 京都市中京区河原町通竹屋町上ル
 井上ビル二階
 電話 〇七五(二二一)〇二七八番

頌

大阪府支部

會長 中山太郎
 副會長 芝田武治
 兼理事 梶谷健郎
 副會長 時岡正光
 同 脇田之夫
 事務局 長

富山県支部

會長 古田勝晴
 副會長 大野俊雄
 同 松本義雄
 同 若林直一
 同 中川茂則
 同 瀨川時造
 同 兼理事 東孤久夫
 副理事 高木信治
 同 事務局長 小櫻正二
 青少年担当 平田吉男
 常任理事 清水ミサヲ
 婦人部長 他會員一同

大山町郷友会

會長 瀨川時造
 副會長 浅野静
 同 高木栄雄
 同 堀井豊一
 同 高倉貫道
 同 兼理事 真田国弘
 小見地区 橋森一郎
 分會會長 石動芳子
 婦人部長 三原フミエ
 軍人部長 深山富美枝
 郷友 婦人副部長

愛媛県郷友会

會長 長谷川迪
 副會長 江戸馬太郎
 理事 森貞蝶代
 婦人部長

頌

春

山口県支部

会 長 田中龍夫
 副 会 長 尾本喜三雄
 同 井川克己
 同 兄部勇次
 同 野原清司
 同 玉木宗一
 理 事 長 有田敬三
 同 倉増琢二
 同 柏實
 理 事 長 兼 青 年 部 長 國光俊男
 監 事 谷川清彦
 同 藤三正祐

福岡県郷友会

会 長 三原朝雄
 副 会 長 兼 理 事 長 上杉源之
 副 会 長 高木正実
 同 田中徹夫
 同 三小田五雄
 同 木村義己
 同 横田靖
 同 浦部龍二郎
 副 会 長 兼 婦 人 部 長 筒井和子
 青 少 年 部 長 渡辺史人
 事 務 局 長 日高清

佐賀県郷友連盟

会 長 愛野興一郎
 副 会 長 深川袈裟雄
 理 事 長 空閑初次
 同 坂田次男
 同 萩原彦次郎
 同 武富キヨミ
 同 中尾真次
 事 務 局 長 川野順二
 經 理 部 長 田中稔
 庶 務 部 長 西山正嘉
 広 報 部 長 古山久雄
 組 織 部 長 古川守正
 体 育 部 長 前田正

長崎県支部

社 団 法 人 日 本 郷 友 連 盟
 支 部 長 鈴木直一
 副 会 長 田中正忠
 同 生田良藏
 同 中瀬正隆
 同 八江正吉
 同 森永優
 理 事 長 大坪榮
 婦 人 部 長 安藤康子
 青 少 年 部 長 古本龍夫
 事 務 局 長 岩本榮

鹿児島県郷友会

会 長 小野茂
 副 会 長 二間国治郎
 同 山正
 同 山口正
 同 山治
 同 吉永哉
 同 徳永留男
 外 役 員 會 員 一 同

三重県支部

会 長 倉市文治
 副 会 長 同 倉田平治
 同 同 中井敏郎
 理 事 長 同 田義博
 理 事 長 兼 理 事 長 同 森立博
 理 事 長 兼 理 事 長 同 伊藤英人
 婦 人 部 長 兼 計 事 長 同 浦藤とし子

春

迎

衆議院議員
前科学技術庁長官

三ツ林弥太郎

國分守

〒202 東京都保谷市富士町
三三三二二五
電話〇四二四(六七)八四五六

日本郷友連盟理事

石原 榮

太野垣 博夫

228相模原市新磯野三丁目三三〇六
電話〇四六二(五四)〇一五三

坂本宮信仁

極東問題研究所

297-01
千葉県長生郡長南町坂本聖亮
電話〇四七五(四六)〇六三二

新日本協議会

代表理事 安倍源基
同 弘津恭輔
同 渥美堅持
事務局長 甲斐田徹

住所
千代田区飯田橋二一九一五
キムラヤビル三階
電話〇三(一六)二六六九四・五

マーク
記念品

株式会社
千々木

千代田区麴町三十一
電話 〇三(二六)〇五三一

社団法人 日本郷友連盟

名誉会長 杉田一次
会長代行 田中耕二
副会長 上妻正康
副会長 星野清三郎
同 赤羽根 澈
同 高橋正蔵
同 佐伯隆平
同 倉岡愛和
理事長 藤代三郎
事務局長

鈴木英敏



神風は矢張り吹いた

小島 末喜
(海兵七二期)

大東亜戦争では「日本は神国だから神風が吹くと日本の一億国民が願ったのに到頭吹かなかった」が戦後の通説である。

然し、私は、喜界島で体験した。然しそれが神風と言えるとは当時の誰も気がつかなかった。(戦後は大型颱風は毎年の様に襲ったのでその一つ位に思っていた。

それは沖繩戦の終りかけた六月五日、大型颱風は沖繩辺に発生し喜界島を襲った。島の守備たる、私が隊長の震洋海軍水上特攻隊の宿舎は山中の木陰に作ってあったが、生れて初めての大暴風雨で、記憶として今も思い出すが、一晚中吹き荒れて眠れず、寝ている宿舎全体が床下より持上りかけたし、木は幹からゆれて夜が明けて見たら小枝は吹飛び、木々の先は裸だった。

此の風に流された為か、喜界島から肉眼で敵空母らしきものが見え我々はビックリ、我々には、「敵上陸近し」として「第

一配備」となり、島民五千人を一人残らず家から身廻品丈持って出て、島の中心の山中に集結せしめていよいよ「玉碎最後の時」を覚悟した。然し敵船隊は離れたので五日間位で解除になった。

当時は、武力戦丈しか年若い私達は考えず、「こんな颱風は度々来る」位にししか島民から聞かされていて気にしなかった。

然し、戦後、私は店頭で、月刊「丸」誌を買い、米国の当時の指揮官ハルゼー提督の記事を読み「此の時の大損傷は対日戦を戦って、損傷を受けた中で、いかなる海戦にも起り得なかった大惨害であった」と認めているのを知った。

当時、沖繩攻撃の為に集結した、数百隻の大艦船は、神風特攻機の手痛い波状攻撃を受けていたが、五月中旬で、打切りとなっていた。

喜界島には鹿児島より沖繩への中継基地

として飛行場があり、米軍上陸は六月一日となっていた。(月刊「丸」誌米側発表記事)でビックリ。此の上陸実施が延期になったのは、沖繩戦で日本軍に長く頑張られ過ぎたからだ。六月下旬迄かかり五月中旬に終らない為にズレたのだ。

米艦隊は度重なる特攻攻撃で将兵は、ノイローゼ気味になり「一旦包囲を解き再撃を期すべき」との意見が大勢をしめた頃であったのに此の大難であった。広い海域では大世界では退避も出来ず、秒速四十米(時速百軒以上)の大暴風に翻弄され、戦艦四隻、空母八隻以下の四、五隻が大損害を受けた。乗員は、三日三晩眠らされず、ガブられたから、青菜に塩で、生きた気はしない。コリゴリした筈である。

日本神風機の攻撃よりも、ヒドイ目に会ったのであり、正しく彼等は「日本本土に近づくとこんなだ。やはり東洋の神秘国日本は神国」とか言うのは本当かも知れない。こんな目に会うのは神風かも知れない。もう本土上陸はコリゴリだ」と本能的、実感的に体験した筈である。米側作戦計画では、鹿児島上陸を十一月一日オリンピック

作戦と決定してあった。此の大惨害も因をなしてか、六月一日に決定していた処の喜界島上陸も此の故か再延期になって建直しのため一息入れた。その中に「原子爆弾製造成功近しの朗報」に辿りつき本土上陸の要がうすらぎ時間を稼ぐ中に原爆が投下され、八月になり、ポツダム宣言を日本に提示して、「本土上陸戦をすれば百万人の兵が死ぬ」のを避けて和平に持ち込んだのである。之は今から見れば双方妥当だった。米ソが本土上陸すれば天皇はつぶされ、神国でなくなり、神様も困られる。

此の大惨害の件は、日本側も戦後に出版された本「八月十五日の天気図」という著書で、当時、第一国分海軍航空基地の気象長であった「矢崎好夫氏・兵科三期予備学生出身」がやっと指摘している。

その書では、当時、海軍の通信網も「此の神風」とも言える、大型颱風による惨害の程度は把握出来なかったが、矢崎気象長の作成した天気図には「台風の日」が記入され、「昭和の神風」は米艦船に、武力攻撃以上の大損害を与えた事は、米側最高指揮官の戦史により、確実な史実であると指

摘している。

宗教的に心靈学的に之を考えるに、「神は語らず人をして言はしむ」と、又「神は宇宙を作り、自然現象は神の意の現れである」即ち「靈能者丈が現象の中に神意を悟るか悟らないか」に依るのである。即ち、此台風は我国には神風と言え言える。

昔、元軍博多来寇の時には、国民は全国神社に祈り、その兆は社前にガタガタと音がして現れた。「之も単なる台風で神威でない」とは言えぬ。何万人も乗る舟が皆沈む程の台風は普通でない。

又、日露役の日本海海戦も、その直ぐ目の前にある「沖の島」や「中津島」には、「天照大御神とすさのを命との間の御子神」たる市村島姫命が「八幡神の本尊」として鎮座されている故、此の戦を守られたと拝察する。

逆に昭和のミッドウエー海戦では、東郷元帥の艦隊解散時の訓示「勝つて兜の緒をしめよ」を忘れ果て、緒戦の不意討で一時の戦果におごり、嬌慢となり、神の守りも遠ざかり「霧深くて、陸兵をのせた輸送船が、航行不能の為電波を出して、敵にその

強襲を悟られて大敗」した。逆に日本海海戦では宗谷海峡に敵が行かず、「天気晴朗」の電報の通りで天候よく射撃が出来、秋山参謀の靈夢にも、「敵艦隊は対馬海峡に現れた」ので、待伏成功で大勝の基となった。又、戦後の今は経済大繁栄も、神風と言える。之程の大復興を敗戦時予見出来た人は、世界に何人いたか。

神風特攻も、米軍は当時はひた隠しに隠したが、米軍將兵に与えた心的恐怖は、その名にふさわしかった。世界中に其名は鳴りひびいた。「目に見える現象の奥」に「神意を悟れる人のみ」が判る事である。

神風特攻では、隊長は、筆者の海兵同期生が一番多いのでよく判るが、その隊名も「神風隊」と命名され、突入者は本気で「昭和の神風たらん」と信じて喜んで突込んだのを私は知っている。

此の沖縄台風も神風特攻の至誠に「神明は痛く感応し給うた発動」と拝察される。

戦後は、我が国民は経済的発展のみに目を向けて来たが、私は、靈的修行をして、あの世の事をよく勉強したので、以上の事にやっと気がついたのである。(終り)

講演要旨

大東亜(太平洋)戦争は日本が

仕掛けた侵略戦争か

講師 三上 照 夫 先生

(文学博士
経済学博士)

三上照夫先生略歴

講師 三上照夫先生は、昭和三年京都でお生まれになり

まして、西ドイツのミュンヘン大学で、「第三の文化」についての研究で経済学博士の学位を取られ、又日本におきましては「上代史」の研究で文学博士の学位をも取られております。先生は、東京大学、京都大学、大阪大学の各大学の教授を歴任されておりまして、その折り、時の内閣であります佐藤内閣のブレーンとして活躍されて以来七代二十二年間、中曾根内閣まで、内閣のブレーン生活を送られていらっしゃる先生でございます。先生は、これから世の中がどうなるかという評論家的な立場ではなく、世の中をどうするかという立場に居られる先生であります。さらに先生は、大学教授二六一名で構成されております、文部省の諮問団体で

ある日本松柏学会の会長の要職にもあられる方です。

皆様方、私も、日本の軍隊の飯を食った、最低年令であります。中学三年生で、軍隊を志願しておりますので、丁度、皆様方よりは、些か年令が低うございますが、日本の軍隊の飯を食った、最低年令であることには、大きな誇りをいだいている男だということから、お心に留めていただきたい次第であります。

現在、日本の国には、大きな迷信が三つあると考えています。一つは親が子を思い、子が親を思います、暖かい日本的なものが、古臭い陳腐な封建的なものとして、今日抹殺の憂き目にあっております。

これが、私は別に忌わしいとは思っておりませんが、大

東亜戦争が日本の仕掛けた侵略戦争であったということから、何か日本的なものと言いますと、古くさい陳腐なものと考えられがちになって居ります。これは、若し大東亜戦争が日本の仕掛けた侵略戦争でなかったら、もう一度我々は、歴史と伝統の上に立ちました日本的なものを、大きな眼を向けて見るその必要と価値が、今でこそ大きく存在すると考えます。

第二の迷信は、現在の自由主義の世の中が亡んだら、社会主義の世の中が来るのではなからうかと、今日のインテリ達を初めとした各位が、このように考えがちであります。

でも、果たしてそうなのだろうか、ソ連は革命後六〇年を越え、中国も革命後に於ける多くの年限を費やしました今日、逆に、社会主義の荒廢は、中国におきましては、いわゆる多くの民を食べさせて行くことが出来ず、ソ連も、革命後におきましては、明らかに自由化の路線を取らざるをえない形におかれて居ります。こういう様な状況の許に、果たしていわゆる自由経済が亡んで、果たして社会主義の世の中に、社会科学の示す必然に於いて、到達するものかという事は、大きな第二の迷信だと考えます。三番目は、日本の国が戦争を放棄さえすれば、よその国が攻めてこないなどという事は、正に大きな迷信であらうかと

考えます。

今日如何でしょうか、戦争放棄といいますが、すべてが日本が世界で最初のように申しますが、日本の戦争放棄は六番目であります。フランス・ブラジル・フィリピン・豪州・スペイン、それから日本であります。何故、これ子供達に教えないのか、然も、戦争放棄した国が、それから不幸にも何度戦争に巻き込まれたことか、我々は今、この三つの迷信の中に置かれていてと考えます。

でも今日は、私も、軍隊の飯を食いました男として、今も感激をもって軍歌を聞きました。そこで皆さん方、大東亜戦争が果たして日本の仕掛けた侵略戦争であったかどうか、話の焦点をまずは絞りたいと思います。

実は、台湾に飛行兵の一員として、沖繩艦船攻撃に、いわゆる特別操縦見習士官の一期生、二期生達に囲まれ、マ、年の若い私などは可愛がってもらいました。若かったせいで、今それを確認する術はないのですが、どこからどの順序を経て、我々の手元に渡ったかは、何分十七才でしたから解りませんのですけど、ウェーク島の飛行隊長バナムの日記帳の写が、我々の目の前に来たのでした。当然、当時は皆英語が出来ませんので、大学生上がりでないかと、そこで、特操の一期生、二期生のこの学卒上がりが、いわゆる翻訳をしたんです。

十二月八日真珠湾の攻撃をもって初まった筈の大東亞戦争に對し、パトナムの日記帳には、十一月の二十七日大統領は航空母艦に飛行機の搭載を命じ、十一月の二十八日日本の艦船を見付け次第、これに発砲攻撃を掛けよという攻撃命令を受けたことが、このパトナムの日記帳に載っております。私の一生は、実はこれによって変わった訳でして、十二月八日急襲(サープライズ)、宣戦布告三十五分前に、日本が無謀なる攻撃をしたと東京裁判は教えました。が、十一月の二十八日日本の艦船を見つけ次第、これに発砲攻撃を掛けよという攻撃命令の出ている事実。果たして何れが仕掛けた侵略戦争であつたかは、私の一生はこの立場に於いて、大きく変わった訳でして、勝てば官軍負ければ賊軍としての、東京裁判劇場に於いて、日本の仕掛けた侵略戦争であると、確かに断罪の刑は受けた。でも、私の目に残りました、このパトナムの日記帳は、何れが仕掛けた侵略戦争であつたのか、それから、些か学者を志しております。また関係から、ヨーロッパの名のある歴史家や、法律家達の文献を四〇数冊集めました。一冊と言えども日本の仕掛けた侵略戦争にはなつてないのです。今そう信じているのは、日本人だけだということです。私も学者の端くれですから、実は、今日總ての本を持って来て見せたかったんですけど。

トインビーと並び称された、アメリカの歴史学会の会頭のビヤードは、ザ・プレジデント、ルーズベルト、カミング、ザ・セカンドリ、ウォー、第二次世界戦争を誘発したルーズベルト大統領という文献を、ビヤードは書いております。アメリカのミヤーズは、アメリカの鏡という本を書いております。英国の衆議院議長アーサー・ハンキーは、アーサーですから、ハンキー卿というべきでしょうが、東京裁判並びにドイツのニュールンベルグの裁判を、勝者が敗者に對して与える拷問であつたと、英国の衆議院議長アーサー・ハンキーは、戦犯裁判の錯誤という本を書いています。又、皆様方、十二月八日真珠湾の攻撃、急襲(サープライズ)、宣戦布告手違いとはいひながら、三十五分前に攻撃したという、その攻撃を受けましたアメリカの太平洋艦隊司令長官ロバートシーボルト中将は、真珠湾の侵犯を書いていきます。日本の真珠湾攻撃より二時間前に、日本の駆逐艦と潜水艦が攻撃を受けて、潜水艦が沈められている事実を、攻撃を受けた側の太平洋艦隊司令長官ロバートシーボルト中将が書いています。又、インドから出てまいりました代表判事、アジアから選ばれた、たった一人の裁判官であつた、いわゆるインドのバル判事、堂々と唯一人ではありましたが、東京裁判に對しまして、日本無罪論を明らかに書いてます。

そろそろ、我々は戦後ではなく、テレビのアンテナが林の如く乱立し、我々は豊かな国になりました。しかし、日本人が、日本人であるとの誇りを失っている今日、もう、そろそろ戦後に終止符を精神面に於いて打つてもいいのではないか、さすれば、大東亜戦争が、果たして日本の仕掛けた侵略戦争であったのか、この問題から東京裁判が、果たして正しいものであったかどうか、これから、我等が掘り起こして行きましょう。まして曾つて陛下の、いわゆる股肱として、軍の飯を食みました我々が、最後の子孫に残して置かねばならん処の役割ではなからうかと存じます。

では、このビヤード博士の言葉に従って、大東亜戦争をどのように眺めておったか、そろそろ本当の事を言うても差し支えないだろう、アメリカはかかる過ちを再び犯してはならんとして、文頭に、ビヤードはこう書いているのです。

当時、ヨーロッパの列強達には一つの迷信があった。中国のど真中を流れます、黄い河と書きます黄河の流域を支配するものは、世界を支配するものであるという迷信が、ヨーロッパにあった。総ての列強達は、植民地政策の最後の物として、総てが中国を狙いました。ご承知の通り、まづイギリスはインドを取りました。白人達の植民地支配は、誠に残忍を極めたものでした。インドの家族制度を破

壊せんとし、インドに於ける独立運動の志士達は、その六親等に至るまで、硫酸に漬けられて殺されました。英国は、マレー半島の突端のシンガポール、強引に阿片戦争をもつて香港を取り、虎視たんたんとして中国を狙いました。阿片戦争等というのは、一つの国が麻薬を作つて中国の全土に巻き散らすなどという、誠に残忍極まる処か、非人道的行為です。当然の処、清朝はこれに抵抗し、いわゆる阿片戦争によつて香港を取られました。フランスは仏領インドシナを取りました。当時、フランス人は、一日二円の生活をした時、現地人は二銭の生活をしていました。どのような、金持ち、インテリであるうと、サンダル靴を覆く自由すら、現地人には許しませんでした。ソビエト・ロシアは言う迄もなく、現在のモンゴリヤ共和国並びに満州を伝つて、大いなる接近作戦を行つたのは、むしろ今日の歴史の示す処であります。更に、遅れ馳せながらアメリカは、飛石伝いに、太平洋のど真中にありますハワイを占拠し、日本の委任統治の中にある筈のグアム島を取り、フィリピンを取り、台湾を取り、沖繩を取ろうと言うのは、今から一五〇年ばかり前からの野望であつたと、ビヤードは言い切つております。世界は挙つて、中国へ中国へと、当時のアジアは危ないのです。でも、この列強達一つの悩みがあつた。それは、日東君主国といわれ、道義をも

つてなつた、日本という番犬のおることです。いわゆるこの番犬を如何にして料理するかという事は、列強の等しい悩みであつたと。

皆様方、明治維新の戦いといえますと、薩摩と長州の連合軍と、幕府軍との戦いであると、おたがいは習いました。でも、歴史はそのような甘いものではなく、当時の日本に対する干渉は、フランスから初まりました。時の小栗上野介は、フランスから三〇万フランの金を借り、第一回の長州征伐、フランスの武器弾薬で成功したのです。日本の国をフランスに取られると心配した、いわゆる英国は、薩長に呼び掛けました。残念ながら、高杉晋作の率います騎兵隊の教官も、○に十の字の薩摩の教官も、英国人でした。第二回の長征征伐が成功しえなかつたのは、フランスの武器弾薬に対し、英国の武器弾薬がすぐれて居つたからです。ヨーロッパの人達は、明治維新の戦いは、薩摩と長州と幕府との戦いと思はず、英仏戦争、クリミア戦争が、日本の頭上に於いて行われたものと考えています。当時の日本は危のうございました。いや、それ以上に今の方が危ないかと考えますが、民族の前途を憂へいた下級の青年武士達が、民族の大同團結を叫んだので事無きを得たが、実にあの時代英、仏から狙われて危ない立場に置かれておりました。その証拠に、薩長に武器弾薬を送らんといたしま

す、英国の輸送船並びに護衛艦が、幕府に武器弾薬を送らんといたしました。フランスの輸送船並びにその護衛艦と、オホーツク海並びに太平洋上に於いて、海戦をやっております。これが、殆んど子供の歴史に出てこんのです。当時の日本が、そこに明治政府が、英国の半植民地として、その存立を保ち得たとまでいわれているのです。彼の有名な鹿鳴館時代も、すべて英国の模倣に終始したようでした。陸軍と言わず、海軍と言わず、はたまた日本独自の天皇制に至るまで、英国の立憲君主制を、確かに物真似しようとした歴史的事実は、歪められんようであります。あの当時からヨーロッパの列強はすべて、中国へ中国へと。

さて皆様方、大正の終り東久邇宮様が、フランスの虎と言われたクレマンソーに会われましたとき、大正の終りです。貴方の国は日米戦争を考えておるのか、いやとても考えておりません。陸軍省へ帰り、海軍省に於いても、だれも想像してもいかなかった。いや、アメリカは、貴方の国を絶対に無理難題を浴びせ掛けて叩きます、乗っちゃいけません、乗ったら必ず亡ぶ、クレマンソーの親父の駄法螺でしょうで終つたのです。

私も学者の端くれですから、所在を明らかにしながら申します。東久邇宮さまのお書きになりました、「ヤンチャ孤独」という文献にこれが載っています。唯、フランスの

レストランのボーイが貴方は日本人ですね、そうだ、あそこにいるアメリカ人達が、あのジャップは必ず叩かなきゃならんと、こうヒソヒソ話をしておりますからご注意ください、と、ボーイが言ったことを、その「ヤンチャ孤独」の中には書いております。

皆様方、ひとごとではございません。一つ間違えば一九三三年の経済恐慌に類するものが、来年から日本には来ないと言いつつ切れないのです。現在、私はブレーンとしては、

財政が担当でありますので、如何です再建の王といわれた坪内さんの所ですら、十二日の新聞でご覧の通り、一一、

〇〇〇の従業員の内、七、〇〇〇人の首切りの条件のもとに、銀行は融資を保証致しました。みな来年の不況が、一つ間違えば経済恐慌に類するもの、それがどのようなものか、かつてアメリカは輸出も輸入も三分の一に落ち、ご年配ご承知の通り、日本は鈴木商会の倒産、台湾銀行取り付け騒ぎ、銀行がバツタ、バツタと潰れました。世界は集まり六六ヶ国が何んとかしようとして、でも皆様方、需要がないのですから同業者を潰し合う以外に道がなかった。いう迄もなく、持てる国と言われた「アメリカ・英国・フランス」と持たざる国「日本・ドイツ・イタリー」の二つの国のグループに分かれたことは、青年期に体験された通りであります。アメリカは、昭和十六年八月戦闘体系の完了を致しまし

た。当然その間、日本に対する経済封鎖は、この経済恐慌に對し、日本の死滅を計ろうとした訳です。当時、皆様方、日本の石油の使用量は僅かに三〇〇万キロリッター、現在は二億九、〇〇〇万キロリッターと隔世の感があります。その三〇〇万キロリッターの石油から、銅・鉄・ニッケルに至るまでの経済の封鎖、遮断をしたことは、ご記憶に未だ生々しいものがあります。日本は独立国家としては、生きていかねばなりませんから、当然の処、資源の確保を求めて南進論を取った。A・B・C・Dとこの経済封鎖は、お耳の底に残っておる話題でありましょう。

さて、皆様方、この大東亜戦争十一月のいわゆる二十五日には、ハル長官から日本に無理難題が来しました。当時、日本の国は中国と理由の如何は別にして戦っていました。先にこれから致しましょうか。戦争という戦争は、子供の歴史では、凡て、日清、日露といわず、日本が侵略国として教えられています。果たしてそうなんだろうか、ことに支那事変と言いましたら、河本大作・張作霖爆破事件から初まって、関東軍の横暴によって行われたと教えていますが、果たしてそうだったろうか。あの蘆溝橋の一発、突如として日本の陣地から銃声が響きました。慌てました日本の軍使は、何分ご内密に不心得者は処分しますからと、当然の処お詫びに参りました。その同一時刻、幸か不幸か中国の

陣地から発砲がありました。中国軍、国府軍からも謝りに来た、どちらも撃ってなかった、だから歴史は難しいんです。当然の処、中立地点で両者は机を叩いて撃ってない、……撃ってなかったのです。日本軍も国府軍も、その同一時刻、日本の陣地と中国の陣地から再び銃声が響き、これが蘆溝橋の一発として支那事変に突入しました。

皆様方、ご承知の通り、後ほど勇名をはせた「牟田口兵団」といわれた、あの牟田口氏にしても、実は日本が応戦に発砲したのは、それから二週間後でした。誰が打ったのか、今尚歴史は解らんです。只、日本は打たなかった。これが中国共産党史にはこう載って居ります。劉少奇の率いる便衣隊が日本の陣地と中国の陣地に於いて発砲し、見事日本と中国は噛み合うたと、恐らくこれが共産党史に載っていることが真相なんでしょう。ご年配達ご承知の通り、当時毛沢東といわゆる蒋介石とは戦い、コテンパンに叩かれた毛沢東は、死の迂回作戦二万マイル、冬の荒野を夏服の裸足で延安に向かって逃げたのはご承知の通り、目的地に着いたときには、二万人殆んどが餓死した。今、蒋介石から追撃作戦をやられたらひとたまりもない、孫子の兵法直伝の周恩来は考えた、日本と蒋介石とを噛み合わせ以外に、いわゆる共産軍の生き残る道はない。どうしたら噛み合うか、蒋介石に信任が厚くしかも日本に恨みを持ってい

る男に、蒋介石の監禁をさせるべきだ、曰く張学良でした。のこのこと行つた蒋介石は、軍剣に囲まれ、世にいうこれが、いわゆる西安の事件でした。その間に劉少奇の率いる便衣隊が、日本の陣地と中国の陣地に於いて発砲したと、共産党史にはこう書いております。皆様方、歴史の真相の難しさであります。何れにしても、日本はそこに中国との戦いが展開されていきました。十一月の二十五日その中国に対して降伏せよ、日本の武装解除を行い、財産を中国に移管せよ、日・独・伊防共協定を破棄せよ、南方方面の市場、このインド方面を初めとした英国の得意先に、日本の安い繊維品が出て、英国のランカシアンの織り物が売れないという経済上の立場から、日本を目の上のたん瘤にしたのは当時の英国でした。つまり南方方面の市場を放棄せよ、この五項目の内、一項目といえども認めることは出来ないとなれば、これをもって最後通達宣戦布告に変えるという通知は、十一月の二十五日にやって参りました。条件付きであったが、果たして宣戦布告はいずれが速かったのか、インドのバルはこう申されました。このような無理難題を浴びせ掛けられたら、モナコやルクセンブルグのような小さい国でも、矛をとって立ち上がったであろうと、それを戦争にならないとアメリカは考えたであろうか。十一月二十五日國務長官スチュムソンの日記帳には明らかです。

「如何にすれば日本を窮地に落とし入れて、最初の一発を日本から打たせることが出来るかどうか、最初の一発を日本から打たせることが出来ない限り、アメリカは侵略国の汚名を受けなければならない、これは誠に難しい注文であった」と、國務長官の日記帳の十一月二十五日に出ております。でも皆様方、日本は立てなかつたのでした。開戦止む

無しかという処に置かれても、どうしても戦争のお嫌いだつたのは陛下でした。戦えば大勢の若人が血を流さねばならん、何んとか和解の道がないか、何んとか打解の道はないかとして、がんとして陛下が抵抗された。このような無理難題を浴びせ掛けたら、次の月曜日十二月の一日に日本は攻撃して来るものと向こうは考えたのです、でも立てなかつたのです。薬が効かないと考えたアメリカは、ついに太平洋艦隊を真珠湾に集結、情報が乱れ飛びました。十二月十日を目標に東京湾に敵前上陸敢行の命令を大統領は出したと、又事実でした。万事休す、坐して滅び行く事を待つか、九死に一生を得んとして戦うか、でも陛下はそれでも、前途に花も実もある浮世の人生にさよならを告げて行かねばならん青年達に血を流せというのか、陛下はこの期に及んでも難色を示された。武藤さん唯一人が陛下に迫りました。御前会議で、凡そ戦争哲学の示す処によれば、ジリ・ジリ・ジリと痛められ敵前上陸を受けて、工業施設す

べてを破壊され、女・子供は強姦陵辱され、果たしてその国は立ち直れるのか、たとえ戦いに破れてでも民族の総力を結集して打って出た国は立ち上がっている、陛下何を迷われます、御前会議の記録は明らかです、武藤さんは気の毒にこの一言で絞首刑に掛かるのでした。

陛下は、その時一人言のように、「北海道をアメリカに割譲してでも和解の道はないか」とつぶやかれたことが記録にあります。日本はここまで譲歩したのでした。当然、和戦両様の構え、海軍を預かります山本五十六は言う迄もなく、最も平和愛好の方でした。でも戦わねばならんとして、最も遠い地点に於いてアメリカの太平洋艦隊の壊滅、東京湾敵前上陸を食い止めると。真珠湾と地形が似ております九州桜島に於いて、淵田中佐の率います海軍が、訓練に訓練を重ねたのは、防衛を預かります山本五十六としては、当然の主義でした。記録はこのへんで難しくなるのですが、ついに陛下のご裁可を得ず、真珠湾の攻撃をやつたのが真相のようでした。日本は誠に気の毒であつたと、ビヤードもミヤーズもハンキーもシーボルトも、ヨーロッパの歴史家はみな言っております。

では急襲(サープライズ)、宣戦布告三十五分前に本当に攻撃したのか、さにあらず、米国は攻撃命令が出ておりますのでその二時間前、日本の潜水艦と駆逐艦が攻撃され潜

水艦が沈められておりますから、明らかに最初の一発はアメリカが早かったのです。勝てば官軍、負れば賊軍としての東京裁判劇場に於いて、言う迄もなく日本は断罪の刑を受けました。でもこの東京裁判をめぐって、我々が忘れてはならないのは侵略戦争をやった平和に対する罪、そんなら侵略戦争の定義を明らかにせよと、清瀬弁護人は堂々と迫りました。当時は食う物は無く、皆、芋を齧りながら、論陣を張ったのです。最初の一発、宣戦布告は、すべてアメリカが不利でした、侵略戦争の定義は出なかつたのです。日本の国は多勢の捕虜を虐待し、人類・文化を逆行せしめたという事は戦犯に値すると。どうして、一体これが侵略戦争の定義になるのでしょうか。皆様方、もし捕虜を虐待したことが戦犯なれば、異例にもインドのパール判事は、神の名による公正な裁判であつた筈の裁判長ウェップに、毅然として質問を發しました。

皆様方、日本の国が敗戦したのは八月十五日ではありません。六月の十八日の敗戦色が明らかになつた日本の国は、当時、不可侵条約一年間有効期間中のソ連に、近衛さんが中心にすぎりました。皆様方、敢えて申しませう。ナチのヒットラーがモスクワまで何マイルと迫つた時、ヒットラーは泣くように脅迫するように日本の関東軍をシベリアへ乱入することを要請しました。もし、あの時天下泣く

子も黙る関東軍が、逆に不可侵条約を破つてソ連への乱入をし、挟み打ちを行つていたのなら、今でかいことを言っているソ連なんて、恐らく跡形も無くなつていたのでしよう。

陛下は遂にお許しにならなかつた。信義は守れとして。ご承知の通りヒットラーは、そりや歴史のにとやかく言われて居りますが、でも、彼はナポレオンの二の轍を踏み、夏服でヒットラーの軍隊はソ連に入つたのです。彼は三ヶ月で勝負出来ると考えたため、まずは零下五度位迄なら何んとか夏服で耐えられると考えたのが、その年に限つて、零下二十一度へと早くも下がりました。ヒットラーは気の毒にも、ナポレオンの二の轍を踏んでソ連と戦う前に冬と戦わねばならぬ立場に置かれ、彼は壊滅したのでした。このようにして、ソ連に此の恩が売つてあると考えた当時の日本は、ソ連にすぎつたのは、六月二十七日に正式に文書を出しました。スターリンはモロトフをつれてロンドンへ

飛びました。そしてワシントンへ飛びました。米・英・中・ソビエトの四者会談が持たれました。現在、米・ソが仲が悪いから、その会談の内容は明らかではありませんが、今、日本の国が降伏してきたが、この降伏を認めるべき時であるかどうかと、スターリンが提案しました。そしてスターリンがまず自らの意見を述べました、断呼として、今

日本の降伏は認めるべき時ではない、日本民族を大和民族をこの地上から抹殺するチャンスであると、スターリンは言った記録が残っております。モロトフはこれに賛成演説を行い、「捕らぬ狸の皮算用」と言われますが、台湾は中国に返すが権益はアメリカが取る、小笠原・沖縄はアメリカが取る、満州は中国に返すが権益はソビエトが握る、樺太・千島はソビエトが取る、泥坊達の天下三分の計が終わり、待てど暮らせど日本に対する通知はなかった。明日通知をとという嬉しい報告がソ連から来たとき、近衛さんを始めとした日本の閣僚達、ソビエトの友情と信義に感謝し、我々は敗戦すると言いながら、独立国家の体面を保って敗戦することが出来ると喜びました。その返事は突如、ソ満国境を突破する、日本に対する宣戦布告でありました。凡そ負けて無条件降伏、当時の日本人なら理解が出来まいでしょうが、陛下の体面を傷つけないと言うだけを条件に、軍事・経済・政治に於ける一切の無条件降伏でした。これをソ連を通して米国へ手渡しして欲しいと、ソ連はそれに更に、不可侵条約一年間有効期間中の国に対し、あえて宣戦布告をした国はソビエト唯一ヶ国である事実、我らは孫子の代まで伝えねばならないのです。インドのバルは申しました、日本が降伏したのは六月の二十七日、手渡したのは二十八日、では、それならば日本は皆捕虜ではないのか、捕虜を虐待

したことが戦犯なれば、しかも、戦闘員にあらず、年寄りから女・子供から、犬や猫から草木、瓦に至るまで、一発の爆弾をもって、二〇何万の人を殺りくした広島・長崎に投じられた原子爆弾は、捕虜虐待ではないのか。皆様方、神の名における公正な裁判であつたはずの東京裁判の一頁に、ウエップ裁判長のこの原爆の責任に対し、人道的立場の責任に対する解答は、東京裁判の記録の中に明確にあります。皆様方、ウエップの言葉は、「日本人は人間にあらず、原子爆弾の威力が如何なるものであるかということ、動物実験に使つたのがなぜ悪い」と、我々は人間に、よう似た猿でしかなかったのです。このような国が、世界に人道主義を説き、世界に平和を説く資格があるのかと、皆様方、このアジアの友人、ご承知の中国領土における、英国租界、フランス租界、ドイツ租界などと白人の住む場所には、犬と中国人入るべからずという表札が立ったことは、ご承知でございましょう。

我々東洋人が、白人の支配下に、そのような立場に置かれて居った時、断固として白人の支配から、アジアを奪還せんとしたのが破れたりと雖も、我らの大東亜戦争の目的であつたことには変わりはありません。皆様方、聞くところによれば、大東亜戦争の二倍の金を朝鮮戦争で使つたと言ひ、その三倍のお金をベトナム戦争で使つたと申しま

す。大東亜戦争の六倍の金を使って、ベトナムの半分でアメリカは破れたのです。我が山下奉文の率います軍隊は、少なくとも北ベトナムから南ベトナムの端まで一〇日間で進撃をしたことは、我らの誇りとしている所でしよう。

なぜできたのか、白人を追い払ってくれる、白人に恨みをもっているこの人達、一人残らず日本に対する歓迎の眼をもって迎えてくれずして、このような進撃が出来る筈はなかったのです。こういうような立場が、実は当時の歴史の真相でした。でも、この東京裁判をめぐる、皆様方、二つのことを私達は忘れてはならないのです。それはインドのバル判事でした。インドのバル判事は、日本にやっ

て参ります時、パルの妻は病床にふせて居りました。明日をも知れない状態にふせて居りました、痩せほけて今死せんとする妻が、夫のバルを見上げてこう言いました、日本と戦いを交えず、しかも東洋から選ばれたたった一人の裁判官であるバルあなただけが、この裁判を行う資格者だ。バルは肯づいて東京に参りました。言わずもがなバルは激怒した、日本の出す条件は凡て却下する、仕舞には弁護士服装検査までして書類を取り上げる、どうしてこれが裁判と言えようか、勝てる者が敗れたる者に対し、復讐の芝居に過ぎんではないか、バルはその間妻が危篤になりインドへ帰りました。痩せこけてまさに死せんとする妻の病床に立ったとき、パルの妻はこう言ったのでした。あなたは裁判官の妻として妻を見舞に来て下さったことは、一面に於いて嬉しいが、一面においてわびしいと、悠久二六〇〇年、血と涙と汗との結晶で築きあげた日本の歴史が、今まさに終焉せんとしているのです。しかも最後には、前途に花も実もある浮世の人生にさようならを告げて、一機一艦、特攻隊なる青年まで生み出した日本の歴史が、今まさに終焉せんとしているのです。そのような重大な裁判を後にして、一介の妻の病氣を見舞うために帰って来て下さったことは、裁判官の妻として怨めしい、直ちに帰ってくれ。パルはうなずいて一晩も看病することなく、再び東京へ戻りました、言うまでもなく妻はその夜死にしました。皆様方、アジアの心ある友人達が、如何に日本に関心を深め、アジアの兄ともいべき日本の立ち上がり、精神面の独立ある立ち上がりを、如何に望んでいることか。私は縁あって、このバル判事のお伴をして広島へ参りました。広島島の原爆の碑の前に立ったとき、プロフェッサー三上、何んと書いてあるのか、と言われ「安らかに眠って下さい、誤ちは再び繰り返しませんから」ワンスモアもう一度「安らかに眠って下さい、誤ちは再び繰り返しませんから」彼らは中へ飛び込んで、あの原爆の碑を足蹴にしました。ここで眠っている人達は原爆を落とされた側の人じゃないの

か、誤ちを犯したのは誰なのだ、我々米国民はと言う主語がぬけてないのか、プロフェッサー三上、おまえは歴史学の専門家であろう、そのような日本人としての信念の無いことで日本は建てるのかと申しました。一緒に東京へ戻り、一番最初に参拝したのは、言うまでもなく靖国神社でした。彼は深々と頭を下げ、そして動哭し、この人達のおかげで、我らインドの国は独立が出来た。このインドのパル判事が、東京裁判の判決文の最後に、時が熱狂と偏見をやわらげた暁には、理性が虚偽偽りの仮面をはぎとつた暁には、正義の女神がその秤り（天秤棒）を平衡に保ちながら、過去の賞罰の多くに所を変えることを要求するであらう無罪、このような判決を書いてくれた裁判官もあつたということでした。もう一つ我々が忘れてはならないのは、この男さえ戦争しなければ等、皆から怨嗟の声で、その家族に至るまでいじめぬかれたのは東條さんでした。東京裁判の記録に、キーンン検事は毒々しげに、東條に直立を求め、あなたは侵略戦争をやつた張本人として、あなたの良心・真心は痛まないのか、ご承知の通り東條さんは演説をするときに片手を後腰にあてるくせのあつたことは、ニュース等でご承知の通り、彼はいつもの通り腰にソツと手をあてて、「自分の行いました行為は、天皇陛下並びに、日本の国民に対しては、一言の申し開きの出来る行為ではあ

りません。まさに万死に値する行為でありましょう。しながら追い詰められた弱小国が、自らの正義を守るために、立ちあがった正当防衛であるという気持に於いては、今尚変わりはありません。」、ここに東京裁判劇場最大の山場と言われる、キーンン・東條の一騎打ちがそこに行われました。二度と裁判史にはありませんまい、論告したキーンンが、東條から論破され書類をもって退廷したことは事実でした。論争は明らかに東條の勝ちでした。皆様方、私が今、東京裁判の話をここで閉じますにあたって、もう戦後ではありません。なんとしてでも日本人が日本を信ぜず、日本の魂の独立を勝ちとらず、物質文明をいかに謳歌しても、祖国の前途を憂れうる気持のない青年達をかかえた国が、いつまで続くことでしょうか。我々戦中派は、何んとしてでも、この子供達に、太平洋戦争が日本の仕掛けた侵略戦争でなかつた、親が子を思い、子が親を思う、あたかい日本的なものが、何の侵略の色をもち、何の一体不都合をもつことか、もう一度、日本人が日本的なるものに眼を向き変えてみる必要があることを、我々戦中派の役割として伝えていかなきゃならないのです、それ故にあえてこの話を行った次第です。皆様方、メンソレタームの社長の一柳メレルさんが、マッカーサー並びにリッジューウエイの顧問をしております関係で、占領下に於いて、一週間ご

とマッカーサーが本国へ送っておりまする報告文書、どのようにして占領したかという報告文書のコピーが、私の身長二倍ほどございます。若き学者として扱われました私を、一柳メレルさんは男と信じ、きつとアメリカの占領政策がどのような形に於いて行われたものかと言うこと、きつと歴史の証拠が必要になりましょう、それでそのコピーを私が頂戴したわけでした。日本国憲法を押しつけた内容、六・三・三制というような、いわゆる学校制度を変えた内容、地理・歴史をやめて、社会科というようなわけのわからないものにした内容、マッカーサーは丹念に本国へ報告しております。こうでした、第一次欧州大戦、ドイツを軍事的に解体し、しかも、天文学的数字。下手したら一〇〇年たつても払えないような賠償金をおしつけました。軍の解体と経済の枠の中で二度とドイツは立ち上がれまいと考えたのでした。でも、ナチのヒトラー出づるに及んで、この賠償金をけとばし、一〇年で良し悪し別にして立ち上がりました。経済の解体、軍事の解体、政治の解体では真の占領ではない。国性破壊その国自体のもつ民族の伝統と歴史を破壊し、その国、自らのもつ価値感を破壊しない限り、またぞろ立ち上がる。国性破壊、国の性格の破壊、日本民族の永遠の弱体化の為に、国性破壊なくて何の占領がある。報告文章はこれから始まっているのでした。

皆様方、世の中は皮肉でした、日本はこのようにして全てを占領軍に委ねました、委ねざるをえなかったからではありましょう。でも、ドイツの国は賢明でした、何度も負けているから負け上手であつたかもしれませんが、ドイツはいかなることがあつても占領軍に渡してはならぬのが二つある、一つは憲法である、一つは教育である、ご多聞にもれず日本と同じように占領軍は憲法を押しつけたことは事実でした。でもドイツ人は実はそれまで一度もストライキがなかったのです、労働組合の経営者をいたぶるストライキをやる権利を人権として許されても、それは国力の弱まることだ。一日も早う復興しなきゃならないこの国が、国力を弱める如き行為は、ドイツ人としてすべきでないとして、ドイツは実はストライキがなかったのです。でも連合軍から憲法を押しつけられたときには、こぞってストライキに体勢を組んだのです。一切の占領政策には協力せずと、遂に占領軍は折れました。あんな方勝手にせい、喧嘩に負けたのだから、つまり占領期間中の暫定基本法なら承認する。ドイツの永久法としての憲法の承認は出来ないのでした。ドイツは基本法として憲法の承認はしませんでした。しかも基本法の最後に「ドイツ人の自由なる意志の表明に基づく、憲法制定のその日をもって、この基本法は効力を失うものである」と、ドイツ人は大人です。日本

は戦後に於いて、子供達の教科書を始め、ボンボンと大学を造りました。ドイツは、今尚、大学は一七校であります。

ドイツは一六州ですから一州に一つずつ、キリスト教を教える私立が一つ、全部で一七校しかございません。ドイツは大学はリーダーを作る所、リーダーとは単に知識の受け売りの場所ではなく、人格識見の身についた者でなければなりません。その人格識見の身についたものを教える大学教授の製造が出来ないので、どうして大学の数が増やせるのかと、ドイツは大学の数の拡大も蹴飛ばしました。日本は戦時中、官立・公立・私立を入れて全てで四七校、内地は四五校でした、日本も四五校の間は大学の教授も立派でした。いわゆる大学生も立派でした。数が少なかつたから、今のようにまともなるくに字も書けないような大学生、常識も知らなければ何も持たない、そういう馬鹿げた者を作る教育、占領軍の手に握られてはならない。殊に子供達に対する歴史教育だけは占領軍の手に握られてはならない。民族の誇りを教えない歴史があるのか。残念ながら、その出発点に於いて日本の国は全て、この国性破壊の元に置かれました。ご年配の各位、お心ある各位のことだから当然もうお耳には達しておりましようが、社会党の国際局長佐田局長が、社会党だから面白い、アデナウワの部屋に参りましたとき、アデナウワの応接室に日本語で書か

れた教育勅語と、ドイツ語で書かれた教育勅語が掲げられてあったのは事実でした。どうせ日本語しか読めないでしょうけれど、「これは何んだ。」「あなたの国の明治天皇からくだしおかれた教育勅語だ。」「なぜそんなものを掲げられてある。」「経済の復興はテクニクで出来ます。でも国の独立は精神面の確立なくて出来ません。その精神面の復興の指導原理を持たずして、私は四度、首相になれといわれましたが、首相の資格がないとしてお断りを致しました。」「計らずも貴方の国の明治天皇からくだしおかれた教育勅語を拝読したときに」と、佐田は国会報告演説会にこう言って居ります。これは官報にこう載りましたから「これだ、私の政党はキリスト教の政党です。でもいいものは戦前であろうと、戦中であろうと、戦後であろうと、いわゆる我々ドイツ人の手になろうと他国民の手になろうと、良いものは良い、これを精神面の復興の原理に使わして呉れるとなればと、五度目に引き受けました。おかげをもってドイツは立ち直りました。弾丸の傷あとは駅構内といわず、いたる所にございます。おかげでドイツは精神面に於いて立ち直りました。どの大学にも横文字で書かれた教育勅語の掲げられているのを見て帰ってくれ、佐田はすぐに本当かとボン大学へ飛び、ボン大学の正面に横文字で書かれていた教育勅語を写真に撮り、証拠品として国会報告演説をし

ております。皆様方、ドイツ人は、このように大人でした、同じ敗戦したと言いながら我々はあまりにも情ない。皆様方、でもマア戦後が終わりました。我々が、ここで言わねばならないのは、我々は今日、若人達が皆、自由を謳歌します。でも皆様方、世の中に絶対の自由はなく、文明社会における自由は、それは秩序の中の自由であり、社会的自由しかないのです。ところがその秩序を破壊し、己れのわがままの為に、全てを敵としていいような自由が許されるのが、民主主義だという大きなはき違いが、今日の子供達に蔓延し、いや日教組を主体に於ける学校の先生方も、尚そう信じております。皆様方、いずれの国の憲法に於いても、子供に見せられない週間誌が繁乱し、又、他人に迷惑を及ぼすような自由を認めている国が、あろう筈がありません。現にドイツの基本法でも平穩にして且つ武器を携えることなき、集会の自由は保障される。皆様方、あのデモ行進だと言つても、ジグザグはする、ゲバ棒は持つ、青山通りあたりで東京にデモ行進が行われるとしたら、商店街は全部シャッターを閉めなきやならない、石は飛ぶ、いずれの国も平穩にして且つ、武器を携えることなき、集会の自由は保障される、皆秩序の中の自由を説いています。言論結社集会の自由でも全て秩序の中の自由、いずれの国の憲法も説いています。日本はただの集会の自由は保障され、言論

結社集会の自由は保障される、何んらそこに秩序の枠を与えることがありません。果たして、文明国家はこういう立場に於いて成り立つて行くのでしょうか、現代はずでにもう戦後ではなく、物は実に豊かになりました。でも大事なことは、我々がもう一度日本らしい秩序のある世の中を持ち来たさずし、果たして、社会正義の失われた世の中が、デモクラシーの世の中としてまかり通るのでしようか。金力、権力、暴力の横行する世の中は、野獣が住めても、人間は住めないのです。金力、権力、暴力をこえ、人の道が貫く、世の中でなければ、野獣は住めても、人間は住めないのです。さて皆様方、他の席上で行いますことは、大きな誤解を招きますので、私はあえてこの集まりに於いて、タブーとされます話題を最後に申し上げて帰りたいと思います。それは皆様方、天皇でした、陛下でした、陛下にふれることは現在在本当にタブーであります、陛下に対する占領軍としての料理の仕方は四つあります、一つは東京裁判に引き出し、これを絞首刑にかける、一つは共産党をおだてあげて人民裁判の名に於いて、これを血祭りにあげる、三番目は中国へ亡命させて、中国で殺す、そうでなければ、二〇個師団の兵力に相当するかと脅えた彼等です。それとも暗から暗へ、一服もることによって陛下を葬ることであります。いずれにしても陛下は殺

される運命にありました。天皇は馬鹿か、氣狂いか、偉大なる聖者か、いつでもつかまえられる。嘗っては一万八、〇〇〇、近衛師団に守られたかも知れないが全くのご衛を保持せずして天皇は二重橋の彼方に厳然としており、馬鹿か、氣違いか、偉大なる聖者か、陛下は、今度の戦いに如何に悩まれたことであつたかは、私の言動からも良くお察し賜われたかと思ひます。陛下割腹自刃の計画は三度貞明様は陛下から目を離さんように、実に悩まれたのは一番陛下でありましたでしょう。皆様方、九月二十一日ただ一人の通訳、武藤さんをつれて、マッカーサーの前に立たれたことは、皆様方もよくご承知の通りであります。ついに天皇をつかまえるべき時が来た、二個師団の兵力の待機をマッカーサーは命じました。陛下は命ごいに来られたものとの感違ひをし、マッカーサーは傲慢無尊にもマドロスパイプを口にくわえて、ソファアールから立とうとしなかつた。陛下は直立不動のままで、国際儀礼としてのご挨拶が終わり、「日本国天皇はこの私であります。戦争に関する一切の責任はこの私にあります。私の命に於いて凡てが行われました限り、日本にはただ一人の戦犯もおりません、絞首刑は勿論のこと、如何なる極刑に処されても、何時でも必ずだけの覚悟はあります」。弱つたのは武藤さんでした。その通り通訳していいのか。「しかしながら罪なき八千万

の国民が住むに家なく、着るに衣なく、食べるに食なき姿において、正に深憂に耐えんものがあります。温かき閣下のご配慮を持ちまして、国民達の衣食住の点のみにご高配を賜われますように」、陛下のご挨拶は淡々として……、やれ軍閥が悪い、やれ財界が悪いといった中で、一切の責任はこの私にあります、絞首刑は勿論のこと、如何なる極刑に処せられてもと申されたのは我らが天皇ただ一人だつたということでありませぬ。陛下は我らを裏切らなかつた。マッカーサーは驚いてスツクと立ち上がり、今度は陛下を抱くようにして座らせ、「陛下は興奮しておいでのように、から、おコーヒーを差し上げるように」、マッカーサーは、今度は、一臣下のごとく直立不動で陛下の前に立ち、天皇とはこのようなものでありませぬか、天皇とはこのようなものでありませぬか、私も日本人に生まれたかつたです、陛下、ご不自由でございませぬ、私に出来ませぬことがあれば何んなりとお申しつけ下さい。陛下は、再びスクツと立たれ、涙をポロポロと流し、「命をかけて閣下のお袖にすがつております。この私に何の望みがありませんよ、重ねて国民等の衣食住の点のみにご高配を賜りますように」、マッカーサーは約束を破り、玄關まで送つて出たのです。

皆様方、日本は八千万といひました、どう計算しても八

千万はおらないでしよう、如何です、一億の民から朝鮮半島と台湾、樺太を初め、凡てを差し引いて、どうして八千万でしょうか、実は六千六百万しかいなかったのです、それを敢えてマッカーサーが八千万として食糧をごまかしてとってくれたのでした。つまりマッカーサーは、陛下のその御人徳に、いわゆる触れたからでした。大統領は、日本に一千萬の餓死者を出すべし、マッカーサーに命令が来ておったのです。ただ一言、マッカーサーは、「陛下は磁石だ、私の心を吸いつけた」。彼は食糧放出を陛下の為に八千万の計算で出し、それがばれたのが解任の最大の理由であった事が真相であります。

私が、でも皆様方、再度申しましょう、さらにご立派であったのは母君の貞明様でした。母君の貞明様は、亡くなるまで防空壕の中で生涯を送られ、雨漏りのする、そして、皆様方、貞明様は法華経の信者でしたから、戦死者のお名前を一〇人ずつ書きながら、法華経をあげ生涯を送られたのが、貞明様でした。その貞明様が皇靈殿に陛下をお招きになり、皇靈殿は高いので、東京の市中が見えるのであります。焼けただれ、一日千秋の思いで我が子の復員を待つ年寄達の姿も見えるのであります。貞明様は、陛下にそれをお見せになり、「陛下、国民は陛下のご不徳によってこのように苦しんでおります、この国を一日も早う復興

しようと召されず、お腹をおめしになろうなどとはご卑怯ではありませんか、退位は絶対になりません」、陛下は母君の前で頭を垂れて泣かれたそうです。どうしたらいいのかと、陛下の万才をさげんで死んでいった護国の英霊の労苦を労いなさい、遺家族の労苦を労いなさい、産業戦士の労苦を労いなさい、これが陛下の行幸に成ったのでした。

最初の地は広島でした、原爆の地、広島でした。共產党の腕きぎが、今こそ戦争の元凶である裕仁に対して、恨みを報じようではないかとピラをまき、宣伝カーで彼らは叫びました。陛下は一兵の護衛を持たず、ツギのあたった背広をお召しになり、中折れ帽をかぶって、広島の駅頭に立たれたことは、我らの記憶に新しいところであります。むしろ陛下がおいたわしかった、万才、万才の歓呼をもって迎えられました。言えばやはり記録に残りましょうから、その県名と市名は申しませんが、北陸のある所に於いては、「朕はタラフク飯を食う」、「汝臣民飢えて死ぬ」とのプラカードを仕立て、共產党が二千名のデモ行進をやったことは事実でした。「陛下お逃げなさい」「私に面会を申し込んでいる限り、私が会いましょう。陛下は皆の前に頭を下げられました。皆様方が私を打擲することによって心がいえるならばごずいにめされたがいい、でも日本の国を一日も早よう復興し、次の子孫へこの国をおくりえてこそ、初め

て護国の英靈に対し、我々が報いる道ではなからうかと、陛下は申されたのでした。はっきり言うた方が良かったかも知れませんが、場所を。陛下に向かつての発砲もありました。ある八二歳の老婆が犠牲になったことも、ある中国地方の一角でありました。陛下の行幸はそういう中に続いたのであります。皆様方、国民の為をご心配なされる陛下、この陛下の大御心を中心において、否、この陛下の爪のあかでも煎じて飲んでくれるなら、今の日本の政治ははるかに良くなる事でありましょう。この大御心を道義の中心、社会正義の中心として、日本の国造りをするところですが、この子孫に伝え残しうる国家になつていくことじゃありませんか。どうか戦中派の皆様方、長生きしてほしい、なにはさて自主憲法の制定を行い、我ら日本人は日本人らしい永久法を生み出すこと、それが我ら戦中派に残された最後の仕事ではないでしょうか。今はこう言うことを言うことは誠に勇気のいる時代になりました。でも皆様方、戦中派がこの任務をおびずして誰がやれと言われるのです。私は、それを一番最初に申しました、戦中派であったことを私は誇りとしていると言うことを、どうか皆様方、私は逆にそのお願いに、長生きをしてほしいとお願いに来たわけです。私は一番末端の戦中派ですが、私は現在五八歳であります。私より若い兵隊は一人もおりません。

でも皆様方に長生きを願わなければ、なぜ、無理かもしれませんが、一二四代の中で一番ご苦労の多かった陛下の、ご存命中に本来の日本の姿に戻してあげたい、私の生涯をかけた学者としての念願は、天皇を護持せざるべからざる学的論拠を付けることに、私は生涯をかけている男であります。どうか皆様方、このままの日本で、将来に心配をもたない年配者はまずおりますまい。何が心配なのだ、それは精神面の復興であります。ローマ興亡の盛衰史を書きましたランケがその文頭に、「凡そ個人と言わず民族又は国家といわず自らを信ずる力を失った者は滅びに至るものであると、その生存の理由、存在の価値を失った者は滅びに至るものである。」もう一度申します、「凡そ個人と言わず民族又は国家と言わず自らを信ずる力を失った者は滅びに至るものである、その生存の理由、存在の価値を失った者は滅びに至るものである。」我らは信じうる日本を造り、信じうる日本を子孫に伝えて行こうではありませんまいか。

ご静聴賜りましたことを感謝申し上げます
（六三・九・二一）
いただきます。

（註）歩一〇四記念講演特集号より転載。

国防に関するシンポジウム(三)

「国防再考」——これで日本を守れるか

吉原恒雄 松金久知 生田目修 長田博

(司会 齋藤五郎)

齋藤 只今、四人のパネラーの方々から、我が防衛力整備上の欠陥について、ハード・ソフトの両面に亘り種々指摘がありました。それらの欠陥を是正し、我が防衛力を真に有効に機能させるためには、どのようにすべきかという、具体的な提言をお願いしたいと思います。先づ吉原さんからどうぞ。

吉原 生田目先生が、国防の基本方針を取り上げられました。この国防の基本方針には日本の安全保障というものは、日米安保条約に基づく米軍の支援を必要とし、防衛力自体はその補助的なものであるというニュアンスの表現がありました。これは独立国家にとって、非常に他に見られない規定であると思います。とはいっても、現状から見ますとそうならざるをえない側面があります。しかし、じ

やあアメリカが有事に対して、日本を助けてくれる確約があるのかという皆無なんです。過去、いろんな日米会談を通じて、有事におけるアメリカ側の来援の規模について問いただしてきましたけれど、アメリカはこれを明言するのは避け、今日に至っております。又、日米防衛協力についての研究は進んでおりますが、この研究成果を政策として取り上げたものは皆無であります。それから一九七三年に、アメリカで「大統領戦争権限法」というものが成立しました。大統領の権限だけで、兵力を海外に派遣するのは最大限六〇日という枠をはめられた訳なんです。この「大統領戦争権限法」と日米安保条約の関係について、やはり日米間の会議において、果たして日米安保条約がその制約を受けるのかどうかということを問いただしたのに対

して、アメリカ側は返答を避けやはり今日に至っていません。実はアメリカ側ははっきり言えないのですね。というのは、影響を受けるんだとなれば日米安保条約は、まったく形骸化されてしまう。影響を受けないとなるとアメリカ議会は黙っていない。その解釈は間違っていると言う事になるでしょうね。そういうジレンマにある訳なんです。先程、長田先生が強調されましたが、結局限定小規模以上なものは日米協同してやるんだというのだけど、その実態は皆無なんです。NATOの場合は統合軍が存在し、侵略があった場合、時間をおって対処するタイムスケジュールが厳密に出来上がっております。しかし、日米間には何もないのです。防衛庁内局の考え方としては、おそらくアメリカの陸上支援はないであろう。それを前提として覚悟している。まあ、期待出来るのは海・空であるというところで限定小規模という考え方が出てきたのです。結局裏返せば、能力がないからそれ以上のものを望んでも駄目だという諦め、諦観がこういう結果を産んだと思います。

従いまして自衛力は、見通し得る将来、日本の安全保障の中心になることは極めて難しいという事を前提にするなら、日米安保条約に基づく米軍の支援というものを確固たるものにする必要がある。そして、その多くは法律事項ではない。政府の与えられた権限内で行われる事である。や

はり仮定の問題ではなく、現実には有効に効果を發揮しうる形にする必要が不可欠だ。ハードウェアの面では金があるけど、ソフトウェア、法制の整備等については紙代がいるだけです。別に予算の制約がある訳ではない。それも法律事項でなくて防衛庁の庁令、内規等で出来る。あるいは政令で出来るものが大部分なんです。それもしようとしたのが現状なんです。まずそれから固めていく必要があるんじゃないかと思われま。又、非核三原則まで及びますと、それは政府自民党の核政策の唯一無二のものではない。当時佐藤元首相は、核四政策という形でそのうちのひとつとして核三原則を持ち出したんです。その他の三つという、核抑止力はアメリカに頼る。核の平和利用は徹底的に行う、国際核軍縮は推進するという四つよりなっていたんです。だから非核三原則というものと、核抑止力はアメリカに頼る事は政策であるから、もし矛盾するものがあるれば整合性を持たさなければならぬ。即ち日本に寄港する核艦船は認めないといけない。日本の領域を通過するアメリカの核艦船を容認しなければならない。という本来の意図はあったと思うんです。それがいつの間にか非核三原則だけが一人歩きしている。この非核三原則も別に自然科学法則じゃなくて、単なる政策にしかすぎない。法律でもない。これは政府の考え方で変更出来るものである。だか

ら政府の一存で出来る、防衛庁の一存で出来る。そのことさえやっていないのが現状です。何故サボタージュするか。やはり国民が防衛問題に目を向ける事が少ない。民主政治は圧力によって成り立つ政治ですから、その圧力が無いというのが現状なんです。

松金 陸上自衛隊を中心にお話ししますと、アメリカの庇護の下に成長してきた我が国の自衛力、或いは平和維持の為の体制というものが、状態の変化、科学技術の進歩等により見直されねばならぬ状態にきています。もう一つ考えなければならぬのが、我が国が歩んできた戦後の自衛体制というものが持っている惰性。これの脱皮をしていく事です。そういうことが今総括的に考えられる一般方向だろうと思います。大事な日本海、オホーツク海という問題と、朝鮮半島の問題との比重のかけ方ということがあります。この事を念頭において、全力を北海道に展開する事は、陸上自衛隊では出来ないと言う事です。当然朝鮮半島の問題と関連して、対馬海峡というものに手当てをする必要がある。両面に対処しなければならぬ。もちろん今のところ重点は北側です。その北側対処の場合に、制空あるいは対ミサイル上での弱点は、津軽海峡以北。もっとこちらの東北の半分以北というものは異様に制空や対ミサイル上、弱点を形勢しております。従って、防空対ミサイル能

力の向上は勿論、航空自衛隊にやってもらわねばなりません。が、地的に制限があります。よって北の防衛は非常に難しい訳です。そこで西の問題。北の特性を考えると、従来はもっぱら内陸に引き込んで持久をする。そして米軍の来援を待つという一般思想がありました。しかし最近では、進んで沿岸地区に出て前方対処早期撃破という方針に切り換えつつあります。これはまことに結構なことと考え現役の人に拍手を送っているところで。

第2点は、日米関係の来援問題。前方で早期撃破を期待するのであれば、まず陸上自衛隊の戦力を倍増する必要があります。これは火力、近代化システム化、要塞化等いろんなものを含めてであります。予備の増員も必要です。一方、長田先生が言われましたが、ローカルな問題、局地的な問題がある。広がって考えなければいけない。私は、全く同感です。新しい機能が必要です。例えば警戒機能、これは陸でいいますと撃破する為には陸上自衛隊だけでなく米軍の来援が必要。それを確実にするには、作戦構想の調整をして、今までの研究だけでなく政府レベルの合意事項としての作戦事項の調整が行われねばならない。それに基づいて、どのような規模の部隊、どういう能力を持った兵団、師団以上の部隊が必要か。どのような我が国のホストネーション、受け入れ国としての支援が必要か。そ

の為には、どういふ法制が不備であるか。又、これを確実にする為には、装備品の事前集積をしておく。これが出来て、制空と西太平洋の制海がさらに拡張されて初めて米軍の来援が可能であるし、第7艦隊のカバーが得られる。従つて陸上自衛隊については、北方重視で国内的にも編成を変え、重い物を事前に北海道に置いておく。米軍の物も置いておく。このような方法で整備が進められつつあります。これをやつていくにはバックアップする沢山の問題があります。これらを整備するのが、これからの防衛力整備の陸上自衛隊に与えられた課題だろうと考えております。

生田目 四つ申し上げます。

一つは、国を守ることが、防衛庁、自衛隊だけで守れるはずがない訳です。やはり国民とともに国を守らなければならぬ。竹下総理が、「故郷論」とは国を愛するんだという事を強調しておられますが、それをさらに一歩進めて、国を愛するならば国を守るところまで国民の与論とし、盛り上げていかななくてはならない。これによつて、自衛隊というものを中核にして国民全部が国を守るという方向に持っていく事が一つ。

次は、危機管理体制の整備。これも陸海空、三自衛隊はそれぞれにやっております。防衛庁も中央指揮所を作りま

したが、充分でありません。これも国をあげて内閣、安全保障会議、関係省庁も入つて危機管理体制を整備しなければならぬ。よく言われますC3I（指揮統制通信情報）これを国家的体制で整備しておかなければ、これからのソ連のミサイル攻撃にしろ、あるいは潜水艦攻撃を事前に察知し、それに対応するというような事、これが出来ないのです。

もう一つは、民間防衛。シビルデフェンスという事を整備しておかないと、いざ有事、ソ連軍が進攻してきた、相手の爆撃が始る時に一般民間人はどうするのか。大島の地震で全島民がこちらへ避難しました。あれは一般災害です。海上保安庁の主力がいて、海上自衛隊の艦艇も横須賀を中心におり、航空自衛隊の輸送機もおつたからこそ全島民が避難できたのです。戦争になった時に、敵の爆撃機の攻撃を受けた時にいったい首都東京はどうなるのか。首都圏の機能分散と言われております。高速道路がやられ、鉄道がやられた場合に自衛隊の行動する車両はもちろん、一般市民の避難も出来ないのです。国が民間防衛という問題について、今こそ真剣に考えなければならぬ時期に来てゐると思ひます。この平和ムードで、そういう事は起こらないと考えていますが、世界各国は民間防衛の体制を着々と整備している訳です。ところがなにも日本にはないので

す。しかも日本は一般市民を戦争災害から守る、ジュネーブ条約には加盟しているが、批准していない。こういうのが日本の現状です。

最後に航空自衛隊としては、敵の戦闘機、爆撃機等から発射されるミサイル防衛。しかもミサイルがさらにハイテク化して射程が延びる。非核、核どちらの弾頭でも付けられるという今の状況において、シベリアから千キロで、非核弾頭で撃ち込まれる場合も当然ある訳です。ミサイル防衛という問題は、これからの防衛力整備において、陸海ももちろんですが、航空自衛隊は特にこういう面を洋上防空と合せて重視していかなければならない。こういう問題を提言しておきます。

長田 全般について申しますと、若干ダブりますが、我が防衛体制というものは法制面において、日米協同作戦に依じられる体制にないという事です。有事法制の不備、ホストネーションサポート体制の不整備、NCS組織の未確認、等と言うに及ばず三宅島のNLP問題、池子の米海軍住宅問題等現実のものから、民間防衛の問題、自衛隊員の処遇の問題、自衛官の法的地位の問題、有事共同対処の際の通信・暗号等の問題等解決しなければならぬ問題が沢山あります。このような状況では、例え装備面を充実してもその装備が有効に機能しえない恐れも出てくる訳です。

そこで提言の一として、軍事面のみならず、政治・経済・社会・教育等、各分野にわたって法制面、実態面の伴った総合防衛体制の確立が第一であります。

次に、海上防衛力整備についてですが、海上防衛構想にそった作戦を遂行する為、日米共同体制の下、欠落している機能を保持する必要があります。艦船を守る洋上防空には、中心防衛というのが確立された概念であります。一般に外側区域の防空はAW機十要撃機、内側区域の防衛は長射程の対空ミサイル、地点防空、これは自分たち自身を守るという事です。地点防空については、短射程対空ミサイル、高性能対空砲、略してシユースと言ってますが近接武器、高性能の高射機関砲で対応する訳です。外側区域の防空、本土近くの沿岸区域については海上自衛隊、航空自衛隊の防空態勢の確立。外洋においては米海軍の全般的航空優勢に期待するという事で、内側区域の防空能力の向上に努めてきた訳です。今回六三年度に認められましたイージス艦の整備によって、内側区域の防空能力は画期的に増大するものと期待していますが、依然としてミサイルを発射する母機に対処機能は所有しておりません。外側区域の防空機能を保有する為、海上部隊指揮官の直接指揮下に入って防空部隊間とデータリンクで直接接続するAW機十要撃機という事は、当然その搭載艦という事になります。

このようなシステム化、または小射程AM空対空ミサイル、アメリカのフェニックスみたいなものですが、そのようなAM装備のAW機等、母機撃墜能力を保有する防空システムを整備する必要がある。特にAW機+要撃機システムの場合は、要撃機に攻撃機能を賦課するならば、これによって第三段作戦、反撃の為の作戦における陸上支援攻撃機、及び第四段作戦、制海維持作戦における我が周辺海域の制海維持機能を限定的ながら保有するという事になる訳です。

次に第四段作戦における相手艦船が、我が周辺海域に進出して自由に行動する事を拒否する為、ソーティコントロール出撃艦船要撃といいますが、その能力を保有する事は不可欠であります。そしてこれに最適なシステムはSSNです。ただ、我が国情から、現在及び近い将来SSNを保有しうるとは考えられません。最近、造船振興財団が研究開発している超電動電磁推進船（昭和六五年に海上実用試験）が成功したあかつきには、液体チツソ（七七℃系）以上の臨界温度の超電動材料が実用化したならば、二一世紀初等において燃料電池+超電動電磁推進システム装備は、SSNを上回る性能が期待できる、ツルーサブマリンというものは、決して夢ではありません。現在保有している防衛力に加えてこれらの装備を保有するならば、日米共同対

処を基本として、我が海上防衛構想に完結性を与える事が可能になります。

提言の二として、現在まで整備してきた海上防衛力と同質の防衛力を、引き続き整備強化することにあると思います。従来のものとは異質な防衛力の整備を行う。この為、技術研究開発を推進する事でありませう。

齋藤 以上を持ちまして、パネラーの方からの発表を終わります。（質疑応答略）

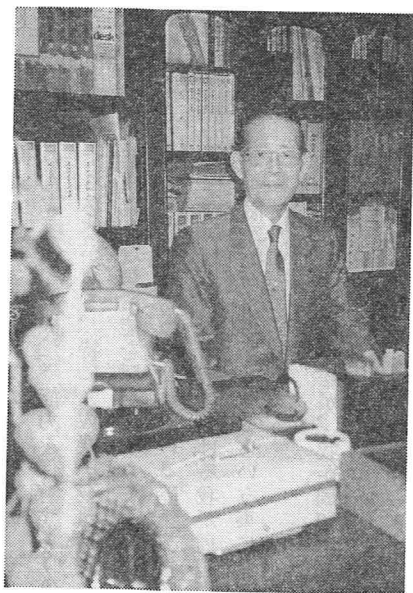
齋藤 以上を持ちまして、シンポジウムを終了いたしますが、司会者からしめくくりの言葉を述べさせていただきますと思います。本日の各講師からの発言ならびに、聴集の方々との質疑応答等によりまして、我が国の防衛体制には実に多くの欠陥があることを、あらためて皆様に御理解していただいたことと思えます。我々はこれを単なる智識として承知し、また慢然とこれを傍観しておくわけには参りません。あくまでも我が身のこととしてこれを考え、その立場立場において、防衛体制の欠陥を是正するための努力をいたさねばならないと考えます。本日お集まりの方々、日頃防衛問題について深い関心をお持ちの方と存じます。何とぞ今後とも、防衛に関する知識の普及、正しい世論の形成等を通じて、我が防衛体制の歪を少しでも正す方向に御尽力されますことをお願いししめくくりの言葉とします

真の日本人(二)

——精神の国日本の真髄を
世界に伝えんとした内村鑑三——

大塚道廣

(大洲陶器(株)社長
航少候23期)



(筆者近影)

悠遠無窮の倫理性

日清戦争の当時、軍国日本のイメージに対抗して精神の国日本の真髄を世界に伝えんとした内村鑑三は、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、日蓮、中江藤樹を代表的日本人として世界に紹介し、国際的にも大きな反響を呼び起こしたことは多数の著書、史料等により歴然たる証憑があり、また現代数多い憂国の志にも遍く語り伝えられているところである。

鑑三の心底にあったものは、日本人の伝統ある精神的遺産を海外に宣揚して、民族的自覚を覚醒せしめんとする情熱の発露でもあったと思われる。それがため、各分野における代表的五人を選んだものであるが、そのすべてに共通する点は、日本人として培われてきた悠遠無窮の倫理性で

あり、そのすばらしい人間としての血脈と純潔な心であり、歴史を動かす人間の力である。

二宮尊徳、中江藤樹を語らんとする前に、先づ、明治以来の近代日本倫理思想の真髓に肉迫したこの偉大なる人物内村鑑三の真の魂の深部をうかがい、これを知ることが前提であると思えたので敢えてその一部を紹介させていた。

鑑三は、思想に生き信仰に生涯を賭け、日本的独自のキリスト教をつくり出した純粹な伝道者であり、卓越せる倫理思想に徹した正義の士であり、情愛の人である。

以前に鑑三は、文化人切手にもなっているし、また日本史の教科書にも採り入れられている。その人氣の秘密は、他人の個性と素質とを尊重する幅のひろさと抱擁力のひろさであり、また文筆ののびやかさは天衣無縫ともいえる。

その生涯に生命を賭け、生活に即して生きてきたことは、全集、選集、著作など、著書の多くにも示されている通りである。

文字通り心臓で書き、生活で書き、肉声で語りかけており、キリスト教の人に読まれるだけでなく、明治以来の近代日本思想史の研究素材としても脚光をあびている。

「我が我が愛する斯国を今日直に濟（すく）ひ得ざるべし、然れども我が百年又は千年の後に之を濟ふの基を置

（す）えんと欲す」（我が愛国心明治四十一年）。「余輩の骨が墓の中に朽る頃、余輩は余輩が望むやうな日本人の覚醒を見るのであろふ。」（百年の後大正三年）

この崇高にして胸を打ち真に迫る烈々たる思想と信仰こそ、精神の国日本の真価を世界に伝えんとした憂国の士鑑三の魂の根源であろうと思う。

近代日本の夜明けに幻を見る

鑑三は文久元年（一八六一）三月二十三日、上州高崎藩士内村宣之の長男として江戸小石川蔦坂上の武家長屋に生れ、一八七七年札幌農学校の官費生募集に応じ入学、キリスト信徒となる。翌七八年には宣教師M・C・ハリスより洗礼を受け、八一年同校を卒業し、札幌県御用掛を拝命、その後農商務省を経て米國に渡る。アマスト大学を卒業後帰国し、各学校教員となる。その後、著述生活に入り「貞操美談」「後世への最大遺物」などの名著が生まれる。

更に「東京独立雜誌」を創刊。私立女子独立学校の校長を経て、後一九〇〇年「聖書の研究」を創刊。一九〇三年日露の風雲急を告げるなかに非戦論を提唱。以後著述と伝道に専念する。その後、第一高等学校長、新渡戸稲造氏の紹介で一高生の一団が門下に入り、柏会と命名される。更に聖書講演会、内村聖書研究会等多くの聴衆を集め研究に没頭し、一九三〇年心臓病にて永眠。七十歳であった。

弘化元年（一八四四年）七月長崎にオランダの軍艦の来襲を明治維新のはじまりとし、明治十年（一八七七年）九月、西郷隆盛が鹿児島城山で自刃した西南の役が終ったときを終りとすれば内村鑑三は、前後に十七年をおき、ちょうど明治維新のまんなかに生れたことになる。少年鑑三は没藩士の子弟として、近代日本の夜明けにひとつの幻を見たのである。憂国の至情やるせないものがあつたのである。

この頃、日本の近代文化に大きく貢献した人々はきら星の如く輩出、多少前後にわたるが森鷗外、新渡戸稲造、徳富蘇峰、夏目漱石、福沢諭吉など、数多傑出した人物を生んでいる。

長い幕府政治を終え、ようやくおとずれた維新のただ中であつて夜明けのまどろみのうちに、異国の文明の根底をいちちはやく先取りしたのが鑑三ら当時の青年であるが、これらの仲間に偉大なる感化をもたらしたのは札幌農学校第二期生当時の米人教師、ウイリアム・S・クラークである。

鎖国から潮（うしお）の如く殺到してきた欧米文明の新しい光源を見究めんとする気魄が当時の鑑三たちにありありと窺われ、北海道での修学の道には大きな希望と光明を見出しては違いない。

道徳教育の重要性

当時の開拓長官黒田清隆は、北海道拓植の中心となる人物の養成には技術的な学問だけではだめだと悟り、クラークにせひ道徳教育にも重点をおいてくれと頼んだといわれる。

「農業」を教えるために招かれたはずのクラークが「聖書」を教えるにいたるいきさつを、鑑三は「黒田清隆伯逝く」で生々と描写している。

「航中談、直ちに学生の徳育問題に入る。クラーク氏はその信念を述べて曰く『余の知る処を以てすれば彼等に聖書を教ゆるの外彼等を徳化するの途あるなし』と、長官襟を正して曰く『是れ余の賛同する能はざる所なり、我国に儒教あり、神道あり、何ぞ必ずしも外教を用ゆるの要あらん、君、余の学生に教ゆるに倫理を授くるも可なり、然れども彼等に耶蘇教の聖書を教ゆるに至つては余は堅く謝絶せざるを得ず』と、クラーク氏は答へて曰く『若し然らば余は道徳を教へざるのみ、余の道徳は凡て聖書の中に存す、聖書を離れて余は道徳を教ゆる能はず』と、伯は日本陸軍の中將、クラーク氏は米国陸軍の大佐なり、二雄其説を固持して相対す、其間豈（あ）に寛容の在るべけんや。船は尻矢崎を周航して函館港に入りぬ、而して將軍大佐共に其説を変へず、船は再び港を

出で、竜飛、白神を左右に見て中の潮の荒波を蹴立てつ
つ進みぬ、而して米の大佐は日の中將に此問題に就ては
一步も譲らざりぬ、船は終に小樽港に入りぬ……両雄共
に札幌に入りぬ……開港の時期は迫りぬ、而して二者孰
れか一步を譲らざるべからず、伯クラーク氏に面して曰
く『君終に君の意を曲げず、余は今如何ともする能は
ず、余は君に告げんと欲すと、唯君願くば余り公然に之
を為す勿れ』と、大佐は答へて曰く『君に謝す、余は明
日より倫理を余の学生に講ずべし』と、是れ北海道札幌
に於ける基督教の濫觴（らんしやう）なりとす。』

この年（明治九年）クラーク五十歳、黒田は三十六歳。
クラークは黒田から聖書を教える正式の許可をとりつけた
のである。同じ年、熊本では洋学校が閉鎖され、徳富蘇峰
らは新島襄の同志社へ転校を余儀なくされていたのはま
ことに対照的である。

烈々たる憂国の至情

鑑三はあくまでも武士の子であり、祖国を愛する「武
士の魂はいつまでも持ち続けており、キリスト教への入信
は、日本人としての愛国心をいささかも傷つけるものでは
なかった。日本人としての自己の主張を毅然として發揮し
つつキリスト教の意義も認めたものであり、純粋な伝道者
になつたのは内村鑑三ただひとりである。

この偉大なる鑑三を生んだのもすべてこのクラークの教
導のお陰である。開国当初の日本人は、西欧諸国に対して
全く盲人同様であり、不安と動揺のなかにあつたが、学生
たちに目を世界に向けさせ、自己の未来を真剣に考えさせ
ようとした点など、クラークはただ単に一外人教師として
でなく、日本へ文明開化をもたらした偉大なる貢献者であ
るといわざるを得ない。

鑑三は、一方において高邁な歴史的使命を強調するとと
もに、他方では現実の社会のもつ腐敗墮落を慨嘆するとい
う憂国の至情烈々たるものがあり、祖国及び社会改善への
道に悲壮なる決意が秘められていたと思える。

このように鑑三の心底よりほとばしる思想の改革、即ち
日本の倫理の原点である道義の復興を基本とした興国への
至情は、その多数の著述論旨の中に脈々としてほとばし
り、湧き出でる泉の如く汚染することを知らず、清流を求
めて本流と化し、大海にそそぎ四海を呑み包容する。

鑑三の真価を改めて世に伝え、現世への警醒打ともなれ
ば何よりと存じ、その一節を抜粋する。

（つづく）



ブッシュ新政権下の アメリカ合衆国

齋藤

忠ちゆう

（国際政治・軍事評論家
日本を守る会代表委員）
連盟顧問

アメリカ保守主義の 決定的勝利

アメリカ合衆国第四十一代大統領ジョージ・ブッシュの決定。それは、大統領選挙の最初から予想された通りの帰結であったとも言えるし、また、ブッシュその人の信念の勝利であったとも言えるであろう。

いずれにもせよ、この結果は、アメリカ合衆国本来の保守主義の決定的勝利であり、アメリカの栄光の奪還を志す合衆国々民の熱い願の成果があったと思わなければならないまい。

だが、同時に、その勝利は、あまりにも危険な前途を示唆するものでもあったのだ。

新しい大統領を待つものは、前大統領ロナルド・レーガンの共和党権が残した巨大な赤字であらねばならない。

曾ては「双児の赤字」——財政赤字と貿易赤字——と言

われてきた。だが、今では、それに「家計赤字」を加えて、「三ツ児の赤字」と呼び始めている。

その空前とも言うべき大赤字が、首を揃えて、新大統領を待ち構えているのだ。勝利の美酒に酔い痴れている余裕などが在ろうはずはあまい。

「三ツ児の赤字」の

重荷

財政赤字は、一九八八年度において、一千五百五十億ドル。貿易赤字に至っては、実に、一千七百〇三億ドルに及ぶ。

この巨大な赤字は、今後ますますその額を増すとも、減少することは、まず、在りそうも無い。赤字絶滅を口にすることは容易であろう。だが、実際に、どのような手段によつてその目的を達成することが出来るのか？ それこそは、何よりも困難な問題であらねばならない。

軍事費の削減ということも、果たして、たやすく実行できるか？ 或は、また、同盟諸国の経済的援助に頼るといふことも、どこまで可能か？

保護貿易ということも、必ずや、自由主義諸国の激しい反撃を受けざるを得ないであろう。

民主党支配下の

合衆国議会

まして、更に大きな困難は、合衆国議会が、野党、民主党の巨大な勢力によつて、事実上、占領されていることである。どのような政策をとるにしても、まず最初に対決を迫られるものは、多数野党、民主党の真ツ向からの反対であらねばならない。

合衆国議会上院の議席定数は百。そのうちで、三十三議席の改選が行なわれたのである。

その結果、民主党は、改選議席の十八を一議席上回わる十九議席を勝ち取ることが出来た。

非改選議席と合わせるならば、民主党の新議席数は、総計五十五。——ブッシュの共和党は、実に十議席の差を付けられる結果になったのである。

一方、下院は、全議席が改選された。民主党の昨日までの議席数は二百五十五であったのだが、改選の結果、五議

席を増して、二百六十議席を獲得した。——これに対して、共和党の方は、百七十五議席の中から二議席を失なつて、百七十三議席。

かくて、合衆国議会は、再び民主党勢力によつて支配されることになったのだ。

たとい増税を

決定し得たとしても

その共和党が劣勢に在る議会で、ブッシュ大統領は、最初から、財政赤字の削減と取組まなければならない。ソヴイェト連那の軍事力との対決を先行しなければならない。日本との貿易摩擦の問題を解決しなければならない。中米に対する政策を完行しなければならない。

だが、その解決の手段として増税を強行することは出来ないのだ。ブッシュは、すでに選挙戦のあいだに「増税は行なわない」ことを公約している。

それでなくても、財政赤字の解決にこの方法を用いることは、国民の新政権に対する信頼にも大きな影響を及ぼすばかりではない。議会における野党民主党の抵抗を考えても、まず不可能のことである。

たとい、また、増税を決定し得たとしても、それが現実

に効果を顕わすのは、三年後、——一九九一年以後のこと

である。現実の解決方法としては、到底、期待を懸け得るものではない。

貿易赤字解決の

苦難

だが、それにもまさる困難は、わが日本にも至大の関係を持つ「貿易赤字」の解決であらねばならない。民主党との対決において最大の問題となり得るものは、おそらくは、この「貿易赤字」解決のための手段としての輸入制限、或は均等機会の主張ではあるまいか？

言うまでもなく、ブッシュ大統領は、自由貿易の主張者である。

レーガン前大統領の政策を継承する者としては、もとより、当然のことであらねばならない。このたびの選挙戦のあいだにも、わが日本に、米の自由化を要求しないことを誓約している。

だが、現実の問題として、ドルの下降に困るアメリカ合衆国の苦悩は、あまりにも明白な事実であらねばならない。

「包括貿易法」の可決に

成功した民主党

繰り返して言う。わが日本とアメリカ合衆国、両国のあ

いだの貿易摩擦は、何びとも否定できぬ現実の事実なのだ。

アメリカ合衆国が、今後もなお、膨大な貿易赤字に苦しむことは、結局、避け得られまい。それを如何にして解決するかは、アメリカ合衆国にとって、生死の大問題として残らざるを得ないのである。

もとより、アメリカとしては、これ以上膨大な貿易赤字をかかえて苦しむことは、もはや耐え得るところではない。大統領としても、これを坐視することは許されぬであろう。

相手国が、自制の手段によってアメリカを援けてくれるか、それとも、アメリカ合衆国自身、何らかの措置を採ることによって、悲境よりの脱出を策するか？

いずれにしても、当面の問題は、なによりも、合衆国会において多数を擁する民主党の動きであらねばならない。その多数勢力の強圧下における合衆国議会の反応であらねばならない。

ベンツェン上院議員を中心とする民主党勢力は、早くも、既に「包括貿易法」の可決に成功しているのである。

なお続くソ連との

核軍事力競争

それと共に、ソヴィエト社会主義共和国連邦を相手としての軍事力の競争は、プツシュ政権にとって、最大の重圧とならざるを得ない。

本誌前号に寄せた小論でも引用して私見を述べて置いたことであるが、イギリス王国の国際戦略研究所が此の程発刊した新版の軍事力報告「ミリタリ・バランス一九八八—一九八九年」は、極めて明白に、ソ連との間の軍事力の対決に終りは在り得ないことを言明している。

同時にまた、「東・西両世界のあいだの現実の戦争を阻止し得るものは、ただ核抑止力だけである」旨を強調しているのである。

「ソヴィエト連邦側は、公式には、自国の軍事体制を防衛型に変更するという新しい構想を表明している」。だが「現実には、今日までの攻撃型軍事体制には何ら変化の兆しは無い」と述べ、「そもそも核抑止力が存在する限り、東・西両世界のあいだの現実の戦争は、極めて起こり難い」と述べている部分がそれだ。

なお続く核競争

現実の事態は

更に、また、その英国版軍事年鑑の報道するところに依るならば、米・ソ間の戦略核半減条約は、調印までに持ち

込める可能性はまず在り得ないと言う。

言うまでもなく、世界の話題となった中距離核廃絶条約に次いで、レーガン前大統領とゴルバチョフ書記長とのあいだに話し合いが進められて居たものである。「大陸間弾道ミサイル現在の保有数に就いて言う限り、米合衆国の側にも、ソヴィエト連邦の側にも、変化は殆ど無い」と言うのだ。

まして、現実の事態は、それどころではない。僅かにこの一年の間だけでも、ソヴィエト連邦は、SLBM（潜水艦発射ミサイル）の数を十一基増加しており、アメリカ合衆国も、また、SLCM（海洋発射巡航ミサイル）の新しい配備を続けつつあるという。

結局、プツシュ新政権の前途は、極めて波瀾に充ちたものと思わざるを得ない。新しい大統領の健闘を、心より祈って已まない。



軍事常識

日米共同訓練

久松 公郎

(連盟理事)

自衛隊は、自衛隊独自の訓練を行うほか、米軍との共同訓練を行っている。

これは、戦術技量の向上を図る上で有益であるのみならず、平素から相互理解と意志疎通を促進してインターオペラビリティ（相互運用性）を向上させ、もって有事、日米共同対処行動を円滑に行うことを可能とするものである。これが、日本安全保障体制の信頼性と抑止効果の維持向上に資するものであることは言うまでもない。

共同訓練の参加範囲は、陸・海・空各自衛隊の各級部隊のほか近年は統合幕僚会議にも及び、訓練の種類としては、指揮所演習のほか実動の総合訓練と機能別訓練等、広い範囲に互っている。訓練は日本各地及びその周辺において、いずれも日米それぞれの指揮系統に従って行われている。また、陸・海各自衛隊では、一部についてハワイまた

はその周辺海域等で行うものがある。

訓練の主眼は、主として部隊運用における連携、調整要領の演練にあるが、訓練を通じての相互連帯感や訓練の実戦的雰囲気等、精神上、心理上の効果が大きい。

以下に、統合幕僚会議並びに各自衛隊について、日米共同訓練の概要を紹介することとする。

一、統合幕僚会議

日米共同訓練については、近年来、陸・海・空各自衛隊がそれぞれ着実に成果を挙げつつあり、一方、自衛隊の統合運用態勢も確立されてきたため、昭和六一年二月、初めての日米共同の統合指揮所演習を開始した。

引き続き同年一〇月には、日米間は初の統合実動演習を実施、空地作戦及び海空作戦での各種戦術的訓練や、陸上、海上、航空の各作戦における日米部隊間の基礎的な共同連携要領を演練した。その後も毎年、共同指揮所演習が行われている。

昭和六一年一〇月に行われた統合実動演習の概要は次のとおりである。

期	間	六、一〇、二七～一〇、三一
場	所	北海道大演習場 本州東、南方海空域
規模	日	統幕、陸・海・空各幕
	陸・海・空各自衛隊約	六〇〇〇名

艦艇約一〇隻 航空機約五〇機

米 在日米軍司令部 在日米各軍司令部

米陸・海・空軍各部隊約七〇〇〇名

艦艇數隻 航空機約五〇機

訓練内容 日米部隊間の基礎的連携要領及び各自衛隊・米各軍間の連携要領の演練

二、陸上自衛隊

陸上自衛隊は昭和五六年度に通信訓練及び指揮所演習を開始してから、毎年、米陸軍と海兵隊との間に指揮所演習及び実動訓練（機能別訓練、総合訓練）を実施しており、最近は各年度とも指揮所演習が三回、実動訓練が四回程度行われている。

(一) 総合実動訓練の一例

期 間 六二、一一、一〇～一二、一〇

場 所 日出生台演習場

規模 日 西部方面隊約一五〇〇名（一ヶ戦闘団）

米 第九軍団約一六〇〇名（一ヶ歩兵旅団）

訓練内容 連携要領の演練

(二) 機能別実動訓練の一例

期 間 六二、一一、一一～一二、二一

場 所 東富士演習場

規模 日 東部方面隊 約九〇〇名

米 第三海兵兩用戦部隊 約一〇〇〇名

訓練内容 連携要領及び近接戦闘

三、海上自衛隊

海上自衛隊は、各自衛隊の中で最も早く、昭和三〇年以來、対潜訓練及び掃海訓練を中心とした日米共同訓練を行っており、その後、リムパックに参加するとともに年例の海上自衛隊演習の一部にも共同訓練を取り入れている。

(一) リムパック

昭和五四年度から、米海軍の第三艦隊が外国艦艇の参加を得て実施する総合的な演習リムパック（隔年実施）に参加している。リムパック八八（昭和六三年六～八月）参加部隊は次のとおりである。

護衛艦 八隻 潜水艦、補給艦 各一隻

対潜哨戒機（P-3C） 八機

(二) わが国及び周辺海域での共同訓練

毎年、指揮所演習のほか対潜訓練（防空戦、対水上戦を含む）及び掃海訓練を各二回、小規模訓練（戦術運動）一回程度が実施されている。

対潜訓練の一例

期 間 六二、八、一二～八、二一

場 所 北海道及び三陸東方海域

規模 日 艦艇一四隻 航空機（延）一七機

米 艦艇 四隻 航空機(延) 一三機

訓練内容 対潜、防空戦、対水上戦闘訓練等

(三) 海上自衛隊演習(本州南方、東方)

毎年恒例の海上自衛隊演習に対しては、米海軍は空母を含む艦艇と多数の航空機が共同するのが例であり、昭和六三年度にはイージス艦も加わった。近年の演習参加兵力は次のとおり。

日 艦艇一五〇隻、航空機(延) 六〇〇六五機

米 艦艇一〇〇一四隻、航空機(延) 九〇〇九五機

四、航空自衛隊

航空自衛隊の日米共同訓練は、昭和五三年度に開始した戦闘機戦闘訓練に続いて、逐次、救難訓練と指揮所演習が開始され、昭和五九年度からは年例の航空自衛隊総合演習の中に共同訓練を取り入れている。

なお、米軍部隊と近接している地理的特性により、北部航空方面隊と南西航空混成団では、米空軍としばしば小規模な戦闘機戦闘訓練を実施しているが、異機種の手と手の訓練は互いに啓発されるところが大きい。

(一) 昭和六〇年度以降の各年度共同訓練実績

防空戦闘訓練(相互連携要領演練) 三〇五回

戦闘機戦闘訓練(空中戦闘) 一〇〇一五回

救難訓練(航空機による救難) 一回

指揮所演習(部隊相互間の調整要領)

(二) 防空戦闘及び戦闘機戦闘訓練の一例

期 間 六二、五、一一〜五、一五

場 所 三沢東方及び秋田西方空域

規模 日 航空機(延) 二一三機

米 航空機(延) 二四四機

訓練内容 日米部隊間の連携及び空中戦闘の演練

以上

(本稿は、「防衛白書」昭和六一、六二、六三各年版を参考とした)



「サイレント・ミツション」(六)

訳者・柏木 明

(連盟理事)

バアーノン・A・ウオールターズ著

六、ニクソン大統領との旅

○大統領訪欧準備

一九六八年十一月、ニクソン氏が大統領に選出された時、私はフランス駐在武官としてパリに勤務していた。

彼が大統領に就任して間もなく、私が彼の前任者達に仕えたように、彼の海外旅行に随行して通訳をすることを命ぜられた。

一九六九年二月初め、大統領の訪問準備でロバート・ハルドマン、ジョン・エリックマンその他の人々がホワイトハウスの先遣グループとしてパリに到着し、私はこのグループに合流した。私はこの時陸軍少将だったので、將軍の通訳には少々驚いた。

先遣グループの一行は、私にとって始めて会う人ばかり

だったが、彼らと一緒に大統領の訪問計画、警備などについてフランス側の責任者と協議した。大統領の外国訪問の詳細を私は前大統領のときから知っていた。

シユライバー大使は、ケネディ大統領の義兄だった関係で、先遣グループの一行とは密接な連繋の下に準備が進められた。彼はリンドン・ジョンソンから大使に任命されたが、ニクソンは彼を暫くの間パリに駐在させようと考えていた。

暫くして、一行の中のハルドマンとエリックマンがライバルであることに気づいて興味を持った。私の何年間かの経験では、ホワイトハウスの中でこの種のライバル関係があった。このグループは、フランス側との交渉では良い協力関係にあったが、殊にエリックマンは大変リラックスし

ていた。

パリで準備した後、我々はブラッセルとロンドンで同様な準備をした。また、ボン、ベルリン、ローマで訪問の準備を行った。そして、先遣グループは再びパリに戻り、すべての準備を完了して米国に帰った。ローマでは、イタリア政府とヴァチカンの二つの政府訪問があったことと、米國がローマ法王庁と外交関係を持たなかったことから複雑な問題があった。ローマ訪問では、イタリア政府訪問と法王庁訪問の二段階に分ける計画を準備したことにより、新しい大統領を迎えるための心配は除かれた。先づイタリア政府を訪問し、一旦フランスに戻った後、第二段階としてヴァチカンを訪問することにしたのである。

諸準備が完了して私は武官の職務に戻った。

大統領の外国訪問の場合、構成員によって準備のし方が異なるという経験をした。大統領の訪問は、限られた時間の中で、できる限り大統領の要望にそって、立体的に行動できるようにすることが必要である。私は正規のメンバーではなかったので、NATO理事会やフランス駐在大使館のこと以外は、ホワイトハウスから来たメンバーに注意深く発言し、行動するようにした。事実、私がホワイトハウスに勤務したのは、トルーマン大統領の時代にハリマン氏の下で勤務しただけだった。

このやり方で摩擦を防ぐことができた。

○ベルギー訪問

一九六九年二月十五日、私は大統領一行に合流するためワシントンに行った。この機会にアイゼンハウワー將軍をウォルターリド陸軍病院に見舞うと彼は補聴器をつけた温かな表情はいつも変りなく元気だった。

二月二十日、ホワイトハウスでニクソン氏に会い、彼が訪問を予定する人物に関する私の印象と、会談の話題として取り上げるに相応しいテーマを説明した。彼は既にそれらの問題について、ソ連の話題は会談の雰囲気を作り、冷たい関係にある共産中国の話題、また同盟を損うことなくベトナム戦争の名譽ある終結に関する話題など充分な腹案を持っていた。

一九六九年二月二十三日、我々はホワイトハウスのヘリポートからヘリコプターでアンドリュース空軍基地に飛び、そこから空軍第一号機に搭乗して順調な飛行を続けベルギーの首都ブラッセルに向った。機中で私はニクソン氏にボードワン国王は見事な英語を話すので会談には通訳の必要はないでしょうと話した。

ブラッセルに到着するとボードワン国王は英語で歓迎の辞をのべ、ベルギー公用語であるフランス語とフラマン語の通訳が入った。

ニクソン大統領一行はヒルトンホテルに宿泊した。ニクソン氏はガストン・エイスケン首相と会談したが彼は米国の大学で勉強したので英語を良く話した。私は会談に立ち合ったがメモを取るだけだった。ピエール・アルメル外務大臣との会談では私が通訳をした。

後に、ボードワン国王はファビオラ王妃と共に、大統領のために宮殿で公式昼食会を催した。私は王妃がスペイン生れのスペイン人で、フランス語もフラマン語も話せることを知っていたが、英語を話せるかどうか知らなかった。

王妃は大変魅力的かつ優雅で、見るからに王妃に相応しい方に思えた。昼食の前に、大きなレセプションルームで王妃と話す機会があった。

国王は、私にどこでフランス語を習ったかと尋ねたので、私は子供の頃、六歳から十六歳までフランスに住んでいたと答えた。

やがて、昼食会場の入口でリスイブイグラインの準備ができたので招待客は威儀を正してベルギー国王と米国大統領に自己紹介した。ベルギーでは公用語が二ヶ国語あるので招待客はそれぞれの言葉で挨拶することになる。例えば、外務大臣はフランス語で挨拶するので私は大統領の直ぐ後に立って大統領の耳許へそれを伝える。外務省官房長はフラマン語で自己紹介するので私はそれを英語で大統

領に伝えることになる。

ボードワン国王は驚いて私の方を見ながら、フランス語で「將軍、貴方はフラマン語も話せるのか」と言った。私はフラマン語で「フランス語と同じ程には話せません。しかし、この目的のためには充分話せます」と答えた。国王は「私はアメリカの將軍でフラマン語を話せる人に会ったことがない」と大統領に話した。

昼食会は素晴らしく、ベルギーとの間に緊張する問題もなく楽しい雰囲気で行われた。ニクソン氏は国王に対し「ベルギーへの旅行は私にとって始めてのものです」と述べた。過去においては必ず何か問題があったがこの時は何らの問題もなかった。

大統領はベルギー無名戦士の墓に花輪を捧げた。そして、ベルギーにある NATO 本部と EEC 本部を訪問し、それぞれの場所で米国の政策について演説を行った。

大統領はベルギーを終って英国に向い、引き続き予定の三ヶ国とローマ法皇庁の訪問を終えて米国に帰り、私は本来のパリ駐在武官の職務に戻った。

○ドゴール將軍の葬儀

次に私がニクソン大統領と共に旅行したのは一年半後の一九七〇年九月から十月にかけてのイタリー、スペイン、フランス訪問であった。そしてニクソン氏との次の旅行は

ドゴール將軍の葬儀に参列したときであった。我々がパリに着くと町は不思議に静かだった。ただラジオとテレビを通じて厳肅な音楽だけが流れていた。大統領は大使公邸に宿泊し、私はクリヨンホテルに泊った。

ニクソン大統領がエリゼー宮のポンピドー大統領の部屋に入ると、フランス大統領はニクソン大統領に対して深い感謝の気持を表明したが、「ドゴール將軍は誰も信頼しなかった、そして、そのことが彼の終焉を齎らした」と興味ある個人分析を披瀝した。ポンピドー自身がその疑惑の犠牲者だったと考えていた。

ポンピドー大統領は印象的であった。私は彼がその場しのぎの返事をするを一度も見ることがなく、彼は常に非常に堅実な人物に見受けられた。彼はドゴール將軍への貢献が信頼された大変幸運な人だったと私は感じている。

ポンピドー氏はほんとうのところアメリカ人が好きではなかったが彼はアメリカが世界において力を代表していることを理解していた。彼は米国旅行において米国民の一部の敵対的デモは彼を大きく揺ぶった。そしてなぜ連邦政府がそれを止めなかったか理解できなかった。彼はニクソン大統領に対し、自身を守ろうとしない社会は到底生き残ることができないし生残る価値がないと強調した。

ニクソン大統領はノートルダム寺院におけるドゴール將

軍の葬儀に参列した多くの外国の指導者に会った。

葬儀は最も印象的であった。ポンピドーは葬儀に列席した外国の代表を招いて小さなレセプションを催した。その時私は英国のチャールズ殿下、英国首相らに会った。首相は大変リラックスしているように見受けられた。

大統領は米国に帰り、私はパリの職務に復帰した。

○アゾレス会談

一九七一年十二月十二日から十四日の間、中部大西洋アゾレス諸島で、ポンピドー及びニクソン両大統領の会談が行われ、私は会談に立ち会った。これらの会談は、フランス側が政治問題よりも重要と考えている厄介な財政上の会談であった。米国側からはジョン・コネリー財務長官が、またフランス側からは後にポンピドーの後継者となったヴァレリー・ジスカル・デスタンが参加し、激しい交渉の後最終的に米国側がドルの切下げに同意した。

この会談でニクソンは、フランス大統領の対ソ観と対ソ連人観に関して非常に興味を持った。ポトゴルニーは理論的にはソ連の首相だが、實際上の力は持っていない。コスイギンは非常に理論的で、特にドイツ人嫌いであること。ブレジネフは間違いないがボスであるなどの考えが披瀝された。

ブレジネフはポンピドーに、SS-9が世界最大かつ最強

のミサイルであり、ソ連は今や、米国との会談において優位に振舞っていると誇らし気に話した。また彼は、ソ連は平和を望んでいるが決して後退しないとも言った。

ポンピドーの言う意味は大変確かなものだった。フランス大統領は中国問題にも非常に深い関心を持っていてと言った。ポドゴルニーは、毛沢東が死んだとしても、中ソ関係には何らの変化もないし、二つの共産主義国家の歴史は継続するだろう。したがって、ソ連は西側だけでなく、中国と対峙することになると話した。

アゾレス会談の間、ポンピドーはこれまで私が参加したどの会談よりも緊張していたように見受けられた。多分、これは彼が亡くなる原因となった病気の始まりだったのではなかったかと思つた。

ニクソンは、ポンピドーに対してフランス大統領の意見が非常に価値のあることを含めてお礼をのべた。(つづく)

祝!! 秋の叙勲(連盟上申)

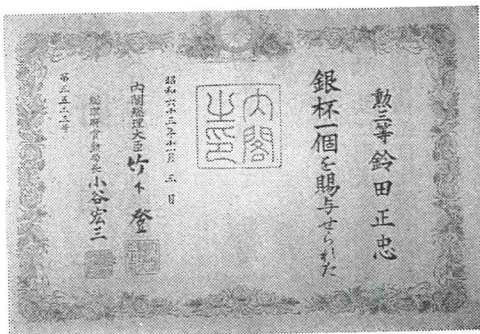
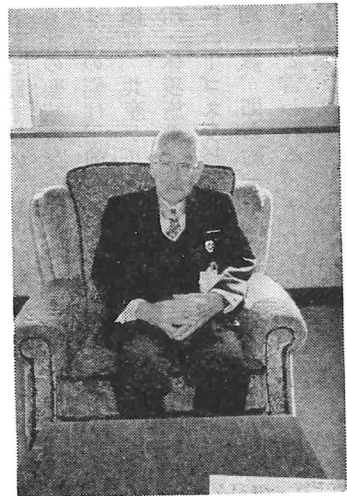
賜杯 銀杯一号 長崎県支部会長

鈴木正忠殿

十月二十八日 閣議決定

十一月三日 発令

十一月十四日 防衛庁長官から伝達



現代に見る間接侵略・革命(九)

狩野 信行

(日本軍事史学会監事)

前号においては、「ギリシヤの風土」と第二次大戦間におけるギリシヤの国内での「最初の戦闘」について、その概要を述べ、次に、「内戦の開始とその経過」の前半部分について語りました。今回はその後半部分から申し上げる事と致します。

ウ 内戦の経過(つづき)(一九四七年末迄)

ゲリラにとって最大の問題点は、兵たん・補給であった。そこで彼らは、五十名から六十名位迄の「地区隊」なるものを編成して、食糧・衣料・弾薬等を集め、ゲリラ傷病者の手当迄も行った。又地区隊は情報活動も行った。地区隊員は、政府軍の討伐作戦間は、自己の担当地区内に分散・潜在して、政府軍の立ち去るのを待った。武器弾薬類は、第二次大戦間にイギリスがバルチザンに補給したものの、イタリヤ軍から接收したもの、ドイツ軍の引き渡したもの、警察隊や政府軍から捕獲したものを持っていた。その他、北隣りのアルバニヤ・ユーゴスラビヤ・ブルガリヤ

の聖域から、北部山岳地帯の国境を越えて、駄馬・ばん馬
或いはトラックで運び込まれた。

北部のマケドニヤ地方とスラキ地方(北はブルガリヤ、東はトルコに接している)とは、共に肥沃な農業地帯でもあったので、北部のゲリラの食糧補給は比較的容易であったが、山また山の中部や南部地域のゲリラは、そうではなかった。そこでこれら地域には、北部の拠点から脊梁山脈沿いの秘密輸送路を使い、駄馬で輸送したのであった。何れにしても北の聖域の存在は、絶対的な強みであった。しかも接しようの幅は、前述したように八百軒もある。これら聖域三国は、共産ゲリラにとって避難所として申し分なく、訓練所・休養施設・病院・兵たん集積所等を提供してくれ、特にユーゴスラビヤの支援の力は大きかった。ゲリラ兵力の過半数、即ち約一万の戦闘員は、常時これらの国々の中にいたと言われる。ユーゴスラビヤ南部のブルケスの町には、ゲリラの将校や兵士を訓練するための学校迄も

設けられていた。

一方ギリシヤ陸軍は、ドイツ軍の占領時に解散させられ、それ以来四年の間は、実質的には存在していなかった。イギリス軍は、かつての将校・下士官・兵隊に装備を与え訓練させて、一九四八年迄には十万人にしようとしたが、ギリシヤが本格的攻勢を開始した一九四六年末頃の時点では、火力にせよ機動力にせよギリシヤと余り差はなかった。元ギリシヤ陸軍の将校の中多くの者、特に有能な若手の将校達は、第二次大戦中、共産党の指導する対独レジスタンスに関係していたので、無条件に採用することも出来ず、指揮官・幕僚が不足した。そこで急速に軍を再建する為、最初の頃は在郷軍人を召集して間に合わすこととしたのであった。部隊は再訓練に充分な時間をかける事もできずに、ギリシヤとの戦に出動した。軍には家族持ちのどちらかと言えば年老いた兵士が多く、又軍隊内には共産党の細胞もあって密かに活動した為、軍の士気は容易には上がらなかった。徴兵も始めたが、これ又思想的に疑わしい者を次々に排除せざるを得なかったので、兵力の増強もままならなかった。新兵は短期間の訓練の後に、第一線の部隊に配置され、直ぐに実戦に参加させられた。

他方政治家は、自分の選挙区の住民の保護の為に、陸軍を配置する事を要求し、軍は止むを得ず分散し展開して丁

う事にもなった。陸軍が作戦実施のために兵力を転用しようとする時、その地出身の政治家の抗議によって、移動させる事が出来ないこともあったと言われる。編成早々で、各個訓練の域を出ていないような陸軍は、この為にも中隊規模程度に固まって守備しなければならなかった。このようにして陸軍部隊は、機動性を失って張りつけとなり、その空白地帯では、ギリシヤの行動が容易となったのである。

ところで一九四七年の四月に、軍は始めて大規模な作戦を開始した。即ちアテネの西のコリント湾北岸から北に向って作戦し、ギリシヤを各個に包圍撃滅した後、北部国境を閉鎖しようとしたものである。しかし、部隊相互の連絡・調整が不十分で、かつ各部隊は積極性に欠け、情報も事前にも漏れていた事もあって、ギリシヤは北進する陸軍部隊の間隙から逃れ、そして空になった南方の諸地域を攻撃した。かくして軍の四月攻勢は失敗し、更に冬季に予定していた作戦迄も中止してしまった。政治家からの圧力は一層強くなり、陸軍は町村住民保護のために広く展開し、統一された強力な作戦等行い得べくもなかったのである。

ギリシヤは神出鬼没な作戦を行っていたが、やがて大隊編成迄をも持ち始め、一九四七年暮にはその戦術迄をも変更して、北部山岳地帯の諸地域を堅固に保持するようになった。彼らは、抜き差しならぬ政府軍の状況を観察し、聖域

三国からの援助ルート確保と、新政府支配地域の確保とを狙ったのである。一九四七年十二月二十三日ゲリラは、ギリシヤ北部にE.A.M・国民解放戦線の代表者をも交えた「臨時民主主義政府」が樹立された旨を声明した。

当時、農山村部のギリシヤ住民は、ゲリラによって家畜や食糧を奪われ、家を焼かれ、或は肉親が殺害されて、都市へ都市へと逃げ込みを図り、その為都市の住宅難・食糧難は益々激しくなつて行つた。四七年末における、これら避難民の数は、遂に七十万を越える事となつた。ギリシヤ全人口の約一割が難民となつたのである。

エ 内戦の経過（一九四九年迄）

(ア) トルーマン・ドクトリンと米国のギリシヤ援助

一九四七年二月下旬、イギリスは英領マレーにおける対共産ゲリラ作戦、北阿中東の英領諸地域の紛争対処、インドを始めとする全世界に股がる数多くの英領諸地域経営の困難化に悲鳴を上げて、ここギリシヤにおいても遂に手を引くこととした。即ち「海外への部隊派遣は困難となつたので、一九四七年三月三十日をもってギリシヤに対する一切の援助を打ち切ることとする。トルコに対する経済援助も同様である」と米国に通告したのである。

そこで米国大統領トルーマンは、三月十二日、上下両院合同会議において「全体主義の脅威を受けて戦っている国

々」に対し援助を行うべきであるとして、ギリシヤとトルコへの経済及び軍事援助の承認を請要した。米外交政策の一大転機となつた所謂「トルーマン・ドクトリン」の宣言である。この法案は五月下旬に成立し、米国はその巨大な力をもってギリシヤをも応援するようになった。

ギリシヤには、先づ三億ドルの援助が与えられ、一九四七年十二月米国のバン・フリート中将指揮下の合同顧問団が活動を開始した。アメリカからの物資が続々と到着する状況は、ギリシヤ国民に明るく大きな心理的影響を与えることとなつた。

(イ) 自衛態勢の強化

ギリシヤ政府のゲリラに対して使用し得る地上兵力は、陸軍の他、先に述べた司法省管轄の保安隊と警察、並びに住民を武装させた「自警団」があつた。ゲリラ地区を陸軍が攻撃してこれを奪回するや、軽迫撃砲や機関銃で武装した保安隊に、その地域の守備に当たらせることとしていたが、この保安隊の兵力が不十分で、陸軍も亦住民保護のために張り付けとなる事が多かつたので、四七年十月、地域守備専門の「国民防衛隊」なるものを作つて、これを陸軍の指揮下に入れ、名実ともに地域国民の防衛に当らせる事とした。当初五百人の大隊を四十個、合計二万人を計画したが、実際には九十七ヶ大隊、約四万人の隊を作り上げ

た。一九四八年一月頃のことである。基幹要員は、陸軍から差し出し、地域内に居住する在郷軍人を主力として編成した。隊員は普段は自宅にあって家業に従事し、定期的に集合しては訓練を行い、又時として補給路や重要施設の防衛・警戒に当たられた。なお国民防衛隊には、機関銃を沢山与えた。

国民防衛隊の編成が進むにつれて、保安隊はその兵力を三万二千から二万五千に削減し、本来の治安維持任務に復帰させた。保安隊は、担当地域を警備し、巡察隊を派遣して陸軍に協力、又担当地域住民に密着して、あらゆる変化を発見し、兆候を掴むのに役立った。

なお従来から、即ち一九四四年末の反乱当時から、政府は住民を武装させて、自分達自身で警備を行わせていたが、一部右翼系住民による行き過ぎた暴力事件が多発した為、一時これを取り止め、その後又再び小銃等を与えて「自警団」を組織させていた。これは一九四八年以降存続し、それなりの活躍をしていた。ただし、彼らの保有する銃はゲリラの入手し易い補給源として、狙われ続けていたが、陸軍は、先に述べたように一九四七年の攻撃に失敗した後は、政治的要求もあって住民保護の為に分散配置していた。が、国民防衛隊の編成が進むにつれて、張り付けの任務から逐次に解放されて、行動の自由を回復し、再び攻撃を取

ることができるようになった。

なお、一九四七年十月、トルーマン・ドクトリンに対抗する形で、スターリンらはコミンフォルムを結成し、その本部をユーゴの首都ベオグラードに置いた。本格的な東西冷戦の開始である。一九四八年二月には、かつて寄稿したようにチエコスロバキヤの不法不当な「共産平和革命」が強行された。ソ連の東欧共産化の強化・拡大を恐れた米英両国は、更に軍事力、経済力をギリシヤの地にも注ぐこととした。

(ウ) 一九四八年のゲリラ戦・対ゲリラ戦

ギリシヤ政府軍は、主として米国からの物心両面にわたる支援を受けて、一九四八年四月からゲリラに対して本格的な攻勢を開始した。今回も前年同様、南から北に向って攻勢を取り、各地で共産ゲリラを捕捉撃滅したのちに、北部国境を封鎖する構想であり、事実多数のゲリラ地域を解放し得たものの、今回も前回同様ゲリラの多くは包囲網を潜って逃走していった。

九月二十九日からは、ゲリラの二大拠点の一つグラモ山地域での戦闘が始まり、ここで一万五千のゲリラと五万の政府軍とが、じ後二ヶ月半に亘って厳しい攻防戦を繰りかえした。

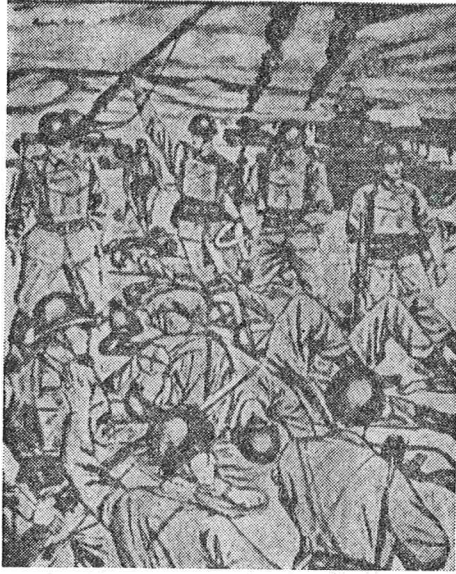
※以下P・73下段末尾に続く。

北方領土不法侵攻ソ連軍の撃砕（十）

奥田 鑛一郎

（作家）

——ソ連軍全滅直前の奉勅——



池田戦車隊奮戦図—岩野正徳・作

八月十八日午後から、幌筵島の守備に任じていた第七四旅団の主力及び師団直轄の戦闘部隊は、折から断続浮游する霧の中を蕭々として占守島への移動を開始した。師団長もまた幌筵海峡を渡って千歳台上の戦闘司令所に進出し、第七三、第七四の二コ旅団並列による総攻撃態勢はほぼ整った。

師団長以下全兵団将兵の胸には、ひとしく不法侵略を行ったソ連軍への激しい怒りと、怨敵撃滅の炎のような闘志が燃えたぎっていたものと想像される。

弦は満月のように引きしぼられ、必殺の矢はまさにソ連軍の心臓部に向って放たれんとしているのだ。一方、北海道札幌に在る第五方面軍司令官樋口季一郎中将は、第九一師団長から刻々もたらされる戦況報告に耳を傾けながら、

緊張と苦悩の中にも、自衛戦闘の大義名分を信じて不安動揺の色を全く見せなかった。総てを信頼する堤師団長の判断にまかせるとの態度で一貫しているのである。

樋口中将は陸士二十一期生の逸材で、同期生の俊英石原莞爾將軍とならび称せられる稀代の名将であり、また日本陸軍切つてのソ連通であると同時に、かつてハルピン特務機関長時代に、ナチスドイツに追われてシベリア経由で逃がれてきた二万余のユダヤ人難民を独断で保護收容して、それぞれに安住の地を与え、今もつてユダヤ人の父として景仰されている人間愛と信念に満ちた偉大な人物であった。その名将のもと、北方軍の備えは厳然として揺がなかったが、それに反し、北千島兵団が全力を挙げて総反撃を行おうとしている動きを察した極東ソ連軍司令部は、進攻軍全滅の危機を前に、憂悶と動揺のさ中であつた。

これは筆者の推測であるが、総司令部は最高指揮官スターリン元帥に訴えて、マツクァーサー連合軍司令部から日本軍最高統帥部に対し、即時停戦と武装解除に関して強い圧力をかけるよう要請したものと思われる。

その結果、梅津參謀総長は聖慮を体して、第五方面軍司令官に対し、「即時停戦を行い、ソ連軍との和議交渉を開始せよ」との奉勅命令を發し、これを受けた方面軍司令官も直ちに第九一師団長に「本夜半をもつて総ての戦闘行動

を終結すべし」との方面軍命令を下達した。この命令を受領した堤師団長は振り上げた刀を下ろすことも出来ず、涙を呑んで全兵団に戦闘停止の命令を下し、約二昼夜にわたる北辺の壮絶なドラマに終止符を打ったのである。

この事件が如何なる意義を持ち、どのような教訓を現代日本に与えるかは、読者の賢慮にお委せするが、すでに戦争が実質的に終結した時期において不可避的に行われた自衛戦闘と、憲法第九条によって明確に戦争を放棄した現在の日本が、国家の独立と国民の安寧を守るために発動されるべき自衛権との間に、きわめて重要な脈絡があることだけは、深く心に銘じて頂きたいと思うものである。

(終り)

※P・71下段末尾より続く。

グラモ山は標高二五二〇米の高山で、山頂の北側はアルバニヤ領である。やがてゲリラはアルバニヤに逃れたが、その後間もなくユーゴ領からビトシ山(二二二八米)地域に現れて、強固な拠点を作り始めたのであった。

(つづく)



郷土の城 (18)

国宝 彦根城

佐々木 信四郎

(城郭学者)

一、琵琶湖畔に聳え、近江を制する

東海道本線（在来線）の車窓より琵琶湖が映る中に、近江の名城彦根の国宝天守は金の飾りも鮮やかに、郷土の誇りに輝やいている。

古より、奈良や京洛が政治・経済・文化の中心となり、北よりこの地への流通経路は琵琶湖の水利が基となって栄え、また近江の肥沃な平野は農耕文化の発達をもたらした。

かくて、近江を制するものは都を制し、そして国を制するとまでいわれ、都を控えた重要な地であった。

彦根城は関ヶ原の合戦後の激動期ここに創建され、三百八十年後の現在まで歴史の証言者であり、その語りべとして湖畔に聳えている。

二、彦根築城までの時代背景

慶長三年（一五九八）に稀代の英傑秀吉が没すると、嗣子秀頼は未だ幼く、新たな政権への確執は次第に顕れ始め、正室北政所と側室淀殿とをとりまく秀吉子飼いの武将の間にも軋轢が表面化してきた。

遂に天下を二分して関ヶ原の戦（慶長五年、一六〇〇）が起った。

東軍徳川方は石田三成を総帥とする西軍に圧勝し、実質的な天下の権力は家康の掌中に帰した。

なお、石田三成は主謀者ではあるが、名目上の西軍の総大将は毛利輝元であった。

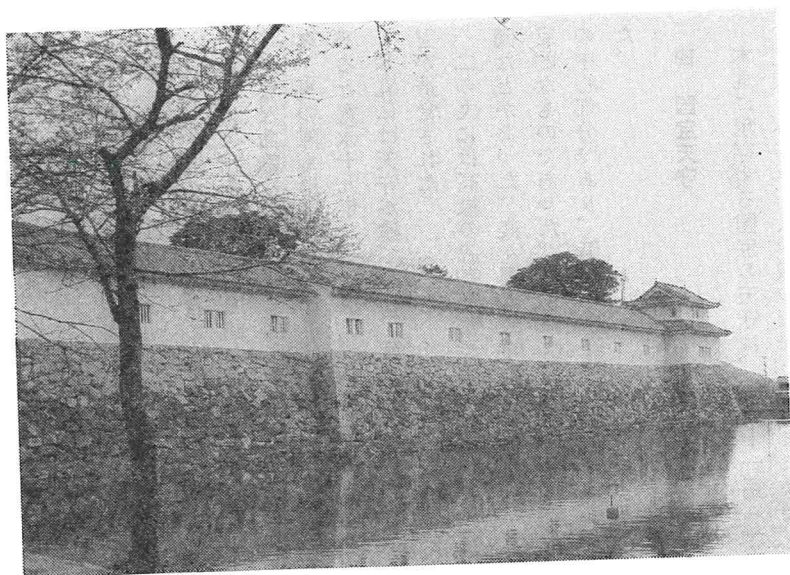
実権を握った家康ではあったが、未だ大坂城には豊臣秀頼がおり、その城は金城湯池の堅塁で、またいつ豊臣恩顧の大名たちが蜂起するとも限らず、秀頼包囲と西国有力大名への戦略布陣の一環として、家康は各地に城を築くことにした。

その一つが彦根城である。



天守（国宝）

外観は飾金具などを打ち、きらびやかであるが、内部は時代を反映して武装本意にできている。



佐和山口多聞櫓

前面を防衛する櫓で、平時は武器、兵糧を蓄え、有事の際は兵が籠り、鉄砲も濡れない。

家康の最も信任厚い武将の中で、徳川四天王のひとりといわれた高崎城主井伊直政に十八万石を与えて、慶長六年石田三成の本拠佐和山城に入れた。

佐和山城（彦根市）は山城であつて、この時代には鉄砲が主要装備となり、その足軽集団の戦術運用にはこの城では不向きで、また琵琶湖よりやや離れていることもあり、直政は彦根山に改めて城を築くことにした。

この地は東に佐和山、西に湖を控え、湖北・湖東の境に位置し、湖東を制する処にあつて、京にも近く、徳川家にとって西国を抑える重要拠点であつた。

慶長七年直政没し、翌八年その子直勝が彦根築城の許しを家康より受け、そして家康の全面的なバックアップで着工した。

三、名城の出現

この城は井伊家の居城となるものではあつたが、家康にとって豊臣秀頼への前衛拠点であるから、近江近隣の七ヶ国十二の諸大名に工事を手伝わさせている。

当時の井伊家の石高は十八万石（後に三十五万石）であるが、城の縄張り（設計・測量）は複雑にして壮大なものであつた。

まず、標高一三六呎の彦根山の丘陵をとりいれてその中

核とし、土塁と石垣で囲み、周囲に水濠をめぐらして、山頂に本丸、東南に鐘の丸、西に西の丸、さらにその丘陵の尖端に山崎曲輪を配した。

これを更に二重目の濠で囲んで、その中を二の丸とした。

そして、その外に三重目の濠をめぐらして第三郭とし、その南に芹川を画して第四郭を形成させている。

主要な曲輪は大坂異変に間に合ったが、城の完成は大坂冬・夏の陣も過ぎた元和八年（一六二二）で、城下町を含めると寛永十九年（一六四二）の約四十年間も費した。

本丸には天守が建てられ、鐘の丸の北方平地に表御殿などが造営された。

二の丸には高祿の武家屋敷と槻御殿けつきのある楽々園と玄宮園などがあつた。楽々園は公的な藩主の庭園で、玄宮園は私的なものであつた。第三郭は武家屋敷と町屋で、城下町の中心部分であり、第四郭は軽輩の住居や町人町であつた。

四、国宝天守

本丸に現存する国宝の天守は、慶長十一年（一六〇六）の完成とみられ、大津城の天守をそのまま移築したと伝えられてきたが、昭和三十五年の解体修理の際の調査で、転

用材を使っているが、形は別の姿であったと思われる。内部は石垣内に階段室があり、その扉は鉄板張り、鉄鋸止めの厳重な構造である。

通し柱は用いず、各階毎の積上げの形式であって、武装本意にできている。

外観は三層で、上層には高欄を設け、各層には唐破風や切妻破風などの装飾的な破風を備え、華灯窓(禪宗の様式)をつけ、飾金具を打つなど、古式にしてきらびやかな姿となっている。

また初層と天守石垣の接合部に雨水の浸入を防ぐ庇ひましを設けるなど、天守建築の初期の形式をとどめている。

五、彦根城豊臣秀頼を呪む

こうして慶長十一年頃には天守を始めとする主要な部分は完成して、大坂方への睨みをきかせることになった。

これに前後して天下普請(幕命による普請助役)による名古屋城・丹波篠山城、また藤堂高虎の伊賀上野城、池田輝政の姫路城などの完成によって、家康の秀頼包囲の戦略的な築城は次第に完成されていった。

六、直弼なおすけで再び動乱に

かくて豊臣家も滅び、幕藩体制も安定して、二百余年の

間平穏に過ぎたが、幕末の動乱期に井伊直弼は幕閣の元老として登場した。

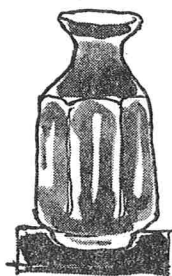
万延元年(一八六〇)江戸城桜田門外にて直弼は反体制派の分子によって襲われ横死した。

彦根城といえは大坂異変よりも、この幕末の直弼を思い起すひの方が多いことであろう。

七、現在の彦根城

現在城趾は国指定特別史跡となつて一般に開放され、国宝の天守を始め、太鼓門・天秤櫓・佐和山口多聞櫓・西の丸三層櫓・馬屋が国の重要文化財の指定をうけ、松籟の音の中に往時の姿をよくとどめている。

テレビドラマ「花の生涯」の背景には勿論のこと、時代劇のロケには姫路城や京都大徳寺などともに絶好の舞台として使われ、春、花の下には家族づれなどの歓びの声聞きこえ、平和の中に城は無言の伝言者となっている。



自衛隊だより

海のロマンに生きる

海士長 小松 克明

(碎氷艦しらせ機関科)

海上自衛隊に入隊して七年、ずっと艦船勤務で、陸上での勤務経験はありません。ですからもし、私が船を降りたら陸に上がったカッパ同様、右も左もわからなくなるでしょう。

なぜなら、海には海のルールが、陸には陸のルールがあるからだと思えます。最近、私は艦の修理などで陸にいることがありますが、いろいろこまごましましたことがわずらわしくなり「早く出港しないかなあ」と思うことがたびたびあります。

「あなたは陸の生活と、海の生活のどちらが好きですか」と質問されたら「絶対に海です」と答えます。

私は子供のころからずっと海辺で育ち、大小さまざまな船を見て、自分も乗ってみ

たいと思っていました。そして現在「しらせ」に乗っています。

今まで、日本の各地の港や、外国の港、それに南極にも行きました。南極で厚い氷を割り、冰山の間を通り抜け、白銀の世界へ着いたとき、本当に感激しました。まだ地球にも、こういう自然が残っているんだと思う反面細々とした環境で生活している自分が小さく感じられました。こんな貴重な体験が、私の心を海へ引きつけ、私の海へのロマンをどんどん大きくしていくのではないのでしょうか。(福島県出身)

大学生活より快適

一空士 吉田 将博

(青屋・空自三術校)

大学に合格していたのにもかかわらず「自衛隊に行く」といった私に両親は、「絶対に後悔するから」と強く言ったが、入隊一年以上が過ぎたいま、まったく後悔なんかしていない。

それは、「普通の大学生として、平々凡々とした日を送るよりも、社会人として、自分自身に挑戦してみたい」と思った私に

とって、自衛隊は格好の場所であったからである。

教育隊での規則正しい生活、基本教練、戦闘訓練と、どれをみても厳しいものだったが、今にして思えば楽しい思い出ばかりだ。最近では仕事もかなり覚え、やりがいのある毎日を過ごしている。

今後は人間的な面や教養的な面でも社会人として、自分自身に磨きをかけるため、夜間大学に通ってみたい。だが、まず当面の目標としては、一般曹候補生に合格して、一日も早く空曹になればならないと努力している。

(福岡県出身・県立中間高校卒)

祖国から遠く離れて 自然と生じた愛国心

タイ王国海軍中尉

セーリー・ピアザイ

(留学生・かとり乗艦)

二年ぶりに母国に帰りました。帰国するのはいつも飛行機で空からですが、今回船でチャオプラヤ川(メナム川)をさかのぼって、ゆっくり両側の風景をながめること

ができました。六年前の河口付近は林ばかりでしたが、今は工場や家などがあちらこちらに建っていました。川をさかのぼってゆくと、右側にタイ海軍士官学校が見え、六年前の士官候補生一年生の頃を懐かしく思い出しました。

バンコク港に入港した七月十三日夜は海軍士官学校で開かれたレセプションに参加しました。私が教えを受けた先生はほとんど転勤または退役されていきました。現在の学校長・サンラン海軍少将は五年前に日本駐在武官だった方で、よくお世話になりました。レセプションの後バンコクにある親類の家で泊まりました。両親とも会って遅くまで話し込みました。

翌十四日は、実習幹部の友達がアユタヤ地方、パンプライン離宮、日本人町跡、王宮跡などの研修に行っている間に、私はバンコク市内をみて回りました。二年ちよつとなのに、随分変わってしまったてびつくりしました。物価も上がったと感じました。昔は、物を買うときに、売り手も買い手もお互い話し合いで値段を決め、それが一つの楽しみでしたが、最近はそのような

間関係もなくなり、少少さびしく感じました。

夜には、「かとり」で行われた艦上レセプションに両親を連れていきました。二人とも田舎者ですから、初めてレセプションに参加し、艦長、副長や艦の皆さんから親身に声をかけていただき、とても感激しておりました。「日本人は優しく親切ですね」と両親は言っていました。

国に帰って、防大時代のガイドンス「愛国心」というテーマを思い出しました。「愛国心」とは口で言っていて教えるものではないと思います。私の場合の「愛国心」は、祖国から離れて違う国に住み、違う習慣などに触れて、自然と意識しました。遠洋航海が終わって日本に帰ったとき、シーマンシップ、海のロマンなどを味わった実習幹部の友達の心にも、もう一つの「愛国心」がきつと生じることでしよう。

《海自遠航部隊で二年ぶりに帰国して》

(以上3編・朝雲)

春

海軍技術少佐(造船)

福井 静夫

21横浜市神奈川区菅田町一一〇一
電話〇四五(四七三)五二七八

頌

松嶋 七平

370-03
群馬県新田郡新田町大字大二丁目

自衛隊今は昔の物語

牧野良祥(防衛庁航空幕僚監部・二佐)

文句あるかッ

米軍の技術学校に入校中の外出は、土、日に限られていた。

朝から晩まで「横文字」と配線図にかこまれていると、やはり外の空気が吸いたくなくなる。

当時は、ベレスブレード楽団の「マンボNo.5」が大ヒットし、巷にはマンボの曲が流れマンボズボんといって、ズボンの裾を極端に細くした、まるで股引のようなフアツションが、若者の間で大流行していた。

ジョンソン基地(入間)から、電車で一時間ちよつとの東京へは、何度か外出したが、田舎者の本官にはこの大都会はなじめず、もっぱら基地周辺の町に出掛けていた。

外出は、その当時必ず制服で出たもので、私服で外出するには、冠婚葬祭などで必要ある場合しか許可にならなかつたから、彼女とデートをするのも、酒を飲むのも制服姿だったので、それを本官らは別段不便とも思わなかつたのである。

また、現在のように多種多様なレジャーの時代と違って、その頃の隊員は外出しても、映画を観て、食堂で食事をとり、あとは飲み屋で一杯ひっかけた程度で帰るぐらいしかなかつたのだが、それでも結構満足して

帰隊したものである。
米軍の通訳ドノとやり合ってから、何日かたつたある土曜日の午後、本官は一人で近くの日市に出掛けた。丁度、秋祭りが行われていて、町ははなやかな雰囲気につつまれていた。行きかう人々も、浮々としている。



A. Kas

祭りの賑わいを楽しんだあと、本官は静かな川沿いの道を、ブラブラ歩いてみることにした。道端のやや広くなっているところに来たとき、五、六人の若い衆が、道路いっぱいに広がって、キャッチボールをやっていた。どの顔も、祭りの祝い酒で赤い。本官は邪魔にならないようにと、道路の端に寄って通り抜けようとした。すると連中は、制服姿の本官をとり囲むようにして、ボールを投げ始めたではないか。本官は行きもならず、戻りもならず、まるでベース間にはさまれたランナーのようになってしまった。

「なんばするとかッ」
さすがに、本官はムツとした。

思わず本官が、九州弁丸出しの大声をあげると、ボールを手にしたチンマイのが、本官の前に立ちふさがり、ノックの本官を見上げるようになって、えらそうにこうぬかしおったのである。「文句あるかッ」

(航空自衛隊連合幹部会機関誌「翼」編集者)

「中隊長の回顧」から

森松俊夫

(軍事史研究家)

小田原を訪ねて

去る九月初め、竹田偕行会長に随行し、小田原の故閑院純仁(もと閑院宮春仁王)の御邸を訪ねた。

小田原城の北、緑滴たる城山の頂上近くに建つ閑静なお住いの跡であった。

昔は、閑院宮載仁親王の別邸で、親王は晩年の四年間をここで過され、ここで没し、国葬の最初の儀式も行なわれたという。当時は、この城山全部を含む広大な土地で松原や藪、田畑もあったが、戦後に逐次手離され、今は建替えられた閑院家を取り囲むように、競輪場や短期大学その他の施設、住宅が建っていた。

まず閑院宮祖先霊社にお詣りをしたのち、今は主なき御邸の各部屋を拜見した。膨大な書籍類が各部屋の書棚に整然と並べられてある。大宮様(竹田会長は元帥さん

と言われた)の貴重な置き物、額、軸、写真なども見せていただいた。

書籍類には、私どもでは揃えにくい全集物が沢山あり、また閑院様が戦後に総裁、会長、顧問などされたヨガ、詩吟、剣舞、居合道、合気道、社会教化運動等の書類も多かった。

これらのなかから、偕行社に頂戴する軍事関係の図書・史料二百数十点と三十数葉の写真を選出し、手早く配送の作業を行った。新たに見る貴重な史料も少なくなかった。

閑院宮若宮様

閑院宮春仁王は、陸軍士官学校第36期生で近衛騎兵連隊出身。陸軍大学校卒業後、永らく騎兵学校、陸軍大学校に勤務され、満州の戦車第五連隊長、千葉方面の戦車第四師団長で終戦を迎えられた。

眉目秀麗、容姿端正な御写真は拝したが、私はお目にかかったことはない。

「若宮様は、常に背筋を伸ばしておられ、着席されると長時間微動だにされない」とか「明鏡止水の御心境で判断されるので、まことに純粹率直であり、理論的考察を好まれたが、単刀直入の発言も少なくなかった」「正義感が強く、情熱家で、批判を恐れぬ勇氣をお持ちであった」などのお話は、先輩からしばしば承わっている。

閑院様になられてから、実業界を遍歴されたが、春日倉庫株式会社が成功したと聞く。晩年は「元皇族」を自覚し自尊し、そして社会奉仕を使命として各種団体に関与された。それとともに元皇族としては初めて自叙伝を出版し、続いて研究・随想等を含めた図書を刊行された。

「私の自叙伝」(昭・41・6)「日本史上

の秘録（昭・42・9）「激流」―戦争から平和へ・21世紀への道―（昭・45・10）で、いずれも大冊である。

これらは、そのときどきに作成、収集された諸記録を基にして書かれたもので、几帳面に整理された諸綴だけでも膨大なものである。たとえば陸軍大学校教官時代の義録の全部とか、戦車第五連隊長時代の日誌、公文書類の綴りが幾冊もあった。折々の隨筆も多い。

中隊長の回顧

春仁王は、陸軍大学校卒業後の昭和七年十二月から九年八月まで、習志野の騎兵第十六連隊中隊長を勤められた。転勤にあたり「春日 登」の名で「中隊長の回顧」というタイプ印刷の冊子を作成し、連隊長の関に供し、また親しい僚友に提供された。

本書の序文で「及ばずながら心血を注いだ予が、中隊の統率の記録をまとめ、一は自分の記念とし、一は他日中隊長となる少壮諸君の参考に供する」とされている。

その内容は「緒言」「中隊統率の基調と輪廓」「精神教育講話内容の梗概」「練成の実際」「隨筆集」の五章から成っている。

本書の主体は第四章までであるが、「隨筆」には、なかなか面白いことが書かれている。

隨筆中の「将校団」については、現下将校団の実体と本来在るべき姿を述べ、「青年将校の訓育」では、目前の勤務に練達させるよりも、将来の大成に資する人材教育を眼目とすべきだと強調されている。

「軍隊内務」は、その実情を把握することが困難であったのであろう。内務の内容の検討と解剖の理論に終始されている。他聞するところによると、隊長は極めて厳正な信賞必罰主義なので、部下の方も、だんだん本当のことを報告しなくなったという。固いお話はやめ、具体的事例を挙げた部分を紹介しよう。

ソ国将校の隊付

予が当隊に着任したとき、ソ国将校（少佐級）が隊付をしており、約九ヶ月間日々接していた。一から十まで対ソ戦法の昨今、ソ国将校に隊付されては厄介なことがある。

しかし、わが連隊長が非常に虚心坦懐、大胆な態度を執っておられたことは、全く

敬服するところである。というのは目下の軍隊に一年間も隊付され、それで対ソ戦法をかくそうとしてもそれは駄目だ。そこで

「日本の周囲で一番強い国は貴国だ。故に日本としては貴国に勝つことのできる程度に教練しておけば、どこの国に対しても大丈夫であるから、貴国を教練の対象とするのだ」

というのが連隊長の彼に対する説明だ。彼もまた

「ソ国においても然り」

と答えたのだから面白い。したがって彼は、少しも陰険なところがなく、遠慮すべきところは快く進んで遠慮し、平素は日本の風俗習慣、言語にもよく同化し、個人的には全く将校団の一員という感じをわれわれに持たせていた。その反面、かえって油断してはならぬことは言うまでもない。ある方面から聞くと、彼も相当に本國にたいして、いろいろな資料を報告しているらしい。

彼の戦術上の見識等は甚だ怪しいものであったが、教練のことには詳しく、われわれの教練にたいしても、ときどき上手な皮

肉を浴せたものだ。

予は、ある雑誌で次の記事を見た。その出所は不明であるが、彼がよく言っていたことと概ね同一であることからみると、彼が提供したのではないかと思われる。

ソ軍人の日本騎兵観

一、日本の軍隊は、一般に装備劣等にして騎兵はとくに然り。近く改善せらるる模様であるが、それでもなお列強の程度には達しないであろう。

二、日本軍隊の兵は素質優良、軍紀厳正であるが、射撃、馬術等の技術は未熟である。

三、日本騎兵将校は、卓越した人物が多いが、制度上騎兵的性格の修練は必ずしも十分でないであろう。したがって騎兵指揮は、恰も乗馬歩兵を指揮するようなものである。

また「憲兵と軍隊」の項では次のように述べられている。

憲兵と軍隊とは仇同志であった時代があったらしい。否、今でも時代遅れの人は、そんな頭でいるかも知れない。憲兵を対軍

隊軍事司法警察機関とのみ考えるから、そんな思想が生れるのだ。

予は、憲兵は軍隊の援助者であると考えるが故に、着任当初から当地憲兵分隊長には接近を求め、先方も予の意を体し、しばしば会談する機会をもった。

憲兵の使命は軍の擁護にある。地方の情勢を軍隊幹部に通報し、軍隊教育や行事上の参考に供する。もし軍隊と地方との間に損害賠償なり刑事問題なり、その他感情上の問題などが起こった場合には、中に立つて斡旋する。また軍隊、軍人に非違があれば、好意的に注意を寄せるか、事柄の性質によっては、断乎職権行使の挙に出るのはもちろんである。

しかし、それらも決して非を摘発する意ではなく、軍の威信擁護のためである。憲兵は、あくまで隊外における隊長の補佐者として、隊長の統率を補佐すべきである。当地憲兵分隊長は、この点に関して極めて正当な見解を持っていた。

だから軍隊側としては、憲兵を有利、正当に駆使せねばならぬ。もし不祥事が起こった場合、憲兵を顧問なり補助者として、

一致協力、捜査を行なわねばならぬ。軍隊の長は、何といつてもこの方面にかけては素人であるから、専門家たる憲兵を使用するのが賢明、正当な方法である。

往々、憲兵を敵視して軍隊から敬遠しようとする傾向がないでもなかったのは、国軍の組成上に一逆流を造ろうとするものであり、甚だ寒心に堪えない。

「むづかしい人間の評価」の要点は次のとおりである。

人間の評価ほど難しいものはない。公の評価の場合、その人の運命を握っていることを考えれば、一行の文を書き一口の発言するにも大きな勇気がいる。人の評価などしない方がいいが、公務に携わる者としてこれを避けることはできない。

その衝に立つ人は、人の評価をする必然の権利と義務を持っているのだ。

人を見るだけの見識と教養、それを表現する筆舌の才能について、熟々考えさせられる。

地方だより

島根県支部だより

松江市城北郷友会

松江市城北郷友会においては、去る十月二日午後二時から護国神社において、地区内戦没者の慰霊祭を執行した。当日は初秋の稀れに見る晴天であり、特に本年は松江護国神社御鎮座五十年に当り、先に一億數千万円をかけて参集殿、社務所など新築し、神域も整備されたので、遺族の参列も例年になく多かつた。祭典終了後は花柳流の日本舞踊を上演して遺族の方々をお慰め申し上げ、英霊には各家庭まで会員が持参してお供へをした。戦后既に四十三年、未だに近隣諸国の鼻息を伺つてやるのが果して正しい行きかたでしょうか。政府においてももう少しお考えを願いたいと思ひます。三百万の若者が、何んと云つて家を捨て、家内、妻子を顧みず尽したあの行動に對し、政府ももう少し毅然たる態度を取つ

て戴ないと、何時までも全く属国の様な態度である政府当局の覚醒を促さずにはいられません。
(高尾記)

富山県支部だより

天皇陛下御平癒祈願祭

富山県支部は十月八日午後二時より、富山県護国神社に於いて、天皇陛下の御容態が日々に重らせ給う現状を会員一同誠に深憂に堪えず、郷友会以外の友好団体にも参加を呼びかけて、厳肅に天皇陛下御平癒祈願祭を齊行した。

午後二時古田県支部会長以下友好団体代表も含めて八十余名の参列者が、富山県護国神社拜殿に集合整列し、瀬川副会長兼理事長より開式の挨拶があり、神社宮司梅野守雄殿以下祭員の奉仕を以て、富山県出身殉国の御英霊二万八千六百七十三柱の大神達の大前に祭儀を執行し、修祓の儀、献饌の儀が参列者一同の最敬礼裡に執り行われ、梅野宮司より、天皇陛下御平癒祈願の祝詞が厳かに奏上せられ、続いて富山県郷友連盟を代表して赤誠をこめて祈願文が古田会長より奏上され、其の間一同起立国旗

に敬礼、宮城を遥拝、黙禱を捧げ、次に玉串奉奠に入り、梅野宮司奉奠されたるに続き県郷友連盟会長古田勝晴玉串を奉奠し、次に来賓として招待申し上げた陸上自衛隊第三二一地区施設隊長兼富山駐屯地司令二等陸佐佐々孝雄殿、富山県海交会長長井恵二殿、富山借行会長長金森義雄殿、富山県軍恩連盟会長稲場重雄殿、富山警察署福島敏生殿、富山県護国記念館理事長奥野策治殿の玉串奉奠があり、続いて県郷友連盟副会長、理事長、副理事長、監事、事務局長、常任理事、青少年部長、婦人部長及び各郡市町村郷友会長が順次英霊の大前に玉串を奉奠し、終了の後撤饌の儀が行われ、参列者一同起立莊嚴なる奏樂の下に国歌を斉唱し、再び宮城を遥拝し天皇陛下御平癒祈願の黙禱を捧げる。梅野宮司殿より滞りなく祭儀を終了し只管に天皇陛下の御平癒を祈願し奉り赤誠をこめて奉仕の旨挨拶があつた。

続いて曾つて天皇陛下の股肱として累次の戦役、事変に従軍し、会員一同終生感銘し片時も忘れ得ぬ帝国陸海軍の解散に當り、陸海軍人に賜りたる昭和二十年八月二

十五日の御勅諭を奉続し日本郷友連盟会員としての戦後祖国復興の使命の重大なることを更めて銘記した。

次に会長古田勝晴氏より式辞が述べられ、旧軍人として郷友会を通じ戦前に変らぬ至誠御奉公の誠を尽くし、天皇陛下の御平癒を祈願し、国家を泰山の安きに護持し、天壤無窮の皇猷を守り、天皇陛下の大御心を安んじ奉るようお互いに誓い合ひましょう。との要旨を述べ参列者一同其の精神の振興を誓い合った。

瀬川理事長より閉式の挨拶が述べられ、終つて神社より御神酒を撤下され、一同拝領し、別に会場を富山県護国記念館二階大會議室に設けて移動集合し、天皇陛下の御聖徳を讃え奉り、御平癒の一日も早からんことを祈願をこめて懇談会を開催し、古田会長の挨拶、瀬川副会長兼理事長の昭和八年陸軍特別大演習に参加し、御統監遊ばされた大元帥陛下が、歩兵第三十五聯隊長苦米地大佐に親しく御下問遊ばされ、演習に参加の現地における兵の健康状態まで御診念遊ばされた御仁徳に感泣したる追憶談、亦海交會福森副会長の舞鶴鎮守府管下の殉

国の英靈に対し其の忠烈を顕彰するため、本年忠霊塔の建設の議が起り、目下奉賛運動推進中にて、广大無辺なる天皇陛下の御聖徳に依えて身命を鴻毛の軽きに措き、福森氏が、舞鶴鎮守府第二特別陸戦隊が編成され、壮烈なるソロモン海戦に参加し、ウエキ島を此の陸戦隊が肉迫攻撃し、恰も日露戦役に於ける旅順攻囲戦の肉弾戦を彷彿せしむるものあり、天皇陛下万歳を唱えて殉国の英靈となられた戦友の姿を思い起し、是偏えに天皇陛下の御後威、御聖徳の然らしむる所であり、朝な夕なに神靈に天皇陛下の御平癒を祈願申上げていることを発表し、富山県偕行會會長金森義雄氏が朝日奈高僧の「聖沢無辺」という著書に記されたる天皇陛下の御聖徳を讃え奉つた詩「天皇命を抛つて万民を救ひ給う、壮烈なる崇行鬼神を泣かしむ、一億の同孤奮起せよ、此の御恩を報いまつらざんば是人に非ず」と肅々として朗詠され、之を聞いて瀬川理事長は此の詩は終戦の時天皇陛下御自ら連合軍司令官である敵将マッカーサーに会見を求められ御訪問遊ばされ、皇室財産の目録を先づ提示し給ひ占領軍に於いて自由処分を御

発言遊ばされたる後、古来敗戦国の国王が戦勝国の敵將に命乞いをしたのに反し、御親ら敵將に天皇陛下御自身の身命を抛つて陛下の赤子一億二千万の民草を救わせ給ひし万国に無類の尊い御聖徳を讃え奉つた詩であり、我が皇室の斯る尊い广大無辺なる大御心、御仁徳を我々は子々孫々に至るまで永く語り伝えて滅私御奉公の誠を尽くし、永遠に天壤無窮の皇猷を扶翼し奉り、御聖恩に依え奉らんと語り、後昭和二十年八月二十五日帝國陸海軍の解散に当り畏くも陸海軍人に賜りたる勅諭の御聖旨を一同再認識し、各人交々に戦後の復興に力を尽くし、如何に動くか世界各国の動向を深く注視し、国内革命勢力の攪乱に依る混迷を排除しつつ、国際情勢の推移に正しく対応し、国防の整備教育の刷新、間接侵略の抑止、民防の促進、自主憲法制定に至るまで不撓不屈の運動を展開して行くことを誓い合ひ懇談を重ね、話しは中々尽き果てぬ状況であったことは誠に有意義であった。総じて当日の懇談の要旨は日本民族の魂を回復せよ、国家生命、民族生命の若返りを図れに在ったと思う。

古来わが国では危急存亡の重大局面に際会するごとに、皇室が偉大なる歴史的役割を果されている。古くは大化の改新然り、百余年前の明治維新然り、大東亜戦争終戦時においてまた然りであった。

皇室が在しますお蔭で国家生命があり、民族生命がある。片時も日本民族は皇室の御聖恩を忘れてはならぬ。

日本民族に皇室を中心とする確平たる信念と天皇扶翼の滅私奉公の尽力がある限り無窮に国運は進展する。国際情勢に如何なる動揺や混乱があるうとも世界の中核として、世界平和を築き上げて行く使命を果さなければならぬ。此の使命觀を呼び起した今日の祭儀であったと喜び銘記し、宮城を遙拝し、天皇陛下の御平癒を只管に赤誠をこめて祈願申し上げ名残りを惜しんで午后五時散会した。

(六三・一〇、二二稿・瀬川記)

熊本県支部だより

矢部町郷友会では、去る二月二十二日第二次理事會を開き、審議終了后次の通り研修會を行った。

テーマ 地域振興の実際と問題点
講師 熊本県地域開発課長
田口信夫先生

要領 司會者 佐野會長

佐藤郷友會長開會挨拶及び地元吉田町長來賓挨拶に引き続き同講師による基調講演が一時三十分亘り、豊かな行政マンとしての経験と、高邁なる見識を、もつて、今日の地域づくりと、細川知事の日本一づくりに就て、多面的に解析しながら、その正しい認識を得る為に、判り易く、時には笑を誘い、熱のこもった講演は、聴衆を魅了した。つづいて

司會より次のパネリストを紹介された。

(1)、西方總監部永峯一佐殿(2)、矢部町議長歌野正則殿(3)、同企画課長甲斐殿(4)、浜町郵便局長富島礼三郎殿(5)、佐藤明雄會長

各パネリストの所見が述べられ、全員の討論及び、意見交換がなされ意義深い研修會を終った。

最後に佐野會長提唱により。

矢部町「何か一番」運動を展開しようと呼びかけに会場約一〇〇名の人々に力強

いインパクトを与えた。十年二十年後の郷土の為に我々會員は、何かを通じその起爆力となりえたら郷友會員として、幸いである。と結ばれた。

紙数の許す範囲で講演要旨を綴ります。

(一)、はじめに昭和五七年「明日へのシナリオ」で細川知事が示した新しい時代の流れに對して、県町村は今日その施策を通じ、いかに現実化し、或は今後の課題として意欲的に取り組んでいるか具体例をあげ、(一)情報化、(二)成熟化(高齢化)、(三)国際化、の三視点より論及して、

(二)、地域間競争の時代の認識と対応のあり方へと論を進めた。

産業構造の改革Ⅱ第一次産業から第三次産業への就業人口の移動、米国双子の赤字(貿易収支、財政収支)に基因する国際貿易の変化に伴う産業の空洞化或は農産物の自由化と対策とその高品質化、高技術化大規模農産物研究所の建設に依る対策国、県(地方自治体も含んだ)の借金財政に對する地域開発の自律化、知恵の出し方等々夫々の地域がおかれたきびしい環境の中で、その地域が競争に打ち勝ってこそ子孫に美

田を残す事が出来るのであって、その時は金をおいて二度とこないであろうと断言し強く地域住民の「ヤル気」をうながすと共に警鐘を打ち、(三)くまもと日本一づくり運動の正しい認識へと話を展開した。それは豊かな環境、智的興奮の得られる様な田園文化都市の創造であるが勿論美辞麗句の羅列でもないし産品の量産日本一でもない。

地域全体の開発が右理念のもと生きた経済の実で裏打ちされたものでなければ日本一づくりの真のすがたとは言い得ないとパンフレットの写真を説明しながら県下町村が今遂行しつつある事例を紹介し正しい日本一づくり運動の認識につとめられた熱心な姿勢に改めて敬意を表しつつ擲筆します。

(附)

矢部町「何か一番」運動の提唱

○矢部町の活性化の為に「何か一番」運動を展開しよう。

○「何か一番」運動とは

1、何かの目標を定め、その目標に向かって直ちに行動を起すことです。

2、それは、個人・家庭・部落・地区・団体・町・郡・県・国等何れかの領域で

もよいから、それぞれの力に応じて、できることを目指して直ちに実行に移すことです。

3、それは又、生活・産業・経済・教育・文化・体育・趣味・環境整備・社会活動・国民運動等物心両面にわたって、何れの分野であるかは問いません。

4、それは更に、善い事は一番になることを、悪い事は一番から降りることを意味し、徒らに功名心をあふるることなく、目的に向って努力する心を養うことです。

郷友基金

名芳者金釀

(通算第46回目) (受付順) (敬称略)

(愛知県支部扱) (1)

- | | |
|-------------|-------|
| 伊勢屋金網工業株式会社 | 早瀬金太郎 |
| 株式会社小河商店 | 長尾三恵子 |
| 志知 篤 | 湯浅要道 |
| 小島重信 | 伊藤由太郎 |
| 平松茂喜 | 中島鏗一 |
| 宮崎秀弘 | 庄司宗一 |
| 江口茂男 | 吉田由喜雄 |
| 千種郷友会 | 森 基 |
| 豊和工業株式会社 | |
| 十万円 海部俊樹 | |
| 同 水谷ゑ似 | |
| 同 伊藤 孟 | |
| 同 株式会社八幡ねじ | |
| 十五万円 熱田神宮宮庁 | |
| 同 近藤伝六(5) | |





野島 一良選

岩国 村井 一露

芦刈りの夜は青白き月かかく

椿の実女は下着かくし干す

鹿鳴くと妻の旅信の短かかり

石路咲いて小家ばかりが浦曲なす

神留守のみくじの吉を疑はず

松山 岩崎美代子

濃紅葉に本堂の屋根反り深く

朴落葉何か書きたき旅心

石庭の石のまろさや石路の花

み仏に舞ふ一葉の散り紅葉

姫路 野村 敬二

収穫の苦労話や牡丹鍋

今年は天氣が不順で農家の収穫も平年

作なら良いとせねばならない地方が多

かったことであろう。水の苦勞、農業

のやり方等々色々あつたであろう。

しかし、まあまあ、とりいれも済んで

ほつとした。猪鍋を囲んで苦勞話をし

ている。地酒の爛もそこになくはな
らない。この句の巧まない描写が何と
もいえず好ましい。

明治のよき思ひ出話す文化の日

明治生れの共通の話題は、日本の興隆

期の思い出である。その頃の「天長節」

が大正時代に「明治節」となり、戦後

に「文化の日」となった、それらの感

懷を素朴に、素直に詠われている。

漆の鯉柳落葉を弄ぶ

情景はよく判るが、「弄ぶ」は少し技

巧に走っているとも思える。前二句に

蹲つくばのかげから延びて石路の花

東京 依田 牧南

磴を踏む足音たかし十三夜

旧曆十月十三日の月が瞭かに照らして

いる。磴を踏む音は靴であろうか、下

駄なのであるうか、音がたかいのであ

るから女性ではない。何だか偉丈夫を

思う。僧なら弁慶のような僧を思う。

空け放す露台の人や十三夜

空け放す露台、とは面白いですね。

足音のする坂道や十三夜

今年の東京の十三夜は、とても美しい
月でした。「十三夜は何時かね」とお
っしゃった御病床の陛下に、この俳壇
の各位は、一様に懐いを走せられたこ
とでしよう。

日立港にて 日立 内田 定夫

鯨釣りや真向いに見るソ連船

靴捨て子も立ち向う稲車

字余りになつても「靴投げだし」等と

した方が句に力感加わるかも知れま

せん。

葛紅葉むかし榮えしなまこ壁

和歌山 井本 友敏

妻の忌を七度迎へぬ鱒雲

槽糠の夫人の七回忌のおもいを「七度

迎へぬ」と叙して情纏綿。そして「鱒

雲」には作者の『心の動き』が暗示さ

れているように思います。

枯れ初めし音も交へて芦そよぐ

穩し田の畦なき畦の彼岸花

第二句の「枯れ初めし音」は確かな描

写、第三句の「畦なき畦」も愉し。

松山 重田 兵介

参道の辺に石仏石路の花

方丈の襖の龍に冬日射す

句座ひらく方丈冬日ほしいまま

松江 大橋新太郎

竜神も迎へて神有月ひらく

水の神様も出雲へお集いになるのだ。

神迎ふ十九社の落葉掃ききよめ

註一十九社は出雲大社境内にあり、諸

国の神の宿泊所。

武蔵野 鶴間 俊子

洋蘭店出でし小春のさやかなる

菊咲かせ昔堅気のぬけきれず

郵便夫の菊を愛で行く菊日和

横須賀 大関 不撓

歳語り病を語る露の宿

諦めることも覚えし秋の暮

鴟高音老の心を鞭打ちぬ

金沢 高桑 與三

青空に一際映ゆる木守柿

コスモスや八十路ばかりのクラス会

山里の古き館の目貼りせる

松江 青野さみえ

秋の雨友の計報の濡れて着く

逢ひたしと書きて封ずる秋灯下

分け入りて径は二つに草の花

松江 石丸 綾子

石鎚を背るに峽の紅葉かな

知恵つきし孫と燈下を親しめり

点滴の滴の間遠ふや日短き

石川 松枝 外也

小春日や古桶の箍締め直す

木枯に火花散らして轡の火

藍の香の紺屋の甕に秋立てり

神戸 泉 美牙

雨あとの日ざしの綾の実むらさき

ふる里の風の明るさ大豆干す

小さき掌を合はす念仏十夜粥

福島 伊藤喜代子

信号機夜霧の中に点滅す

会釈して行きし人あり秋の昼

夫在りし日を偲びをり菊枕

松江 菊地 茂

老の身を医師に託して九月尽

翳雲久万三山を覆ひけり

接蘭に夢がふくらむ夜長かな

佐世保 青山 宇宙

休耕田コスモス咲いてをりにけり

風鈴に二つの音色ありにけり

佐世保 伊藤 達男

花野にて犬の首輪の鎖解く

晩秋やネクタイ何時か妻好み

顕彰碑古りて蛸鳴くばかり

菊人形の信玄軍扇ひるがえし

氏神の轍高々豊の秋

春日市 林 藤雄

故里の母なる山よ木の実降る

娘が来ると炬燵も出して待つてをり

娘と二人紅葉の神庭かみ滝みちを

薬師寺の枯銀杏にも昼の月

暮色来て風も消え去る十三夜

星月夜ひしめく星の音もなし

夕霧の天守にかかる二日月

紅葉散り流れ激しき鳴子峡

木洩日に香り仄かな濃龍膽

住む人の変りし庭や秋桜

塾帰る子ら高き声秋しぐれ

岡山 三村 白柳

仙台 若生 蒿匍

福島 秋葉 紅風

高砂 柳 穆水

東京 石井 清勝

岡山 三村 白柳

岡山 三村 白柳

鈴生りをちぎる手もなし五戸の柿

歓迎の猿も出て居る紅葉狩

山口 福井 正坊

一番に受験子の部屋障子貼る

夕焼が帰る子供の背中押す

東京 原田 苔石

碧き眼のしばし佇む菊人形

山梨 佐竹 俊明

秋の滝細く萎えて落ちにけり

金沢 山田 省一

文化の日われにはいつも明治節

岐阜 松野 啓子

盛り付けに紅葉を添えて龍田揚げ

千葉 岡田 正秋

落葉踏みスミス支隊の碑に詣つ

小牧 栗木 栄三

山里の大根洗ふ水清し

東京 藤田 路水

小菊鉢当分テラスの王者なり

金沢 野村 義夫

夕風に枯葉が鳴りて鳴翔ちぬ

藤枝 渡辺 みつ

眠むれぬ夜木の実の落つる音がする

横浜 仁尾 久美

猫たちの毛並ほっかり小春かな

富山 城山 曉舟

雲去るや婦負野にのこる帰り花

ひとこと

年が改ります。郷友俳壇に、この頃新しい方の参加がふえて力強いことです。高齡の方が多い同人の皆様のご健康を何よりもお祈りいたします。そして作句の方も肩肘張らないで平明に叙するよう、お互に心掛けて行きたいと存じます。

近 詠

野島 一良

今生のかく美しき十三夜

旧道の家並は低し十三夜

投句締切 毎月十八日必着。(翌々月号で発表)。その時季の雑詠五句以内。葉書に明瞭な字体で。

宛先 186東京都国立市東二一十二一十六 野島 一良宛

森 武次選

宮城 高橋 覚

○みどりこき下北の山にせせらぎをききつつひたる葉研の出湯

冬を呼ぶ川面に群れたつ白鳥を飽かず眺めて友は動かず

宮城 若生 活穂

秋天の雲の切れ間を音高きへり編隊のゆくは頼もし

福島 伊藤喜代子

信号機をしっかりと見て園児行く秋祭過ぎ

て静かなる朝

在りし日に夫丹精の盆栽の松の枯葉を沁々と取る

福島 渡辺 ミツ

しみじみと月の光に浸りけり澄み渡る秋の十五夜の宵

埼玉 鈴木 幸江

くり返し古枝くはへて庭の木に巢作り忙し野鳩の住処

埼玉 今村 千代

○富士晴れて木犀の花かほる日に君うるはしき人をめとりぬ

千葉 岡田 正秋



○旧中の入試にありし司令部の羅南・龍山
今も忘れず

千葉 植弘 親孝

○靖国の社に集ふ戦友の顔徳やかに眼凛々
しく

東京 横山 三郎

○落葉焚く煙ながれてしづかなる陸軍暮地
に日はあたたかし

○水揚げをされたるさんまおどりのて銚子
港に秋光るなり

○ゴム林に落葉積れば空見えて秋匂はせしビ
ルマ思ほゆ

東京 坂 美貴子

○風吹きて枯葉とまがふ黄の小蝶我が先達
か先先を飛ぶ

枯れすすき延々続く川端を物思ひつつ歩む
ひと時

○師の歌集机上に置きて折々に味はふ幸も
秋の夜ながは

東京 石橋 松茂

金箔に新装なりし金閣寺日に照り映えて光
目を射る

東京 松田千代子

空高くボール飛ぶ日の養護校車椅子の児明
るく笑ふ

東京 吉岩 藤子

○山なみのハイク楽しき道野辺の秋の七草
さがしつづく

白枿仏案内くれし先輩は故郷遠き沖繩にあ
り

神奈川 斎藤 信子

梅の実の種子を噛み割り中を見し少女時思
ひ梅干ふむ

石川 高桑 與三

○四十年さがし続けし戦友の消息遂に知り
て電話す

○十葉を採りたる妻は汗ばみて強きにほひ
の手にて茶をのむ

岐阜 松田 要二

○本堂に集ふ十夜の子らの声弥陀笑み給ふ
み燈ゆらく

○藁灰に埋む炭火の大火鉢囲む手と手に心
も通ふ

兵庫 泉 美冴

○兵營の頃よりありし大銀杏今高校の庭に
もみぢす

島根 長岡 利勝

岡山 三田 久代
柔道の連覇者藤金メダル仰ぐ国旗に大つぶ
の涙

岡山 三村 白柳

鈴なりの真赤に熟れし富有柿ちぎり手なき
か五戸の村里

高知 古谷 進

○鬼百合の花仰ぎつつ音に聞く巴御前を偲
びるにけり

高知 和田 稔

今しばし菩薩であれな吾妹子よ酒と寝て我
極楽にあり

○大君の御病癒ゆる願ひもて飼ひぬし鯉を
河に放ちぬ

高知 浦田 信

泣けや泣け夜のしじまを切れきて其を聞き
居れば嬉しうむかし

雨晴れの桶のこもれ日朝霧らひ社のいらか
いよよ神さぶ

高知 別役 重具

朝の気の寒さ増しけり野に群るる秋桜なべ
てま露に垂れて

高知 大畑 元宏

高知 森下 剛

○朝御食を仕へまつりてひたむきにおほみやまひの癒えませと祈る

高知 弘瀬清一郎

谷川の水面まばゆき木洩れ日に蜻蛉は群れて羽休めをり

高知 中田 憲秀

○山の上ゆ落ち流れくる真清水の岩肌ぬらしたまじだの生ゆ

◎しぐれする大和島根のしもつきをはや癒え給へとこひのみまつる

高知 中平 憲白

○この先もわが領土なり島々に慟哭伝へよオホツクの海

来てみれば霧の摩周湖晴れあがり刃の如く深く澄みをり

長崎 荒木あけみ

久久に里に帰りて老いを知る友は皆逝き二代目ばかり

前東京 勝又 正弘

南海の風土満喫沖縄の七色の海紺碧の空

東京 勝又 正弘

哀調を帯びし民謡アリランの惜別の情深まる五輪

神奈川 大関 民雄

御不例の陛下に代り神嘗祭皇太子様の頼もしきお姿

年年に友の減りゆく仙台の六十回目のクラスの集ひ

◎選後小記

○今月は、三五名、一三一首の中・四五首を採った。

○御不例の天皇陛下の御平癒祈願の歌が多くなつた。中田憲秀氏の一首を秀歌として推した。

○原稿は、前々月の十八日迄、直接左記へ。

記

◎21川崎市多摩区南生田一―二―二三

森 武次宛

選者詠 入院感有

病む我に天来の声響きたり攻撃によりつとめ果せと

慎しみて死を思ふとき越えて来し幾山河はさやけかりけり

幽世の友も交へて酌む酒に山鶯も来鳴き響動す

ひとときも別れを先に押しやると飲めざる酒をしきりに喫む

看護婦の背高に見ゆるあしたなり責めたる吾の自己嫌悪深し

梅雨入りに若竹細く天を衝き遠近四段の緑は深し

白湯をのみ目薬つけて寝に就く自重自愛の一日終れば

病院に家事もつとめも変らざる服装を為し女出勤す

病棟を一步出づれば朝毎の空気はあまく我を待ち居り

役人の対応見れば安政も昭和の御代も変り有るなし



大森 風来子選

鼻くそが目くそを笑うリクルート

税金を払わぬ議族の税国会

永田町国を忘れて猿芝居
朝市の松茸一本一万円

神奈川 内山 昇

評Ⅱはじめの三句は、いまの国会と国政の進め方について鋭い批判の目が光っている。その中で第四句は、この松茸が飛んで売れる世の中だから面白い対比である。

東京都 石井 清勝

堂々と替え玉が出る草野球

仕事では妥協趣味では我を通し

廃坑の名残りに安全帽一つ

末席の方から倒れる空跳子

評Ⅱ第一句、替え玉は何処の社会でもよくあること、舞台を草野球としたのも面白い。第二句、仕事のストレスを趣味にぶつけているのでしょう。

岡山県 三村 白柳

大橋に明暗分ける後遺症

マルコスに負けずと疑惑ジョンファミリ

税制に待ったをかけるリクルート

悪口の上手なブツシュの方が勝ち

評Ⅱ大橋は、いわずと知れた瀬戸大橋である。権力に対する疑惑は、私の知る限りでは、ブラジルでもペルーでもあるらしい。日本のリクルートも氷山の一角で、合法的且つ紳士面をしているに過ぎない。

宮城県 若生 勝緒

稲不出来それでも新米ありがたし
ママさんバレー男を凌ぐ闘志見せ
ひねもすを孫と童心園芝生
五時の市秋刀魚余さず買われゆき

評Ⅱとくに五時の市がよかった。

岐阜市 松田 要二

雄弁が多弁なれども味が無い

政治とは何するところリクルート

潔ぎよく辞職せる裏含みあり

なぜ起こす静かに眠る藤の木を

評Ⅱ第三句は、社会党の辞任を指しているが、やめさえすれば罪の意識がないというのも面白い。第四句には深く脱帽。

岐阜市 松野 啓子

テレビ劇カイワレ族の新語生み

芭蕉ブーム細道サミット村おこし

税制を守るも攻めるもリクルート

株を撤くアメダスのよう野に山に

評Ⅱ第三、四句は、とくに税とリクルートに焦点をあてたいい発見である。

岩国市 岩政 寛隆

ひとの非をかくしビデオであばく策

数だけで質は問わない民主主義

手造りの杖が老いの手に馴染み

地獄でも履きたい地下足袋買うてくる

評Ⅱ第一、二句は国会批判の句である。

第三、四句は、老いてなお、かくしゃくとして生きてゆこうとする心意気が感じられる。

千葉県 岡田 正秋

郷友連盟企画 日韓親善の旅

老人が標的添乗カメラマン

榮譽礼受けて老兵硬直す

二度と訪えぬ旅のフィルム黒長帯

評Ⅱ第一句の標的は、添乗カメラマンの営利の槍玉になった商魂をチクリと批判している。第三句の黒長帯は、自分のカメラの失敗を詠んだもので面白い。

広島市 坂井 愁山

元旦の日の出無心に待つカメラ

三世代心新たに屠蘇祝う

所得税年金は何んと雑所得

評Ⅱ第三句は、税制改革で、年金が所得から雑所得へ格下げになる不満をもちたものである。

佐世保市 荒木あけみ

靈感商法だまし取られてまだ信じ

馴れ合いの会期延長歳費食う

一つずつ歳を減したい除夜の鐘

北海道 八木 柳雀

爺さんになってネクタイ赤をしめ

下積みの苦勞が生きて名監督

日の丸が立つのは何時か北の島

久留米市 執行 実

椰子の水末期の水と飲んだ過去

戦友会昔語り之夜が白む

再会を酌めば同期の花の数

岡山市 三田 久代

名城の土蔵は崩れさびれゆく

甥っ子は大内賞を手にしたり

注||大内賞は、若い医学者に功勞のあつ

た者をたてる賞。

トトカルチョ高校内まで這り込み

(選後に)皆さんが熱心に投句して下さる

ので、私も真剣に一人一人と対面し、対話

を試みながら選にあたっていきます。時には

作者の思いを汲み上げて、添作をすること

もあります。お許し下さい。

今月も全般に心のこもったいい作品が多

かったと思います。

☆秘書三日雲がくれさせ辞任する 選者

投句は、毎月十八日まで左記へ

〒701-42 岡山県邑久郡邑久町山手 選者宛

(郷友柳壇と明記)

良書推薦

解説付き写真集

「北方領土と海峽防衛」

昭和六十三年十一月

このたび、国民新聞社が、創刊百周年記

念事業の一環として「北方領土と海峽防衛」

と題する解説付き写真集を発刊され、早速

ご寄贈を受けた。

沖繩本島の四倍の面積を有し、防衛上は

云うに及ばず、豊富な天然資源にも恵まれ

ている北方領土の返還は、我等日本民族永

年の悲願であるが、これを頑固に拒み続け

ていたソ連にも、漸く前向きの曙光が見え

始めた折、寛永年間以降の詳細な関係年表

や、貴重な各種文献を添え、また、戦前、

北海道庁千島調査所が丹念に調査収集した

秘蔵の五百余枚の解説付き写真により北方

領土問題が一目して理解できる好個な資料

である。

また、海峽防衛は、国防上最喫緊課題と

して日本戦略センター、多年の研究成果の

総結集であり、共に我が国防衛戦略上の観

点からしても、関係者の見逃し得ない貴重

な文献として必見をお勧めしたいところで

ある。

(倉岡理事長)

本書はA四判、上製、函入り、三七三

頁、全解説付き収録写真五五〇枚、

定価は三万円であるが、会員でこ

希望の方は左記にお申し込めば、

定価の一割引(送料込み)二万七

千円。代金後払いで直送される。

記

有限会社ヒューマンドキョメント社

〒162 東京都新宿区住吉町一―一六

フジテレビ第2別館

電話〇三―三五八一―八二七五(直)



おかげさまで連続20回。今年も一緒に勉強しましょう。

日本郷友「連盟防衛講座」

連盟は、原則として毎月第三土曜日の一八〇〇から、東京・九段の偕行社で「防衛講座」を開催し、安保・防衛問題を中心に、主として自衛隊OBの専門家を講師に招いて勉強を続けていきます。

テーマは国際軍事情勢、防衛政策、防衛戦略・戦術、戦史、軍事技術、民間防衛などの中から選定し、少数人員によるリラックスした雰囲気のもとに、具体的かつ地道な知識習得による防衛理解を図ることを目指しています。

基礎的事項を含む平易な解説を主眼としており、どなたでも参加できる気軽な集まりです。特に、女性を含む若い方々の参加を歓迎します。ご希望の方は左記に電話して下さい。

社団法人・日本郷友連盟本部

〇三―三四一―四三八六

代表世話人 担当理事・矢部廣武

〇三―四四五七―一四二〇

同

同

後藤修一

〇四五―二四二―四七一四

昭和六十三年の実績

- ★一月「米国防政策の変遷」 梶本 節、★二月「INF後の西欧の防衛」 千田 稔、★三月「化学戦入門」 大場昭彦、★四月「イ・イ戦争」 佐藤文夫、★五月「専守防衛について考える」 横地光明、★六月「日米安保体制の問題点」 吉原恒雄、★七月「軍用航空機の現状と将来」 立山尚武、★九月「軍事先端技術とSDI」 徳田八郎衛、★十月「核兵器・核戦略・核政策」 阿達憲、★十一月「国防の基本に関する考察」 倉岡愛和、★十二月「航空自衛隊の戦力」 稲葉由郎

◎天皇陛下の御不例に關しては国民等しく御憂慮申し上げているところでありますここに一日も早い御平癒を只管御祈り申し上げます。

◎読者の皆様様も、益々ご健勝にて、よき新年をお迎えのことと存じます。

新しい年を迎え、更に心を新たにしてお郷友誌の発行、編集に万善の努力を致す覚悟、何卒、倍旧のご支援とご協力を懇願申し上げます。

なお、今年も例年のとおり、各方面、多数の方々から、迎春広告のご協力を賜わり深謝の至り、年に一度の紙上に於ける挨拶交換は、お互いの消息を知り、更に好誼を深め、団結を強化するのに大変意義あるものと信じます。

◎年頭の辞で、田中会長代行が、連盟の今後の行くべき道を明示されております。

三月の全国理事會、總會に於て、万場一致を以て新會長を選任し、新會長の下、會員一同一致團結して、崇高な連盟の使命達成に邁進する必要を痛感します。

◎本誌に於て屢々識者が指摘して来たように、誤った「東京裁判史觀」の普及と定着によつて、大東亞戦争は素より、遠く、日清、日露の戦迄遡つて、それは總て日本の侵略戦争であつたと規定し、マスコミ、教科書の記述は云うまでもなく、政治の責任の衝に存る者迄が「侵略戦争」であつたと公言して憚らない、誠に嘆かわしい実情かくて、靖国神社の公式参拝すら省みられず、今や、七五〇万護国の英靈は正に、犬死であるとすら云われる仕末であります。

我々は何としてでも、この迷妄を打破し誤つた觀念を啓蒙し、今や、内外歴史学者の多くが認定する。大東亞戦争の正しい歴史的事実を、在りの儘に子孫に伝える義務と責任を痛感します。

新年に當つて、三上照夫先生の「大東亞戦争（太平洋戦争）は日本の仕掛けた侵略戦争か」を筆頭記事として掲載する所以であります。熟読啓蒙の資にされることを強く念願します。

◎毎年、新年に、高邁な人生哲学を解説して頂く会友、大塚道廣先生から、今年も又、貴重な論文をお寄せ賜りました。

道義地に陥ち、精神は無視され、物質万能の混沌たる現在の社会に於て、眞の人間らしく生き抜くための、貴重な人生指針を明示されたものであります。

◎奥田鑛一郎先生の「終戦秘話」は月号で終りました。必要な備えと、精到な訓練と、必勝の信念と、着実な実行さえあれば、何時、如何なる場合も何物も恐れるに足らずの感を深くします。今後我が国の防衛を考える場合十分な示唆を与えるものと思ひます。

郷友 (第三十五卷第一号) (通巻第四百七号)

発行兼編集人 赤羽根 徹ちやく

発行所 Ⅱ 社団法人日本郷友連盟

〒一六〇 東京都新宿区若葉一

丁目二十一番地

電話 (341) 四三三八六

(331) 二三四四一・二三四二二

毎月一回一日発行

定価・一部二百六十円(送料共)

振替口座・東京四一七一八七七

印刷所 Ⅱ 共同印刷株式会社

〒一一二 東京都文京区小石川四

の十四の十二

電話・案内台 (817) 二二一一

帝国陸軍編制総覧

元大本營參謀
井本熊男 監修
元防衛庁戦史編纂官
森松俊夫(前篇)
戦史研究家

■明治建軍以来の陸軍編制の変遷を七つの時代
区分で概観 編制史概説 官衛、軍隊、学校、
特務機関等の編制と主要人事を網羅(中央官衛
は課長級以上、軍隊は聯隊・独立大隊以上の司
令官、師団長、団隊長、幕僚等の氏名を記載)
■戦闘序列を重視した構成で、編制史や戦争史
のダイナミズムを表現する画期的な方法を採用
■常備部隊配備表、平時編制と戦時編制の区分
図など豊富な図表掲載 官衛・軍隊・学校・特
務機関別の索引作成 ■本天金使用・美装上製本
価七〇、〇〇〇円

陸軍オールド部隊名鑑

美春書房PJ T編 「帝国陸軍編制総覧・索引」 陸軍八十年の
歴史を検証する座右の資料。収録部隊約一万! 2800円

天皇と軍隊 明治篇

須山幸雄著 天皇信仰と軍人精神はいかに結びついたのでか!
近代立憲の国家発展過程に見る天皇と軍隊の関係 2800円

侍従武官日記

四電孝輔著 海軍侍従武官として八年間、大正天皇に仕えた著
者が、知られざる宮廷内部の様相を克明に謹書 3300円

陸海軍将官人事総覧 陸軍篇全一卷

上法快男監修 陸軍篇(陸士四十五期迄) 150000円
外山操 篇 海軍篇(海兵五十八期迄) 130000円
全将官及び主要軍人の履歴を年々日迄収録した大資料!

芙蓉書房出版

文京区弥生2-1-11 ☎03-8133-4466
振替 東京61351361 出版目録無料送呈

初回は切手300円で見本誌を送ります。

実物交換会誌

旧日本陸軍・海軍 実物 軍装品

■出品500点以上 ■定価500円 ■10日発行■

戦中の木竹自転車・戦後のジュラルミン自転車
犬養毅(木堂)関係品、特別高価買い受けます。

旧軍隊関係の品物、何でも現金化します

交換誌 襪 襪 S、係

〒710 岡山県倉敷市鶴形2-5-15
郵便振替口座 岡山6-11331

☎0864-22-9383

お知らせ

裏表紙広告の西村古徳先生の著書「和方健康食の
極意」は、郷友会員・会友に限り二割引き六〇〇円、
送料二〇〇円、計八〇〇円で頒布されます。振替又
は現金書留にて次に申込み下さい。(編集部)

株式会社・文化創作出版

〒150 東京都渋谷区神南一―四―二 神南ビル
振替口座 東京一六―六五二二六
電話 ○三―四九六―四二五―(代)

my BOOK

マイ・ブック

◆日本人には日本人の食べ方があった——武家和方法
初公開!!

“薬”無用

和方健康食の極意

あなたは病気知らず体になれる
病気にかからない／医者いらす
単味で治す／ガンを制圧する／
精気を生み出す／諸病を治す

武家和方法宗家

柳生軒第十四世

西村古徳

● 価 750円

良書推薦

昭和五十七年二月号以来今日迄（時に紙面の都合、筆者
交通事故で休載したことがあります）郷友誌に「武家和方法
活法に利用された薬用植物及びその他の薬剤」として連載
を続けて参りました。武家和方法宗家・柳生軒第十四世
・西村古徳先生が、この度武家時代より今日迄蓄積された
「武家和方法」に関する、それこそ正に汗牛充棟の資料を
駆使し、そのエキスを抽出して集大成された珠玉の書「和
方健康食の極意」を出版されました。

明治以来、西洋医学に殆ど依存してきた我が国の医学界
が今や漢方・和方の見直しにより、病気に罹ってから局部

的な治療をするより、体全体の機能を向上して病気に成ら
ない体力造り、即ち薬無用の体造りを注目する趨勢に向い
つつあります。

本書は正にその大方の要望に答え、今日迄門外不出であ
った「武家和方法」の真髓の公開に踏み切ったもの、しかも
その極意の実行は多大の金と時間を要するものではなく、
その極意さえ知れば日常生活の間に容易く実施出来るもの
であります。病気知らずの体になるため、一家に一冊この
書を備え付け、十分味読し、三度の食事に応用されること
をお薦めする次第であります。

（編集部）

文化創作出版

〒150 東京都渋谷区神南1の4の2
☎03(496)4251(代) / FAX03(496)4252